

---

# 夏の星～河上彦斎異聞～

谷津矢車

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夏の星〜河上彦斎異聞〜

### 【Nコード】

N9689D

### 【作者名】

谷津矢車

### 【あらすじ】

幕末・京都。池田屋事件によって尊攘派志士たちが浮き足立っていたそんなころ、京に密かに入り込んだ人斬り・河上彦斎。京にて方々駆け回る奇才・佐久間象山。そして、ただただ日々を生きる一橋家の侍・棚橋。その三人の思いが、ぶつかりつつ、ときに重なりつつ、歴史の流れに巻き込まれていく…。

いやに熱気を含んだ風が、棚橋の頬を撫でて、抜けていった。

その風は、同じく熱風吹きさぶ京の夜に向かい、逃げていった。その様子を棚橋は目で追おうとしたものの、風はそんな棚橋を待つてはくれなかった。

「京は、イヤに暑いな」

同僚の柳の言葉に、棚橋は提灯片手に頷いた。

「ああ。今日は、本当に暑い」

柳は、呟くように続けた。

「あゝあ、江戸はいいよなあ。海風があつて結構涼しいし、それに隅田川の花火なんかもあつて活気があつて、暑さなんて忘れちゃうのにな。まったく、留守組はいいよなあ」そう呟いて、柳は黒い紋付の襟を広げてパタパタと叩いた。

柳の言葉に、ああ、コイツがさっき言っていた「きょう」というのは、「今日」ではなく、都たる「京」のことなのだ、ということに、棚橋は思い至った。

棚橋は柳を嗜めた。

「おいおい、我々は、殿の上洛に従つてここまでやってきた身だぞ？それをお前は……」

「へいへい。お前のいう通りでございますねえ。殿様の上洛に同行できるなんて榮譽、そうはないんだよな？」

と、どこか皮肉を感じさせる物腰で、柳は言った。

「わかつてるならいいが」

棚橋は、闇に沈む京の都にどこかうすら寒さを感じながら、闇の続く細道を早足で先導していった。

棚橋と柳は、一橋家の家臣である。

一橋家、というのは、いわゆる「御三卿」の家である。

御三卿、というのは、享保の改革を行なったことで有名な徳川吉

宗が新たに創設した家で、徳川宗家が断絶した際に、宗家を相続する血筋の人間を用意しておくための家で、田安・清水・一橋の三家のことである。家格としては尾張・紀州・水戸徳川家に次ぐ地位にある。変動はあるが、一応10万石を幕府から安堵されているが、大名ではない。

と、いうのも、御三卿の家の家臣たちは、徳川宗家から出向してきた家臣が多かったこともあるし、それ以上に、御三卿は領国経営を徳川宗家に任せていた。つまり、御三卿は徳川宗家のいわば「外局」として存在していた家らしいのである。それが、次期將軍を輩出できる家系でありながら、けれど領国経営が任されていた御三家との相違点である。

柳は、元は徳川宗家の旗本だったが、最近の人事異動に伴って一橋の家臣団に加わった者である。だから、どうにも殿に対する忠誠が薄い、と柵橋は常々感じている。

「でもよお」柳は、うんざりしたように言った。「ウチの殿様は、とんでもない人だよなあ。大樹公（將軍のこと）よりもはるかにやり手なんじゃないか？」

その言い分に、柵橋は笑った。

「ふん、柳、お前確か、殿がももんじゃをお召し上がりになられたときには、“ああ、これで名家・一橋の権威も地に落ちた”って嘆いてなかったか？」

「それは、昔の話だ」

柳はそっぽを向いて唸った。

ももんじゃ、というのは、獣肉のことだ。

当時、獣肉を食べる際には、薬膳、と称したり、あるいは魚だ、と、世間を、あるいは自分を偽って食べていた。獣肉を食べるのは不浄である、という、道德観念が江戸時代の日本にはあったのだ。

だが、その「不浄」なことを、最近水戸家から養子に入った「新参」一橋公は好んだ。

『余は豚肉が好物である。なにせ、旨いからな』

と、自分の味覚を優先させる言葉を述べて憚らない。

さすがに、一橋家の家老は慌てた。

『殿！またそのような不浄なものを……！！』

だが、一橋公は青筋立てるその家老に言つてのけたという。

『おお、お前も一緒にどうだ？旨いぞ、ももんじゃ』

伝え聞くところによると、その家老は怒りの余り、頭に血が上り、昏倒してしまつたという。

この話は、噂話とお偉方の不祥事スキヤンダルが三度の飯より大好きな江戸っ子の人口に膾炙するところとなり、殿のことを「豚好きな一橋公」、縮めて「豚一公」と呼ぶのが大いに流行つた。もちろん、一橋の家臣団が、大いに恥じたのは言うまでもない。

「だつてよ」柳は、闇に沈む京の小路を歩きながら、言った。「豚肉を食うくらいがなんだ？大したことはないじゃねえか。確かにあの殿は、少々粹はまに嵌らないところはあるが、だが破格の人間だよ」「はは、その“大したことじゃない”ことを、お前は当時問題にしていたらうが」

と、柵橋は苦笑いするしかなかった。

「ま、そんなことはさておき」柵橋は言った。

「さておき？」

柵橋は続けた。「早く家路を急いだほうがいい。京での立話は、危険だ」

不意に真面目な顔をした柳も頷いた。「違いない。京は危険だ、と聞いてはいたが、まさかこれほどとはな。今まで俺たちが刃傷騒ぎに巻き込まれないのが不思議なくらいだ」

「柳、もしものときは、頼むぞ」

「おうよ」柳は、左手で大刀の鍔元を手に持ち、笑つた。「お前、昔から剣はカラキシだからな。んで、千葉先生によく苦笑いされてたもんな」

「うるせえやい」

柵橋は、また苦笑いするしかなかった。そして、そのまま闇が支

配する、せいぜい二人がすれ違える程度の小道の先を眺めた。

いつも思うが、と、心の中で前置きしてから柵橋は思う。

京の通りは、暗殺にもってこいだ。

京都の大路が碁盤目状に広がっているのは有名だが、小路だって大路の影響を受けるのは当然の事だ。大体、小路というヤツは大路の裏道として作られることが多いのだから、なんとなく大路に寄り添うように延びるものなのだ。つまり、京の道は、大まかな碁盤目の中に、細かい碁盤目がぎっしりと詰め込まれている、そんな感じなのだ。

そういう町割だと、当然待ち伏せがしやすい。十字路というのは、身を隠すにはもってこいだからである。

さらに言えば、包囲だつてしやすいはずだ。ある小路で、前を塞ぎ、そして後ろも同時に塞いでしまえば逃げ場はない。そういう挟み撃ちが効果的に発動できる。

通りで、暗殺がはびこるはずだ、と柵橋は苦笑いする。

「だがよ、俺たちは標的にならねえよ」柳はうそぶいた。「だって、俺たち、まだまだ下っ端だぞ？尊攘の連中だつて、俺たちみたいな小物に付き合つてる暇はねえよ」

「はは、違いない」

柳の言うことは、謙遜ではない。

「豚一公」の上洛に従つて、上洛した柵橋たちが愕然としたのは、京の治安の悪さであった。三日に一度は首が飛ぶんだな、と冗談交じりに呟いた上役の首が、その三日後に飛んだときにはさすがに驚いたものだ。けれど、その上役はかねてから「暴力でしか己を語れない馬鹿者ども」と、暗殺を「天誅」の名の元に繰り返す連中を批判していたから、そういう「暴力でしか己を語れない」手合いに斬られたらしかつた。そう、上役は「天誅」されたのだ。

柵橋には、まるで理解できなかった。

正直を言えば、その上役はそんなに好ましい人間じゃなかった。

むしろ、積極的に言えば嫌いだった。でも、話のわからない人では

なかったし、彼の「暴力でしか」云々の発言は正論に思えた。なのに、その上役はまるで蚊でも潰すかのように殺された。

だが、一方で理解したこともある。

“尊攘の連中に目をつけられない限り、殺されることもない”

いつも暗殺されるのは、名前の知れた人間ばかりだ。逆を言えば、あの人が死んだ、と聞いたときに、ああ、惜しい人を亡くしたな、と面識のない人に悼まれるほどに名の知れた人間で無くば殺されないのだ。

そのことに気づいてから、棚橋は出来るだけ目立つ行動を控えた。20歳を過ぎた遊び盛りではあるが、出来るだけ歓楽街には近寄らず、日々の雑務に没頭した。そのおかげか、今まで首がつかつてい、と棚橋は胸を撫で下ろしている。

だが、一方の柳はそういう危機意識が低い。よく歓楽街に足を運び、酒を飲み、時には喧嘩をして帰ってくる。それを棚橋は咎めたことがある。

『お前、もし尊攘の連中に目をつけられたらどうする！？』と。すると、柳は決まってこう言うのだ。

『は、心配する必要ないだろう？だって俺たちは下っ端だぞ？いくら尊攘の連中が暇だからって、俺みたいな小物を襲うはずはねえだろう？』

まるで、何かの免罪符のように、“小物”という言葉振り回す柳に、継ぐ言葉は見つからなかった。そう、まるで、“暗殺”という京においては間違いなく一般化している出来事を、自分から遠ざけるかのように。

「まったく、心配性だなあ、お前は」柳は右手で棚橋の背中をバンバンと叩いた。

「心配しても、し過ぎることはないからな」棚橋は、柳の手の衝撃に震えた声を出した。

「大丈夫だよ」柳は言った。「池田屋事件、あれで尊攘の連中の主だった奴らは皆捕まったからな。たぶん連中、今頃浮き足だって





池田屋事件、というのは、この年の六月、つまり先月に起こった、不逞浪士たちの一斉摘発のことである。下っ端の柳たちは、“尊攘の連中の親玉が捕まった”という認識しか持っていない。だが、後世から見れば非常に有名な事件である。

この事件で、宮部鼎蔵という大物志士が死んだ。また、吉田俊麿という、吉田松陰の弟子が死んだ。だが、それ以上に、近藤勇率いる新撰組を一躍有名にした事件として後世知られることになる事件である。この事件において大きな殊勲を立てた新撰組は、この事件を境に歴史の表舞台に上ることになった。

とにかくも、この事件で、当時の尊攘派志士たちは頭を失った。

「だから、なお一層俺たちに構ってる暇は無いつて」

「まあ、確かにな」

棚橋も納得したふりをしたが、本心では疑問を持ったままだった。確かに、池田屋事件を以って、尊攘の連中は頭を失った。だが、それは、更なる混乱を生むのではないか。頭を失った猛獣は、頭を失ったことで却って手に負えない化け物になるのでないか。そういう、漠然とした不安が頭をよぎった。

「しかし、なあ」

感慨深げに、柳は口を開いた。

「ん、どうした」

「俺たち、殿様に従っているうちに、とんでもない所まで来ちゃったよなあ。こんな、激動の、京の都によ」

「そうだな」

棚橋は、「激動」という、実体のない言葉を口で転がした。だが、実体のない言葉は無味無臭で、何のどっかかりも残さずに心の澱おりに加わっていった。

歴史にもしもはないが、もし、「豚一公」がただの馬鹿殿だったなら、棚橋も柳も、京などにはいない。いや、豚一公が卓越した政治家でも、もしこの時代が平穏だったなら、棚橋も柳も江戸で勤務をしていたはずだ。

この時代は、柳の言葉を借りるなら、「激動」の時代だった。

嘉永六年、ペリー率いるアメリカ艦隊が、浦賀に現れた。いままでは、東北や長崎などに異国船が現れたことはあった。けれど、浦賀という、当時の経済・政治の中心地江戸に近いところに異国船が現れたのである。しかも、ペリー艦隊は当時最新鋭だった蒸気船でやってきた上、搭載されていた大砲をチラつかせながら、日本の開国を迫った。

これは当時の政権担当者にとっては脅威だった。これまで異国船といえば、遠く海洋上に浮かんでいるだけでそれほどの、言い換えれば幕府を脅かすほどの、脅威を感じていなかった。それに、日本側に接触してくる異国船もあったが、そのどれもが紳士的だった。まるで武力をチラつかせず、交渉で以って日本と交易を持つと考えているようだった。なので、幕府は交渉をはぐらかしてやりすこした。

だが、ペリーは違った。

とにかく、もし開国を断ろうものなら、砲弾を江戸の街にぶち込むぞ、と言わんばかりに空砲を打ち鳴らしていた。そして、はぐらかしも通用しなかった。アメリカ人らしく、「YesかNoか」と迫ってきたのだ。もっとも、日本側にNoの選択肢は用意されていなかったのだが。

そんなアメリカ側の居丈高な態度に、幕府は屈した。

結局、日本側は、200年間ほどの国是だった、「鎖国政策」(正確には、「制限貿易政策」とでも呼ぶべき性質のものだが)を撤廃することになった。

それに伴い、混乱が始まった。

元々、以前まで行なっていなかったことを行なった、ということ

も大きい。皆、手探りで「開国」という新たな現象のありようを模索したのである。

だが、開国に伴って、日本中に嵐が吹きすさんだ。

国内の金・銀レートと、諸外国のその相違によって、金が外国に流出してしまった。また、外国との貿易によって得られた輸入品が、国内産業に影響を与えるようになった。

結果、物価の高騰、諸産業の停滞など、開国による悪影響が確かに出たのだ。

結局、誰しもが「開国以前の方がいい暮らしを営んでいたのではないか？」と疑問を抱き始めたころ、憂国の士と自称する「志士」と呼ばれる人々が台頭するようになった。

「日本がこんなにも貧乏になってしまったのは、開国のせいだ。そして、開国などという重要な案件を、この国の主たる天皇にお伺いを立てることなしに断行した、幕府の責任は重い」

「それだけではない。外国の連中は、神州日本を貪るだけ貪って、力が弱まったときを見計らって属国化するに違いない。清を見よ。清はエゲレスのアヘンなる薬によって骨抜きにされ、戦争に負け、所領の一部を奪われているではないか」

こういった、尊皇攘夷の志士たちの言葉に、同調するものは多かった。そして、同調者たちは訊く。「これから、日本はどうしたらよいのか」と。

すると志士はこう答える。

「鎖国しかない。また、諸外国との国交を断ち、一戦交えるしかない」

「いいや、それだけではない。政治的な失策を行なった徳川家、その罪は明らかである。ならば、徳川家から力を削いで、天皇親政による政治体制に戻すべきなのだ！」

これを以って、尊皇攘夷（略して“尊攘”）の志士たちが出現する。

要は、開国の混乱の際に、日本は己のアイデンティティに疑問を

持った、ということなのだろう。徳川でよいのか？このままの社会体制で、果たして我々は外国に抗することが出来るのか？

そんな疑問が、日本中をまるで流行り風邪のように駆ける中、尊攘の志士たちが、歴史の表舞台に立つ事件が起こる。

安政七年、三月三日。桜田門外の変。

徳川幕府の大老が、白昼堂々に暗殺された。しかも、「藩」（當時はそういう呼び方をしていなかったが、便宜上そう呼ぶ）から抜けた、つまり「脱藩」している浪士の手による事件だ、ということも衝撃だった。

つまり、この事件は徳川幕府の実質的なトップが、何の後ろ盾もない浪人風情によって殺された、という事件なのである。つまりは何の後ろ盾がない者であっても、テロルという手段を用いれば幕府の体制にも影響を与えることができる、ということを目撃の元に晒してしまった事件なのである。

テロルに有用性を感じた志士たちは、そのうち好んでテロルに手を染めることになった。権力を持たない志士たちは、己の意に沿わない人物たちを、刀によって黙らせるようになったのだ。そして、血で汚れた刀を振りかざし、尊皇を謳った。攘夷を叫んだ。

まさに、血風である。

そして、このテロルの風潮は、京にも飛び火した。この現象は、「政治」というものの焦点が、江戸からズレたことを如実に語っている。つまり、この時代、政治の中心地は將軍の居る江戸から、天皇がおわします京に変わったのだ。それは、幕府の権威が失墜したという現れでもあるし、逆に朝廷の権威が高まった、ということでもある。とにかく、朝廷の動向を、幕府さえも無視できなくなっていたのだ。

そのような時代だったからこそ、「豚一公」は京に上り、朝廷との連携に腐心している。そして、その「豚一公」の供として、柳たちが上洛しているのである。

上記で述べたような歴史の動きを、棚橋たちは全て把握をしては

いない。だからこそ、全く実感が持てないでいるのだ。自分が現在京にいる、という事実そのものを。

柳は、感慨深く夜の空を眺めた。そこには満点の星が輝き、二人を見下ろしていた。

「なあ、知ってるか」

不意に、柳は言った。

「知らん」棚橋は愛想無く切り返した。

まあ、そう言うなよ、と前置きしてから柳は続けた。「なんで、夏の星は瞬かないか、知ってるか？」

そういえば、そうだな。棚橋は提灯を持っていないほうの手でアゴを撫でた。

冬の星は、まるでさめざめと泣く乙女の目のように瞬いている。だが、どうしたわけか、夏の星はただ光っているばかりだ。

答えあぐねている棚橋の横で、柳は答えた。

「俺の親父が言ってたんだが、夏の星は、人の志で輝いているんだ」

「志？」

棚橋が訊き返すと、柳は懐かしげに続けた。

「ああ、親父がよく、隅田川の花火の帰りに言ってた。“夏の星っていうのはな、人間の志で輝いている。だから、こんなに燦々さんさんと輝いているんだ。お前も、夏の星のように、瞬かない男になれ”って言ってたよ。もつとも」柳ははにかんだ笑顔を、腕でごしごしとさすってから続けた。「隅田川の花火の帰りじゃあ、花火で目が焼けちまって、星なんて見えないんだが、な」

「はは、そうだな。でも」棚橋も空を眺めた。「よく見えるじゃないか。ここなら」

棚橋の目の前には、志に身を焦がす男たちのように、まったくブレもなく、瞬かぬ星たちが輝いていた。

「そういえば」棚橋は、不意に視線を下に落とした。

「あ？なんだ」

「今、“志”っていうので思い出したんであえて言うんだが、佐久間先生、変な人だよなあ。いくら殿の命令とは言え、あの人の響<sup>きょう</sup>、結構疲れるよなあ」

「ああ。あの人の変人ぶりは、もはや言うまでもないだろ」

同感らしく、柳はため息を吐いた。

佐久間先生、というのは、洋学者、らしい。「らしい」とわざわざ言わねばならないのは、どういう素性の人か、よく教わっていないからだ。いや、正確には、棚橋たちに理解する気がないんだろう。事実、棚橋は“佐久間先生”という人物について、洋学者である、という事実と、佐久間という苗字しか知らない。実は、“洋学者”という人物が、どういう分野に詳しい学者なのか、というのも理解できていない。

ことは数ヶ月前、まだ桜の花が咲き誇るころに遡る。

二人に、「豚一公」じきじきの命令があつた。

『実は今日、佐久間先生という一流の学者が京にやってくる事になってゐる。本来ならば余が迎えなくてはならないのだが、公務の事情でならん。そこでお前たちに命ずる。余の代わりに佐久間先生を迎えてくれんか』というものだつた。いくら一橋家の家臣と云えど、殿じきじきに命令をいただくことは珍しい。二人が踊りあがつたのは言うまでもない。

だが、その三刻後には、最悪の気分になることになる。

言われた大路で“佐久間先生”を待つていた二人だつたが、やけに遅い。もうすでに着いているはずの時刻なのに……と二人が訝しがり始めた、丁度そのころだつた。

パカラツ、パカラツ、パカラツ。

馬蹄の音が辺りに響いた。人波溢れる往来が、まるで何かを避けるように割れていった。そして、その人並みの割れ目の中心には、もはや暴れ馬と形容したほうが良さそうなほどに速度を上げた馬がいた。その馬の周りでは、子供の泣き声や、乙女の戸惑う声や、無宿人の怒声が渦巻いた。

まさに阿鼻叫喚、その言葉が二人の頭をめぐつた。そして、『ほう、あんな往来で馬の速度を落とさないとは、非常識なヤツもあつたものだ』半ば呆れていた。

だがその馬は、人ごみを割りながら二人の前で止まつた。

『おいおい、まさか……』二人は顔を見合わせつつ、馬の上に跨る中年男を眺めた。

ぴつたりとした服。いわゆる、洋装というやつだ。周りは皆和装だから、その奇妙さはさらに際立つた。それに、白い拵の大小の刀。

よほどの傾き者が目立ちたがりでもない限り、使わない拵だ。それに、足に履いているのも草履ではなく、革を足にぴったりと貼り付けたような形をした履物だった。

そして、一番印象的だったのは、その顔だった。

なんと、髭を生やしていたのだ。当時、男子たるもの髭をそり落とすのは当然のたしなみだったから、さすがに面食らった。

その中年男は、柳たちを値踏みするように眺め、言った。

『おい、お前たち、一橋公の使いか？』

なんて尊大な言い方だ、と柵橋は思った。だが、一橋公の使いかと誰何する男、ということとは……。

『ええと、佐久間先生ですね』

柳は訊いた。すると、その男は馬から下りずに続けた。

『いかにも。俺が佐久間象山である』

またもや尊大な言い方だ。だが、殿の客人である以上、いくら無礼であろうとも、しつかりともてなさなくてはならない。柵橋は手はずどおり、一橋の側で用意した宿舎に案内する旨を説明すると、佐久間先生はしれつと言つてのけた。

『ふん、宿舎など無用だ』

最初は、遠慮しているものと思った。だから、そんな遠慮は無用でござる、宿舎で体をおやすめ下され、と慇懃に述べた柵橋に、佐久間はあざ笑うように言った。

『どうせ、一橋が用意できた宿舎など、ボロ小屋も同然だろう？』

ならば、知り合いに頼んで、もっといい寢床を探すから構わんよ』

なんとという物言いだ。柳など、明らかにいきり立っていた。それこそ左の刀を抜いて、千葉道場仕込みの上段切り落としを見舞うんではないか、とヒヤヒヤさせるほどだった。

『待たれい！』

刀の代わりに、柳は言葉を抜いた。そして、貴殿のその物言いは、我が殿に対して無礼であろう、撤回願いたい、という旨を述べた。すると、佐久間先生は笑った。



『ふん、貴様らこそ、誰に対して物を言っているのだ？俺は日本の至宝・佐久間象山であるぞ！！佐久間象山を呼びつけただけで不遜なのに、呼びつけた一橋公が迎えに来ない、またその名代が、貴様らのような若造だと？全く、馬鹿にしているにも程がある！！……一橋公に伝えておけ、「三日後に、そちらに伺う。俺の話聞きたくしたら、予定を空けておくことだ」とな』

そう吐き捨てる、佐久間は馬の腹を足で叩き、馬を走らせて行ってしまった。

ななな、なんてヤツだ！！二人は顔を見合わせて、同時に叫んだ。  
……二人は、その事を未だに引きずっているのだ。

「でもさあ、佐久間先生の饗応は俺の仕事になっちまったんだよなあ。やだなあ」

うんざりだよ、と言わんばかりの声で、柳は言った。

「つらいのは一緒なんだ」棚橋もまた、うんざりだよ、と言わんばかりの声を出した。「柳が佐久間先生の饗応係になるから」なんて言われて係にさせられた俺の気持ちにもなれよ」

最初は、ただお迎えだけすれば良いとばかり思っていた。

だが、佐久間センセイの饗応役に誰が就くかについて、一橋の家臣団の中で悶着があった。佐久間センセイの奇人ぶりは、家臣団の間で稲妻よりも速く伝わったのだ。「あんな非常識な人の饗応なんてイヤだ！」と公言した者もいたし、「某、胃痛の悪化につき……」と暗に洩るものも出た。そんなすったもんだの末、一番若手だった柳と棚橋に押し付けられたのである。「そっぴや、お前たち、佐久間先生を最初にお迎えてたものな」と先輩に言われては、二人とも断れなかった。

結果、この若侍二人は、桜舞う三月から祇園の祭りを過ぎた現在に至るまで、佐久間先生のがままやら私用やら公務やらに振り回されることになり、残業が日常茶飯事になってしまった。そして、残業のせいで、物陰にビビりながら暗い小路を歩く羽目になっている。

「お互いに、不幸な星の元に生まれてるんだな……」

「ああ……」

二人して、足取りが重くなっていた、まさにそんな頃だった。

棚橋の持つ、提灯の光が、前方の人物を照らし出した。その人物は、まるで二人の行く手を阻んでいるように道の真ん中に立ち尽くしていた。

思わず棚橋は足を止めた。つられて柳も足を止めた。

棚橋は提灯を高く掲げた。もしかしたら、知り合いが立っているのかも知れないからだ。今この位置は一橋家家臣の宿舎が近い。もしかしたら、一橋の家臣が自分たちの帰りが遅いから迎えに来てくれたのかも、と期待交じりに思ったのだ。

だが、棚橋は、提灯の光に照らされた男の姿に見覚えがなかった。短身痩躯。おそらく身の丈が5尺あるまい。そんな小さな体には不似合いな、常寸より少々長い大刀を一差、そして常寸どおりの脇差を重そうに差している。

紺色の上下を着ているせいで、その体が闇に溶けそうだ。

顔はどこか飄々としていて、いわゆる美形ではないものの、どこか清潔感のある顔だった。たぶん、この男をむりやり女装させたら違和感なく女に見えるのだろうな、と棚橋はなんとなく思った。

だが、見覚えのなかった棚橋とは違い、柳は見覚えがあったらしい。

「よっ！」

と、手を挙げた。

だが、それに目の前の男が応じる様子は無かった。

「おい、アンタ、庄内の西神殿だろう？西神道明殿だろう？」

食い下がって目の前の男に話しかける柳。だが、男はその言葉に応じない。まるで地蔵のように。

「おい、知り合いか？」

棚橋の言葉に、柳は答えた。

「……ああ。遊郭で知り合って、意気投合した方だな」

「お前、遊郭なんぞに出入りしてたのか!!」

「まあまあ……、なあ、西神殿、なんで黙ってるんだよ?」

柳はその男に話しかけるが、まるで答えない。

だが、彼の目だけは、如実にものを語っていた。まるで、夏の夜の星のように、まっすぐで、瞬きもしない。そして、何かを燃やしているかのように輝いていた。

その目は、日々を平々凡々に生きている人間の目ではない。

その男は、まるで和歌でも詠じるように呟いた。

「すまん、柳殿」

その言葉は、澄んだ冬空のようだった。けれど、何の取っ掛かりをも持ち合わせていない。簡単に言えば、言葉に心がこもっていないようなのだ。

「え?」

柳の困惑をよそに、“西神”は言った。

「俺は、西神道明ではない」

一瞬、強い風が吹いた。さっきまでの湿った空気が入れ替わり、カラッとした空気に入れ替わった。

「どういうことだ?」

柳は、左の刀に手を掛けた。棚橋もまた、提灯を地面に置いた。

二人とも、何とない不穏な空気をようやく感じ始めていたのだ。棚橋は、固唾を呑んだ。

「どういうことだ?だと?」“西神”は笑った。「決まってる。」

京で偽名を名乗るといふことは……」

「後ろめたいことをしてるヤツだ、ってことだよな?具体的には」  
柳の言葉を、棚橋が継いだ。

「尊攘の浪士、だな?」

二人は、目の前にいる“西神”を眺めた。“西神”は、刀に手を掛けもせず、ただ立ち尽くしていた。だが、圧倒的な威圧感があつた。

「で？尊攘の浪士が、俺たちに何の用だ？今、お前たちは忙しいんだろ？」

と柳は訊いた。“西神”は答えた。

「お前たち、ではない。お前に用がある」

お前に、と指名された柳は狼狽したようだ。柳は怒気はらみに訊いた。

「どういうことだ？」

“西神”は興味無さそうに答えた。

「詳しいことは俺も知らん。だが、お前を斬るべし、と仲間内で話題になつてな」

「な、なんだと？」

柳はいよいよ狼狽した。かつて、“小物”という言葉振りかざし、「自分は暗殺の標的にならない」と高をくくっていた柳だけに、その驚きも大きいのだろう。いや、もしかすると、気づかない間に柳という男は“小物”と呼ぶべき男ではなくなっていたのかもしれない。時代の上昇気流なるものが存在するのなら、きっとその気流は、誰の目にも見えない。

柳は、腹をくくったのか、刀を抜いた。そして、上段に構える。「……つまり、こういうことだろ？」

高く掲げられた刀は、まるで三日月のように光った。

「そうだ」「西神”は、刀の柄に手を掛けもせず、前進してきた。俺は、お前を殺すべく仕向けられた、刺客だよ」

元々剣の腕がカラキシで、どうにも気の小さいところのある棚橋

は、刀を抜くだけの胆力さえも“西神”の威圧感によって削がれていた。だから、前進する“西神”の行く手を遮ることさえ出来なかった。

「どいてろ、棚橋」いやに落ち着いた声で、柳は言った。「お前は抜くな。生兵法は怪我の元、って言うだろ」

「同感だ」「西神”も言った。「こんな狭いところで乱闘になると、同士討ちの危険もある。腕が立たないヤツが混じればその危険は増すからな。……もつとも」

「もつとも？」

固唾を吞んで聞き返す棚橋に、“西神”は目を向けて答えた。

「柳を斬ったら、次はお前だがな。俺の剣を見たものを、生かしておくわけにはいかんのでな」

“西神”の目は、まるで迷いがなかった。だが、それだけに、怖かった。人を殺すことにさえ迷いのない人間がいる、という事実に。そして、そういう類の人間が、今現在自分の目の前にいて、しかもその双眸に自分の姿を映している、という状況に。そして、“西神”という人間そのものに。

「構えろよ」

「ん？」

柳の言葉を受け、“西神”はようやく棚橋に向けていた視線を柳に戻した。それを確認すると、柳は続けた。

「刀を構えていない人間を切り伏せるのは、さすがに気が引ける。それに、そんな卑怯なことしたら、千葉先生に何言われるかわかったもんじゃない」

……柳、イヤに落ち着いている。もしかすると、柳もどこかで人を斬ったことがあるのだろうか、と棚橋は漠然と思いを巡らせていた。同僚の、そして友人の見てはいけな面を見ってしまった気がして、薄ら寒いものを覚え始めた。

やはり、“西神”も落ち着き払っている。彼は答えた。

「もう、構えている。気にするな」

「ああ、つてことは、お前、居合遣いか？」

「そうだ」「西神”は頷いた。

居合、というのは、納刀状態から一気に攻撃へ繋ぐ剣術のことである。普通の剣術においては、正眼や上段などに構えた瞬間を以って「戦闘準備が整った」とする。だが、居合においては刀が鞘の内にある瞬間であつても、戦闘準備が整っている。つまり、居合い使いなる“西神”は、もう既に構えていることになる。

二人の間に、妙な緊張が走った。

「お別れだな」ぼそつと“西神”は言った。

「ああ？」上段で構えつつ、柳は訊いた。

「どっちが勝つても、どうせお前とはお別れだ。だから、今の内に別れの言葉を言っておく。……お前のこと、嫌いではなかった」

“西神”は、柳の間合いギリギリに立った。

「そうだな。どっちが勝つてもお別れ、か」柳は呟いた。「アンタとは、あんまり利害が一致しないところで知り合いたかったよ。そうすりゃ、お別れなんて言わなくて良かったのに」

「同感だ」

瞬間、二人は研ぎ澄ました牙を剥き、相手に向かって突き立てんとした。

先に動いたのは柳だった。柳は得意の上段から、千葉道場直伝の切り落としを見舞ったのだ。

柳の勝ちだ、と棚橋は思った。

なにせ、柳の切り落としは、師匠の千葉周作先生をして、“稲妻の如し”とまで言われた剣だ。柳と立会稽古をしたことのある棚橋は、その威力、その疾さ、ともに身をもって知っている。何せ、避けられないのだ。しかも、受けることも出来ない。

だが。

目の前に広がった光景は、棚橋の想像を裏切った。

「……があっ！」

柳の構える刀は、頭上で輝き、小刻みに震えていた。しかし、“

西神”の抜き放った刀は、もう既に柳の右胸に深く斬り入り、致命傷を作り上げていた。

「遅い」

そう謂い終わったが早いか、“西神”は胸を抜き払った。

瞬間、柳は崩れ落ちた。

「や、柳！！」

棚橋は柳に駆け寄った。そして、柳の体を抱きかかえようとすが、おひただ夥しい血で、抱きかかえることさえ難儀する。その血の量が、柳が手遅れであることを証明しているように思えた。だが、それでも諦めずに、柳の体を抱きかかえて揺さぶろうとした。

「無駄だ」

“西神”の声を後ろに聞きながら、必死で揺さぶる。けれど、目の前の光景のせいで麻痺した頭が、とりあえず平穩を取り戻し始めて、ようやく判った。もう、柳は死んでいる。なにせ……。

「胸を切り離されて、生きている人間はいないだろう」

柳の上半身と下半身は、見事に切り離されていた。上半身と下半身をびったりとくっつけければ、柳が蘇るんじゃないか、というほどに鋭利に、スツパリと斬られていた。

血の海の中、膝をその血で濡らしながら、柳の上半身を抱いて棚橋は哭いた。まるで、棚橋の心の中の激情を、そのまま形にしたような慟哭だった。

「つまらんな」

“西神”が、呟いた。棚橋は柳を、まるで子供を寝かしつけるように丁寧に血の海に寝かせてから、すつくと立ち上がり、“西神”を睨んだ。“西神”は、汚物でも拭き捨てるように、刀についた柳の血を懐紙でふき取っているところだった。

「つまらん、だと？」

顔の至るところに柳の血を浴びて、鬼のような形相になっている棚橋は、“西神”に訊いた。すると、“西神”は興味無さそうに言葉を返した。

「ああ、つまらん」

何がだ。柳を殺しておいて、何がつまらん、だ！！ふざけるな！  
…だが、これらの言葉は柵橋の頭の中で渦巻くばかりで、一向に口から外に飛び出さなかった。

「抜け」

懐紙を拭い終わった“西神”は、刀をまた鞘に納めた。そして、その懐紙を手から離れた。柳の血を吸って、重くなっているはずの懐紙だったが、まるで異国の蝶のようにヒラヒラと舞い、血の海に舞い落ちた。

風にでも倒されたのか、柵橋の提灯は地面で倒れ、炎上し始めていた。なにかを暗示するかのようだった。

「なあ」

柵橋は口を開いた。

「なんだ」

“西神”に、柵橋は訊いた。柳の口調を真似るように。

「なんで、夏の星って瞬かないか、知ってるか」

何を訊いてるんだ、俺は。俺はこんなところでこんなことを訊くべきなのか。訊くべきじゃないだろう？そんな疑問が、柵橋の頭の中で渦巻いていた。本当なら、別のことを言うべきなのだ。なんでアイツを殺した、と詰め寄るべきなのだ。しかし、柵橋の口を衝いて出たのは、そんな言葉だった。

“西神”は答えた。

「知らん。興味もないな」

「まあ、そう言うなよ」前置きして、柵橋は言った。「夏の星が瞬かないのは、人の志で輝いているからなんだ、って柳が教えてくれたよ」

「ほう、興味深いな」“西神”は言った。「人の志は、弛むことなく、輝いているということか」

「訊くが」柵橋は続けた。「お前は、あの星のように、輝いているのか？」



しばしの沈黙。  
“西神”は無表情だったが、何かを思案している  
ようだった。

沈黙を破って、  
“西神”は答えた。

「輝いているかどうかは、俺自身にはわからん。……だが」「西神」は、星の輝く空を眺めた。「いつかは夏の星のように、弛まず輝きたいものだ、な」

「そうか」

気がつけば、棚橋は刀を抜いて、正眼に構えていた。

「やるのか」

決まってる、と棚橋は言った。「柳の仇だ」

そして、その声に呼応したかのように“西神”が刀を神速で抜き放った、その瞬間だった。

「貴様ら！！何してる！！」

突然、大喝が響いた。騒ぎを聞きつけて、誰かがやってきたのだろう。声のした方を棚橋が見やると、そろいの紋をつけた提灯が闇の中に浮いて見えた。ああ、あれは。一橋の代紋だ。

だが、彼らがこの場に割り込んできたのが、一瞬遅かった。

鞘から抜き放たれた“西神”の剣尖は、棚橋の腰から胸にかけて、大きな傷を作った。だが、大喝にひるんで踏み込みが足りなかったのか、“西神”の剣尖は棚橋の体を二つに分かたなかった。だが、深手に違いはなく、棚橋はその場に崩れ落ちた。

「邪魔が入ったか。…命拾いしたな」

という“西神”の言葉、そしてそれに続いて走って逃げる足音が棚橋の耳に入った。

けれど、棚橋は、血の気が抜けていく感じを、全身で感じていた。力がどんどん抜けていく。眠くないのに瞼が重い。寒い。暗い。

棚橋の目の前には、何者よりも深い闇が広がっていた。

「やや！！これは、柳！！それに棚橋！！」

「柳はもうダメだ……」

「おい！！柵橋！！しつかり気を持って！！」

逃げていく足音に遅れて、柵橋たちの近くで立ち止まった人たちの声が、まるで他人事のように聞こえる。そして、まるで界限の向こうで話されている話のように、耳からどんどん離れている。たぶん、肩をつかまれてゆずられているはずなのに、その感覚がない。夢の中のようだ。

……ああ、俺、死ぬのか。

柵橋は、諦めつつ重い瞼を閉じた。

河上彦齋は、大城屋に逃げ込んでいた。

大城屋は、いわゆる旅籠である。だが、ただの旅籠ではない。

この主人が尊攘派の志士たちに同情的で、積極的に匿ってくれるおかげで、“西神”たち一派の定宿になっている。だが、以前と比べると、随分風当たりが違う。

以前は、それこそ我が者顔で大城屋の廊下を歩けたものだがな、と足を潜ませて暗い廊下を歩きながら、彦齋は苦笑する。

と、いうのも、大城屋の主人に言われてしまったのだ。

『あんたらは国に帰ってたから知らないだろうが、池田屋の騒動から、幕府方の宿改めが激化してな。申し訳ないが、アンタらの事がもし嗅ぎつけられたら、こちらは知らぬ存ぜぬで通すからそのつもりでな。俺も命は惜しいし、生活もある。わかってくれ』と。

同志達は憤慨した。『それが憂国の志士たちにかける言葉か！！』と。だが、彦齋には、その大城屋の言い分はしょうがないことに思えた。大城屋の主人と、俺たちは違う。俺たちは志士活動をしていれば、仲間の金策のおかげ（ちなみに、その方法は商人への半ば押し借り）で食っていける。だが、大城屋は宿屋なのだ。当然、世間におもねらなくてはならない。それはしょうがないことだ、と。むしろ、旗色が悪くなってもなお、尊攘派の自分たちに宿を貸してくれる大城屋に感謝すべきだろう、と。

そんなことを考えながら廊下を抜き足で歩く彦齋の後ろで、前田

は言った。

「おい、今日の暗殺は不首尾だったな」

彦齋ははつと振り返り、シツ、と声を潜めるように促した。

「馬鹿、誰かに聞かれたらどうする！」

「大丈夫だよ」前田は声量を変えず、呑気に言い放った。「大城屋の主人の話だと、今日は俺たち以外、客がいらないらしいからよ」

ほっとした彦齋だったが、さっきまで抜き足差し足で廊下を歩いていた自分に思い至り、少々バツの悪い思いに襲われた。それを振り払うように、彦齋は言った。

「ふん、柳は斬った。それで、充分だろう」

「いいや、甘いな」前田は続けた。「俺たち暗殺稼業の人間は、絶対に顔を知られてはならない」

「いいじゃないか」彦齋は反論した。「俺達は、志士だ。あくまでな」

「だが、皆はそうは思っちゃいないよ。俺達、皆からなんて呼ばれてるか、知ってるか？」

「ああ」

彦齋は頷いた。

肥後の河上彦齋、因幡の前田伊左衛門の二人組といえば、尊攘派志士の間では知らぬ者が無かった。それは、論客としての盛名でも、一派の指導者としての雷名でもなかった。

要は「人斬り」、つまりはテロルの請負人としての悪名が轟いていたのだ。そして、河上・前田組<sup>コンビ</sup>を指して、尊攘派志士たちはこう呼んだ。「死に神」と。つまり、二人に目をつけられたら最後、必ず骸を今日の街に晒すことになる、ということなのだろう。

事実、「死に神」コンビは京の血風を彩った一人だった。

「死に神」組<sup>コンビ</sup>が人を斬っていたころ、まだ京には土佐の岡田以蔵<sup>おかだいぞう</sup>・薩摩の田中新兵衛<sup>たなかしんべえ</sup>という、「人斬り」の大家<sup>ビッグネーム</sup>がいた。そして、その二人が己の刀と血祭りに上げた人間の血によって作り上げた“血の花道”を、我も我もと追隨する“狂犬”たちが現れて、その道を拡

げていた。実は、河上たちもその“狂犬”の一人だった。岡田以蔵も、田中新兵衛も、そして彦斎たちも、己の刀一本で、尊攘の障害になりうる者たちを地獄門に送っていった。そして、その花道で大立ち回りを演じたものたちは、人を斬る、ということに対する罪の意識のためか、しきりに「天誅」という言葉を使い、己の正義を叫んだ。

もちろん、「人斬り」などということが許されるはずもない。当然幕府は「人斬り」たちを駆っていった。その中に、かつての人斬り二枚看板の一角・田中新兵衛もいた。田中だけではなく、“狂犬”たちも次々に捕縛されていった。

だが、その中でも、彦斎たちは逃げ切った。政変があつて、尊攘派志士たちが朝廷から締め出されてしまったのを期に、彦斎たちは“狂犬狩り”吹きすさぶ京から離れた。そして、一時人斬り稼業を中止していたのである。

そのおかげで、今の今まで首がつかつている、と彦斎は思っている。もし、ぐずぐずと京にいたら、きっと捕まっていたことだろう、と。

だが、そんな彦斎たちは、また上洛した。

「“死に神”か。お似合いだよな」彦斎は諦めたように呟いた。

「そう、俺達“死に神組”が、初めて仕損じたんだ。不首尾と言わずしてなんと言う？」

前田の言い分につんざりしながら、彦斎は反論した。

「だから、標的の柳は斬った。不首尾じゃないだろう」

「いいや。目撃者が居ただろう。アイツも殺しておくべきだった」  
「ああ。……だが、大丈夫だろう。あのような弱そうな侍に何が出来る」彦斎は、さつき対峙した、一橋の若侍を思い出しながら言った。「それに、あの侍、死にはしなかったが、きつともう再起不能だ」

「ふん」前田は鼻を鳴らした。「まあいい。どうせ、京に長く滞在するつもりもないからな」

「そうだな」

彦齋は、興味無さそうに受け答えた。

そんな会話をしているうちに、二人は大城屋の奥の間の前にまでやってきていた。この奥の間が、現在彦齋たちが世話になっている尊攘一派のアジトだ。彦齋たちの足音を聞きつけたのか、奥の間でさつきまで響いていた議論の喧騒が、ピタリと止んだ。

「ああ、前田です」

そう前田が障子越しに名乗ると、奥の間で安堵のため息が漏れ、障子が開いた。

「おお！前田殿、河上殿！」

奥の間に居た志士たちは、笑顔で二人を迎えた。まるで、英雄か何かを迎えるように。そして、そういう和やかな空気の中、志士の一人が、聞きにくそうにしながら口を開いた。

「で、首尾は……」

前田は、答えた。

「ああ、一橋の柳は、死んだよ」

瞬間、奥の間は色めき立った。「よし、柳が死んだ！」「これで我々の活動がやりやすくなるぞ！！」などと小声ながら口々に言い合っていた。

だが、彦齋にはどうにも納得がいかなかった。

柳、という男は、斬るに値する男だったか？と。

彦齋という男は、独特の「人斬り観」を持っていた。

“人には、二種類ある。「蔓」と「実」の二種類だ。「蔓」の間は、真面目に生きて、真面目に死んでいく。特に見るべきものもない代わり、毒にもならない。一方の「実」の間は、「蔓」から貰った栄養を元に、世に向かい何かをなすことが出来る人間。だが、「実」の間は、薬になるかもしれないが、毒にもなりうる”

そして、彦齋はさらに続ける。

“「蔓」の人間は、殺すまでもない。毒にも薬にもならないし、「実」を育てる大事な人間だからだ。だが、「実」は違う。「蔓」から栄養を貰っておきながら、まるで何の役にも立たず、役に立つはずの「実」の成長を妨げる「実」もある。それどころか、毒にしかならない「実」もある。そういう「実」は、間引きしておくに限る”

そういう独自の倫理観を持っている彦斎にとって、柳の暗殺は、倫理に反する行為なのだ。

柳という男は、毒にも薬にもなりそうもなかった。ただ、平々凡々に日々を生きる侍ではなかったか？ あれは、ただの「蔓」ではなかったか？ という疑問に、終止符が打てないでいる。

だが、彦斎に、後悔はない。ただ、建前上の「斬るべきか、斬らざるべきか」に悩んでいるだけなのだ。

「よくやってくれた、河上殿」

彦斎の思案に割って入るように、志士たちの輪の中から男が立ち上がり、河上に話しかけてきた。その男の声ではっと正気に戻り部屋を見渡した彦斎の視界の隅では、既に志士たちが輪の中で祝杯を上げていた。

「ああ、彩辻殿」

彦斎は頭を下げた。

「はは、そう改まるな」彩辻は笑顔皺を湛えながら、穏やかな口調で続けた。「君達には、ただ宿を貸しているだけ。それに、こちらとしても、河上殿のような方が仲間していると心強いからな」

彩辻は、長州人だという。

詳しいことはまるで知らない。だが、長州にいた彦斎たちが、「もう一度京に上りたい」と、人脈はあるがどうにも人徳がない、と周りから評される長州の高杉晋作という男に相談した（ちなみに、

そのとき高杉は脱藩の罪で入牢していたので、牢越しに相談したところ、彩辻を紹介された。晋作が言うには、彩辻はこういう男らしい。

『ああ、アイツはいいヤツだよ。なにぶん切れる男だ。まあ、切れるだけに少々冷酷に見えるところがあるがな。だが、なんといつでも石橋を叩いても渡らない、っていうくらいの慎重さ、あれがあいつの強みだな。ああいう慎重さが、久坂とか稔麿とかにあつたらなあ……』

とにかく、高杉晋作のツテで、京の彩辻一派に世話になることになったのである。

ただし、ただで、とは行かなかった。

上洛してから、彩辻は言った。

『ようこそ、河上彦斎殿。と、言いたいところなんだがね、こっちも人手不足なものでね。ちよつと手伝ってくれないか』

世話になっっている手前、断ることが出来なかった。そして、彩辻一派の行なっている暗殺に加わるようになってしまったのだ。

もともと、“死に神”と渾名される彦斎たちだから、暗殺はそんなに苦ではなかった。だが、いいように使われてるな、という不快感はあるし、意に沿わない暗殺を引き受けている、という負い目のようなものがしこりのように残る。最近になって、ようやく高杉の言った『少々冷酷なところがある』という、彩辻の顔が見えてきたところだ。

「ところで、柳は、斬る価値のある人間だったんですかね？」

単刀直入に彦斎は訊いた。すると、彩辻は答えた。

「ん？ああ、どうだろうねえ」

表情も変えず、暗殺の事をはぐらかす彩辻に違和感を持ちつつも、彦斎は続けた。

「言い方を変えれば、柳、という人間を斬ることで、時代は変わるんですかね？」

不意に、彩辻は笑った。



「なにか、おかしいことを言いましたか？」

半ば殺気を込めた言葉を吐きかける彦齋。その彦齋の顔を、まるで悪さをした子供を咎めるじいさんのような目をして眺めた彩辻は、笑顔のまま、諭すように言った。

「僕に言わせれば、誰を斬っても一緒だね」

「何ですと？」

彦齋の殺気に気づかないのか、それとも無視しているのか。彩辻は笑顔のまま続けた。

「この時代は、血風の時代なのさ。時代が血を欲している。僕らは、その時代の欲求のままに、血を差し出しているに過ぎんのだよ」

「ほう、興味深い意見ですね」彦齋は皮肉っぽく続けた。「それが、彩辻殿や高杉さんの師匠、吉田松陰殿の考え方、ですか」

「吉田先生は」彩辻は、まるで地蔵のように、固定された笑顔を振りかざして抗弁した。「決して血を好んだ方では無かつたよ。だが、しきりにこう言っておられた。“狂え”と。“時代を変えるのは、理性ではない。“狂”なのだ”とね。だから僕は、必死で狂おうとしている。時代を変えるためにね」

「そして、狂った結果、暗殺ですか」

「まあ、そうだね」と言ってから彩辻は何かを思い出したように言葉を継いだ。「…そうそう、柳を斬る意味、だったね。その意味はしっかりあるよ」

どんな意味ですか、と彦齋が訊くと、彩辻は答えた。

「一橋家臣、柳。ヤツは佐久間象山の饗応役だった。ヤツがいなくなれば、佐久間の暗殺がやりやすくなるだろう？佐久間は元々護衛を引き連れないらしいが、一橋に請われて京に来ているから、今は柳たちが饗応兼道中護衛をしていた。柳がいなくなれば、佐久間暗殺が、やりやすくなるよ」

確かにその理屈は正しい。だが、だとするなら、もう一人の饗応役も殺しておくべくだったはずだ。まったく、彩辻の言うことには筋が通らない。あるいは、最初から筋など考えていないのかもしれない

ない。

「……もういいです」

彦齋はそれだけ言うと、彩辻の脇をすり抜け、部屋の隅に座った。彩辻は、そんな彦齋を苦笑混じりに目で追っていたが、すぐに志士たちの議論の輪に入っていた。

志士たちの白熱した議論。だが、その議論はどこか空虚だった。まるで、自分たちの不遇を嘆くように、幕府方の人間を罵っているようにさえ見えた。あのような馬鹿馬鹿しい議論に加わらなくて良かった、と彦齋は帯から刀を引き抜きながら思った。

「佐久間象山、許すまじ！！」

「佐久間、斬るべし！！」

どうやら、志士たちの議論の的は、佐久間象山のようだった。志士たちは続ける。

「どうやら佐久間は不遜にも、帝をお遷しになる計画を立てているようだ」

「しかも、あの彦根に！！」

佐久間象山は、当時の天皇、孝明天皇を彦根に遷そうと計画していた。このことは、尊皇攘夷派の志士たちを憤慨させた。そもそも、天皇を臣下の分際ですれすれに動かそうなど、不遜でしかない。それに、彦根、という場所も問題である。彦根、というのは、代々井伊家の所領である。このことも、尊攘派志士を刺激した。なにせ、この彦根から、大老・井伊直弼が出たのである。尊攘派志士からしたら、「開国をした弱腰大老、井伊直弼の」彦根なのだ。

「やはり、斬らなくてはならんか」

「ああ、何としても、な」

その議論に、彩辻が入った。

「しかも、あの男は、今、京に入っている。千載一遇の機会だ」  
志士の一人が、彩辻の顔を覗きこんで訊いた。

「しかし彩辻さん。あれほどの人間を、そう容易く暗殺できるでしょうか」

「ああ、佐久間の周りにいた饗応役、柳は死んで、もう一人の男も再起不能だろう」

彦斎は、まだもう一人の安否を彩辻に話していないはずだが、と思案したが、たぶん自分に内緒で見届け人を寄越していたのだろう、と合点した。

「で、だ」議論の輪の中で、明らかな存在感を放つ彩辻は続けた。「佐久間本人は、護衛を雇っていないらしい。どうやら、ヤツは京を舐めているようだな。それを心配した「豚」が饗応役に託けて柳たちを護衛にしていたらしいからな。だが、柳は死んだ」

「護衛が、いなくなった、ということですね」

「そういうことだ」彩辻は頷いた。「だが、それも数日中のことだろう。きつと、数日もすれば、新たな護衛がつけられてしまう。そうなるよ……」

「面倒ですね」志士の一人が言った。

「そう、だから」彩辻は指を三本立てた。「あと三日。あと三日の内に、佐久間を斬らねばならない」

志士たちの視線が、不意に部屋隅に集まった。もちろん、彦斎に、である。

「そこでだ、彦斎殿」蠟燭に照らされた顔を彦斎に向けて、彩辻は言った。「あと三日の内に、佐久間を斬ってほしい。やり方は自由だ。だが、三日以内にやってくれ」

志士たちの輪の中にいる前田は、もう既にうんうんと頷いていた。だが、彦斎は無言で座っているばかりだ。

「なあ、彦斎君」

「……ああ」

彦斎は空ろに応じた。

「訊いてるのか!!」「真面目に議論に参加しろ!!」と、彦斎から見れば駆け出しのヒヨッコ志士たちが、ワーワーわめいている。彦斎がそいつらに目で一喝をやると、おずおずと黙り込んでしまった。ふん、カスが、と彦斎は心の中で毒づいた。

だが、彦斎の視線に怖じなかつた者もいた。一人は、部屋の隅に座っている若い志士。二人目は前田。そして、もう一人は彩辻だつた。

彩辻は口を開いた。

「やってくれるか、彦斎殿」

部屋の隅の若い志士も、彦斎を睨むばかりに見つめている。前田は、心配そうに彦斎の顔を覗きこんでいる。

彦斎は、ため息を吐いた。

「馬鹿馬鹿しい」

「は？」

「いや、こちらのことです。……佐久間暗殺の件ですね、お受けしましょう。彩辻殿には、一宿一飯の恩がありますから」出来うる限り事務的な言葉を選んで、彦斎は答えた。

その言葉を聞くと、彦斎を睨んでいた志士たちは、まるで汚物にするかのようにぶいっと視線をそらし、また堂々巡りの議論を繰り返しはじめた。

彦斎は何度目かのため息を吐いた。そして、目を瞑った。寝ようと思ったのだ。馬鹿馬鹿しい議論を訊いている暇があったら、寝ているほうがはるかに実になる。

その時だった。

「河上、先生？」

彦斎を呼ぶ若い声に、彦斎は瞑っていた目をゆっくりと開いた。

「お疲れのところ、すいません」

「あ、いや。疲れてはいない」張りのある若い声。たぶん彩辻ではあるまい、と彦斎は見当をつけ、敬語を使わなかった。

彦斎が目を開けた先には、袴があった。粗末で、所々擦り切れている。彩辻がしているような、きつちりとヒダの入った袴とは比べるべくもなかった。だが、その袴には、確かにその持ち主の風雪を感じさせるものがあつた。

ん？しかし、なぜ、袴が俺に話しかけてくるのだ？彦斎は小首を傾げた。

「あの？河上先生？僕の袴に、何か着いてますか？」

袴の上の方から声がして、ようやく自分が座っていたことを思い出した彦斎は、顔を見上げた。彦斎の視線の先には、不思議そうな

顔をして彦斎の顔を覗きこんでいる若侍の顔があった。

「ん？君は確か…」

若侍は、パツと微笑んだ。

「もしかして、河上先生、俺の顔と名前、見知ってくれてるんですか！？」

「いや、すまん」

彦斎の言葉に、その若侍は肩を落とした。だが、彦斎にはこの若侍の顔に覚えがある。さつき、彦斎の顔から目を逸らさなかつた若侍だ。

「…どうせ、僕、下っ端ですから…。あ、先生、お酒お持ちいたしました」

その若侍の手には、お猪口が二つ、あと銚子も二つ握られていた。「ああ、スマンな。俺は下戸なんだ」

こうは言ったが、彦斎は下戸ではない。彦斎が酒を飲まないのは、太刀筋が狂うのを恐れてのことでもあるし、それ以上に暗殺を恐れての事でもある。酒をしこたま飲ませた上で暗殺、など、古今東西、暗殺のセオリーだ。事実、その方法で人を斬ったことのある彦斎としては、「酒は勧められても飲まないに限る」と心に決めているのだ。

「そうでしたか。…お隣、座つても？」

「ああ、構わないが」

彦斎の横に、その侍は座つた。そして、お猪口に酒を注ぎ、くいと飲み下した。彦斎は、そんな侍のことなど眼中にないように、ぼおつと白熱する議論の輪を見つめていた。

「河上先生は、何をご覧になつていらっしゃるんですか？」

不意に、若侍が口を開いた。彦斎は答えた。

「不毛な、議論をな」

この言葉は、彦斎なりの“ふるい”だった。もしこの言葉に隣の若侍が怒れば、何も話すことはない。そういう腹だった。

だが、若侍は声を潜めて言った。

「やっぱり、不毛ですよね」

ほう……。少し興味に駆られた彦斎は若侍に訊いてみた。

「お前は、どういう意味で不毛だと思っている？」

若侍は、答えた。

「だって、おかしいでしょ？ 国家の大事を議論しているのが、こんな宿屋の一室の奥ですよ？ しかも、幕吏の目から隠れて。不毛以外の何者でもないでしょう？ それに、あの人たちは、自分で動かないじゃないですか。いつも口ばかりだ。不毛ですよ」

「面白いヤツだ」彦斎も、同感だった。

「だから」河上の言葉にちよつと頬を紅潮させて、若侍は続けた。

「河上先生みたいに、自分の手で、時代を作ろうとしている方を、尊敬しているんです」

彦斎は言った。「俺は、そんなに偉いものじゃない。何せ、人斬りだ」

若侍は言った。「いいえ。河上先生の剣には、思想が乗っかっています。まさに志士なんです」

困ったな。彦斎は心の中でため息を吐いた。

不意に、若侍が口を開いた。

「先生は、剣術はなにをお修めに？」

彦斎は答えた。

「いや、剣は修めていない。若い頃、伯耆流の居合を勉強したことはあったが、な」

「お辞めになつたんですか？」

「いや、どうにも筋が悪いらしくてな。でも、おかげで居合のイロハは理解できた」

「いや、ご謙遜を」若侍は言った。「河上先生の筋が悪いなら、日本中の人が刀を取れなくなっちゃいますよ」

実は、河上が系統立って剣術を学べなかつたのには理由がある。

彦斎は、肥後の小森家に生まれた。小森家は、この時代の下級武士にありがちな、貧乏侍だった。そんな家に生まれた彦斎は、同じ

く肥後の貧乏侍、河上家に養子に入った。彦齋が伯耆流居合を学んだのは、この頃である。だが、彦齋はこの後、肥後の殿様・細川家に、掃除坊主として仕えることになった。それは、下級武士・河上家の養子跡継ぎとしての責任もあっただろうし、もしかしたら、彦齋本人の功名心のなせる業だったのかもしれない。さらに、殿様の参勤交代に随行する形で、江戸に発つことになってしまった。そのせいで、彦齋の剣術の修行は、途中でなおざりになってしまったのである。

だが江戸で、彦齋は、剣術以上の力を手に入れた。

尊皇攘夷思想である。

江戸、というところは、色々な人間の坩堝だった。日本中の大学者が集まっていたのだ。江戸で、彦齋は尊皇攘夷の洗礼を受けた。そして、気がつけば肥後の尊皇攘夷派の中で、確固たる地位を築き上げていた。

そして、あの頃……。

彦齋は、不意に笑った。往時のことを思い出して笑ったのだ。

「いかがしました？」若侍は聞いてきた。

「いや、なんでもない。ただ、江戸にいた頃のことを思い出していた」

「江戸は、どういうところなんですか？」

「どういふところ、か」少し思案してから、彦齋は答えた。「俺にとつては、なんといいほどの所でもなかった。まだ、細川の殿様に仕えていたころだったからかもしれないがな。……正直、楽しくもなければ、つまらなくもない、変なところだった。いや、違うか。正確には」彦齋は頭を振って続けた。「俺自身が、黙々と生きる道を選んでいて、ということだろう」

「河上先生が、ですか？」

「意外か？」彦齋は訊いた。

すると、若侍は首を縦にブンブン振った。「ええ、意外です。だって、肥後出身志士の中心人物とまで言われる河上先生が？」



彦齋は笑って続けた。

「実はな、俺だつて意外なんだ」

若侍はさらに困惑の度を深めた。それを面白がるかのように、彦齋は言葉を継いだ。

「そういうものだ。自分がどこに向かっているのかなんて、自分が一番分らない。それと同じこと。がむしゃらに生きて生きて生きて、あるとき自分が今立っている所に思いを馳せたとき、『どうして俺はこんな所に』って疑問を感じるのは当たり前前的事だ」

「ふうん？」

「おい」彦齋は銚子を手に持ち、若侍のお猪口をあごで差した。

「盃が乾いてるぞ」

「あ、すいません」若侍はお猪口を持ち、彦齋にかざした。やがて、彦齋の銚子から透明の液体がお猪口に零れ落ちた。

その酒をまるでお神酒のように捧げると、若侍は勢いよく飲み下した。

「で？」彦齋は訊いた。「お前は、何処の出身なんだ？」

自分ですか？と前置きしてから、若侍は答えた。「自分は、吉岐です」

「剣術は？」

「ええ、吉岐の御留流を学びました」

「お前、兵法は誰に習った？」

若侍は戸惑った。「へ、兵法ですか？習ってないです」

「そうか」

彦齋は黙り込んだ。

「え？河上先生！なにか不味かったですか？」若侍は、おろおろと目を踊らせて、彦齋を眺めた。

「…あ、いや。普通、勉強しないものなのか？兵法は」

彦齋が訊くと、若侍は答えた。

「いや、最近は多いですよ。だってほら、江戸に黒船がやってきてからというもの、『兵法が役に立つ』って皆兵法を勉強しているんですよ。…ま、僕は貧乏だったもので、勉強してませんけど」

「そうか」

「それがどうしたんですか？」

若侍は、説明をして欲しいような顔を見せている。だが、彦齋は言った。

「いや、なんでもない」

「……そうですか」

説明を期待していた風の若侍は、肩をがっくりと落とした。そんな若侍に、彦齋は言葉を遣った。

「で？」

なおも困惑顔を見せている若侍に、彦齋は言葉をかけた。

「なぜ、お前は俺に話しかけてきた？」

「え？」

「だつておかしいだろう」彦齋は続けた。「お前は彩辻殿の一派の一員。そして俺はその彩辻一派に世話になりながら、どこか斜に構えている客人。その二者の間に、反目や反発はあつても共感はないだろう。お前は、一体俺になにを求めている？」

彦齋は、どこまでも本質を衝く男だった。そう言えば聞こえはいが、要は気難しい男だった。普通の人から見れば麗しい友人関係も、彦齋にかかれば「打算の代物」にされてしまう。

言い換えれば、彦齋という男は、どこまでも「理由」を求める男だった。どんな事象にも「理由」があり、そしてその「理由」によって人間が動いていると信じているのだ。だが、彦齋は気づいていない。世の中には、理由なき事象が存在し、そしてそれらが往々に

して人間を振り回すことを。

若侍は、彦齋の言葉に圧され、少し言いよどんでしまった。何かを言おうと懸命になつてはいるが、その心意気がどうしたわけか口の手前でせき止められている、といった感じた。

彦齋は、待った。若侍から出る言葉を。

待った甲斐があつたのか、若侍は口から言葉を投げかけた。

「……ただ、先生のことを、かつこいいと思つただけです」

「かつこいい？」呆れたような口調で、彦齋が訊いた。

「す、すいません。でも」若侍は若者特有のまつすぐな瞳を彦齋に向け、言つた。「先生の姿に、惚れたんです」

「おいおい」彦齋は言つた。「俺に衆道の趣味は無いんだが」

「そういうことじゃないです」若侍はきつぱりと言いつつ放つた。「先生の生き方に、本物の“志士”を感じたんです。僕が目標としたような、自分で行動し、自分で考える、そういう“志士”を」

「あいつらのようでなく、か？」彦齋は、どうでもいい議論を延々と続ける自称志士たちを指した。

「とにかく」彦齋の問いに答えず、若侍は言つた。「俺は、先生についていきたいんです。せめて、先生が京にいる間だけでも同道させてください」

「馬鹿言え。俺と同道するということは、暗殺にも加わることになる。お前は、人を斬つたことはあるのか？」

「……」若侍は黙りこくつた。それが、答えを忠実に物語つていた。

「ここぞとばかりに彦齋は畳み掛けた。

「無いのだろう？よく言うだろう、生兵法は怪我の元、とな。やめておけ」

若侍はまたもや黙りこくつた。だが、すぐにまた口を開いた。

「でも、河上先生だって、初めて人を斬つたときには、人を斬つたことはなかつたんでしょ？」

「それは確かにそうだが……」

彦齋がひるんだのを期に、若侍は言った。

「なら、僕の同道を断る理由にはならないはずです」

「む…」

彦齋が若侍の頓智に圧され気味になっている、そんな時だった。

「はっはっは、どうした彦齋？ 剣客である前に論客を以って任じている」って自称しているお前らしくないじゃないか」

前田だった。いつの間にか議論の輪から抜け出ていたのだ。たぶん、堂々巡りの議論を聞いているのに飽きたのだろう。前田は続けた。

「に、しても、彦齋が言い争いで圧されてるところ、はじめて見たよ」

「圧されてなどはない」

彦齋はそう反論したが、前田はその言葉を一蹴した。

「いいや、負けてるね。つうか、大敗？」

前田は刀を帯から抜いて、二人の前にとっかかりと座った。そして、まだ使われていないお猪口に酒を差して飲み込んだ。

「まあ、いいんじゃないか？」前田は酒を飲み干してから、呟くように言った。「確かに、暗殺に初心者居る、っていうのは気を揉むが、でも、俺たちだって“先輩”方にそういう気分を味合わせてきたわけだしな。ここで、ちよいと後進の指導、つうのも小洒落ていて良いんじゃないか？」

彦齋は、初めて暗殺に手に染めたとき同道した、“先輩”の顔を思い出そうとしたが、まるで思い出せなかった。きつと、ロクでもない人間だったのだろうし、もはやこの世の人間ではないのだろう。だが、その“先輩”の言葉は、まるで川に浮かぶ紅葉のようにやけに心の水面に浮かんで残っている。『お前の剣は、いや、お前は怖いな。畏れがない』しかし、その先輩の言葉の意味はいまだに判っていない。

「おい、彦齋？」

前田の呼びかけで、彦齋は追憶から呼び戻された。

「あ、ああ」

前田は、まるで彦齋を嗜めるようにため息を吐いた。そして、続けた。「とにかくよお、この若造を、一回くらい暗殺に同道させてもいいだろ？別に、お前くらいの腕だったら、関係ないだろ」

「まあ、な」

遂に、彦齋も顔かざるを得なかった。

もちろん、これに一番喜んだのは誰でもない、若侍だ。声を弾ませて訊いた。

「それじゃあ、先生！！同道させていただけませんか？！」

彦齋は思い切りイヤな顔を覗かせて答えた。

「…ああ。いいだろう」

「やった！！」

「ただし」彦齋は、その黒い双眸と、女の人のような白い顔を若侍に向けた。蠟燭に揺れたその顔は美しかったが、どこか凄みのある顔だった。「一つ。彩辻殿から許可を得ること。そして、もう一つはこれ一回きり、ということだ。いいな」

「はい！！」若侍は目をキラキラ輝かせて頷いた。「一回だけでも、先生と同道させていただけるなんて、光栄です！！」

「おい」前田は若侍の顔を覗きこんだ。「そういえば、お前の名前をまだ聞いてなかったな？お前、なんて言うんだ？」

若侍は首を傾げた。「あれ？まだ言っただけですか？ああ、しまったな」

「俺もまだ訊いてないぞ」彦齋も言った。

「あらら」若侍はたたずまいを直してから頭を下げて名乗った。

「申し遅れました。俺は吉岐浪人、松浦虎太郎です」

「これはご丁寧」

彦齋も、たたずまいを直し、名乗った。

「俺は、肥後の河上彦齋。以後、見知り置きを」

「え？」松浦は混乱した。なにせ、名前を知っている人間から名乗られることなど、そうはない。だから、松浦はしたり顔で様子を

見守っている前田に聞いた。すると、前田はこう答えた。

「ああ、あれは、彦齋なりのけじめみたいなものさ。彦齋はどうも心を開くのが苦手で、こうやって形から入らないとダメなんだと」つまりそれは、彦齋なりに松浦を認めている、という証拠なのだ。松浦は微笑んだ。

「ありがとうございます!!」

そう言うと、松浦はすつくと立ちあがり、未だ堂々巡りのままの議論の輪に割って入っていった。たぶん、彩辻に許可を貰いに行つたのだらう。

「ふん、まだまだ若いな」彦齋は言った。

「うん？」前田は生返事で訊いた。

「人を疑うことを知らない。早死にする人間のー類だな」

「もしかしてお前……」

「きつと、彩辻さんは松浦に許可を与えないだらう」彦齋は冷たく答えた。「だって考えてみる。一派を率いて活動している人間、つまりは小山の大將が、一時的にはいえ、自分の部下に離反をさせるわけではないだらう。小山の大將、っていうのは器が小さくないと勤まらないものだ」

「断定的じゃないか」

「ああ。その手の人間は数多く見てきたからな」彦齋は笑った。

「いやいや、お世話になつてる人に、小山の大將は無いだらう」

そう取りなした前田の前で、彦齋に小山の大将と揶揄された彩辻と、それを取り巻く一派の議論は、やはりまとまりが無く、空転していた。どうやら、松浦の参上によって、さらに波乱に襲われたようだ。まるで、沈みかけの船の中で騒ぐ船員のように、皆浮き足立っていた。

「……まあ、確かに、“小山”だな」

前田も、呆れ半分に認めるしかなかった。

先生は言った。

「小山の大将は、器が小さくないと務まらない。小さい軍の頭になるべき人間は、どうしてもガキ大将みたいな我儘さが必要だからだ。そして、大山の大将は、人間的な魅力がないと務まらない」

それを聞いた彦齋は、思った。

『ああ、俺は大将、という人間ではないのだな』

けれど、先生は彦齋に言った。

「彦齋。お前は大山の大将になれる。俺は、そう信じている」

俺が？大山の大将に？正直、戸惑った。

言うなれば、と佐久間象山は思った。

言うなれば、違和感だな。

なんだか、いつもと違う。いつもの光景とズレている。いつもの状態でない。まさに、目の前に広がる光景は、いつもと同じ、しかし何かが違う。だが、その違いはわずかに過ぎない。その違いは、自分の運命を分かつものかも知れないし、そんな大それたものではないのかもしれない。

その違和感の正体を掴むために、佐久間は部屋を見渡した。この

部屋、ひいてはこの屋敷は、佐久間の知り合いが手配してくれた屋敷で、きわめて手入れが行き届いている。家にせよ庭にせよ、“行き届いている”ものには矛盾がない。一見して明らかに高級な掛け軸も、きれいに生けられた花も、風情の演出に一役買っている。違棚も、なにもかもがいつものように存在している。

佐久間は腕を組んで首を傾げた。

「いかがしましたか？佐久間殿？」

目の前に座る侍が、佐久間に言葉をかけた。

「ああ、いや、なんでも……」

「ない、と言いかけた佐久間だったが、ようやく違和感の正体に思い至った。

「ああ、棚橋、怪我してるじゃないか」

佐久間は、全身包帯でぐるぐる巻きの饗応役・棚橋に声をかけた。

棚橋は、頭をかいた。

「ははは……、佐久間先生、気づくのが遅いですよ」

口調に、弾みのようなものがない。無理して笑っているように見えた。

「どうした？なにがあつたのだ？」

佐久間の言葉に、棚橋は聞き返した。

「……まだ、お耳に入ってませんか？」

「は？何も聞いていないが。そもそも、お前たち、昨日来なかつたではないか。一橋殿と俺を繋ぐのはお前たちなのだから、お前たちの事情が俺に伝わるはず無かるう？」

棚橋は、俯いた。さすがに佐久間はその変化に気づいた。

「なんだ？なにがあつたのだ」

棚橋は、力なく答えた。

「おととい、柳と拙者、何者かに待ち伏せに遭いました……。拙者はこの通り」棚橋は両腕を広げ、包帯でぐるぐる巻きの体を示した。「怪我を負わされました。そして、柳は……」

「死んだのか」



棚橋はまるで崩れ落ちる瓦のように、力なく頷いた。

「……そうか。道理で違和感があると思った。そうか、今日は、いや、これから先は、柳はやってこないのだな。もつとも、顔を思い浮かべようとしても、浮かびはしないがな」

棚橋は、少しむっつとして言った。

「……佐久間先生。柳の死を、“違和感”程度の言葉で片付けないで下さい」

「お前には悪いが、違和感程度のものでしかないな」佐久間は言った。「俺は天下と対峙する人間なものでな。一人の死など、違和感程度のものでしかない」

「本当に」棚橋は、つくづく、と言わんばかりの顔を見せてから、続けた。「佐久間先生は、嫌な人ですね」

む？佐久間はまたもや違和感を持ち始めた。

だが、そんな佐久間に、さらに棚橋は言葉を継いだ。

「前から思っていたのですが、どうにも佐久間先生は人を人と思わない癖があるように見受けられます。正直、饗応役、つらかったです」

ああ、なるほど。頭のいい佐久間は、思い至った。だが、思いついたことを口には出さず、別の言葉を紡ぎ出した。

「ああ、よく言われるのだ。“人を人と思わない”とか、“思いやりがない”とか、な。だがな、こればかりは治らん。それに、そういう性格というやつは、まさに“三つ子の魂百まで”だからな」

「先生、三歳のころからそんな人だったんですか？」

佐久間は笑った。

「“そんな人”とは言ってくれるじゃないか。……ま、この尊大な性格は、とにかく折り紙つきだな。そういえば、江川先生にもよくこの性格を煙たがれたものだ」

「江川？」

棚橋は首を傾げた。

江川、というのは、葦山代官・江川太郎左衛門のことである。

蘭学に詳しい奉行として有名で、日本初の反射炉を造営したり、江戸の台場の造営に深く関わったことで後世知られることになる人物である。とにかく温和な人物として知られ、敵を作らなかつた。何せ、蛮社の獄の折、逮捕されそうになつたものの、当時の老中・水野忠邦（天保の改革の中心人物として知られる）に庇われ、罪に問われなかつた。とにかく、人の輪を重んじ、人との対話を重んずる人であつた。

「よく、江川先生に言われたものだ。『君の敵を作り過ぎる性格はよくない』ってな。だから、俺は訊いてやつたよ。『じゃあ先生、先生みたいのにのりくらりと俗人と付き合う方法を教えてくれませんかね』って。いやあ、あのときは江川先生、顔を真っ赤にして怒つたなあ」佐久間は遠い目をして言つた。

「あの」棚橋は申し訳無さそうに首をすくめながら訊いた。「その、江川先生って誰ですか」

「あ？知らんのか？江川先生を？」佐久間はわざとおどけて見せた。「江川先生と言えば、蘭学の大家だろうが！あの人も知らないとは、まったく浅学なヤツだな、お前は」

「ええ、浅学で、すいませんね」斜に受け答える棚橋。

む？佐久間はさらに訝しく思ったが、けれどそのことについてはあえて質問せずに、言葉を継いだ。

「で、一橋殿から何か仰せつかつているはずだろう」

「ああ、そうでした。殿のお言葉、伝えに参りました」

「ならば」佐久間は言つた。「早くしろ。時間がない」

「は、はい。殿は……」今日の午後、一橋の本陣まで足を向けてくれんか」と……」

「……断る」腕を組んだ佐久間はきつぱりと言ひ放つた。

「な、なぜ？」

「ふん、“でえと”の約束があるものでな」

「“でえと”？」聞きなれない言葉に、首を傾げる佐久間。

「ああ、逢引の事だ」佐久間は答えた。

「あの、佐久間先生。一橋の殿からお召しがあるのに、それを逢引如きで断るとは、どういう了見ですか。先生は、一橋を軽んじておいでですか？」

「うむ？さつきから、やけに挑戦的だ。柳はともかくとして、あの温厚な棚橋が？と、いうことはやはり……。佐久間は、いよいよ自分の想像が正しいことを再確認した。だが、そんなことはおくびにも出さず、答えた。

「軽んじてはいないさ。一橋と言えば、御三卿の一つ。しかも、今の当主殿はとんでもない英才であられる。だがな、俺と天秤にかけてしまえば、一橋の家も、かの殿も関係ない。俺の方が重いのだ」

「それを“軽んじている”と世間は言うのですよ」

「そうか？俺は」佐久間は言い放った。「日本の国宝、佐久間象山であるぞ？で、あるからには、どんなきらびやかな金銀を積んでも、値せんだろう？……俺は、金や銀に価値は認める。それはそれで珍重なものだからな。だが、そんな金銀でも、買えないものがある。かの名刀・正宗だって、金銀で買えるものではないだろう？要は、そういうことだ」

佐久間の言うところは明快である。要は、自分は金や銀では買えないほどに珍重される、伝説の名刀正宗と比肩するほどの大物だと言いたいのだ。

「…尊大ですね」

「尊大？違うな。これは……」佐久間は、髭をちよいちよいといじりながら、満面の笑みを浮かべ、答えた。「自信、あるいは自負とでも呼ぶべき性質のものだな」

棚橋は、諦めたようにため息を吐いた。この前までは、棚橋がため息を着く横で、柳が鬼のようにいかつい形相をしながらも、全身で怒りを抑えて座っていたのだがな、と佐久間は思い出しながら、またため息を吐いた。

「で？」佐久間は訊いた。「用件は、それだけか」

すると、棚橋は傷ついた体を労わるように、ゆっくりと手を突い

て立ち上がった。

「はい。用件はそれだけです」

佐久間はカラカラと笑った。

「ふん、棚橋、お前は別れの挨拶も満足に出来んのか？」

その言葉が、部屋中に響いた。その言葉は、棚橋の体を震わせた。そして、まるで砲弾によって崩された壁のように、座布団の上にはぼすんと崩れ落ちるように座った。そして、糸が切れたマリオネットのように座る棚橋は、ぼそぼそと口を開いた。

「……なんで、気づいたんですか」

「簡単だ」佐久間は続けた。「俺に別れを告げるものは、どうしたわけか皆、俺にイヤミなことを言って消えていくものでな。お前のように、忍耐強いヤツは特にその傾向が強い」

「はあ、そうなんですか」興味無さそうに棚橋は相槌を打った。

「ま、正直な、俺自身、悩んではいるのだ。どうして俺はこんなに見下して、恨みを買うことしか出来んのか、ってな。だから、一応研究はしているのだ」

「で、答えは出ましたか」

「ああ？出るわけもない」佐久間は頭を振った。「答えが出ていないから、こうしてお前とも喧嘩別れになっているんだろう？」

「はは、違うくないですね」

「一つ、訊いていいか？」

「は？なんででしょう。ただし」棚橋は指を一つ立てた。「一つ、先生にお聞きしたいことがあるんですけど」

「交換条件か。良かろう」佐久間は、そう前置きしてから訊いた。「なんでお前は、俺の前から消えるのだ？俺のことが嫌いになったか？」

棚橋は、少し考えてから、答えた。

「もちろん、佐久間先生の饗応に疲れた、っていうのもあるんで

すがね」

「やつぱりあるのか」

「ええ、でも……」棚橋は言った。「この体では、お役目が果たせませんから、おいとまを頂いたんです」

そう語る棚橋の目には、どこかよそよそしさがあつた。まるで、深海のように、淀んだ目だった。長年人間を見てきた佐久間は、その目の輝きの中に、嘘の色を見つけた。

「それだけか」佐久間は意を決して訊いた。

「え？」

「本当にそれだけか、と訊いているのだ」と佐久間は棚橋の目を見つめ、続けた。「お前、まさか、よからぬことを考えているのではあるまいな。例えば、仇討ち」

「……」柳は黙りこくってしまった。けれど、その沈黙が、如実に答えを語っていた。

「仇討ちなど、するものではない」諭すように、佐久間は言った。「他人の非業のために、自らを非業に落とし込む必要はあるまい？ それに、俺に言わせれば、人一人の死など、離れて見れば大したことではない。だってそうだろう？ 琵琶湖から水を一滴抜き取ったところで、琵琶湖は健在なのだから」

「でも、人は水滴ではありません」

「いや、水滴ではない」佐久間は言い放った。「いや、正確には、どんなに大きいものでも、離れて見れば小さくなる。人間とて、同じこと。どんなに大きなものも、離れて見れば水の粒のように振舞うものだ」

「では、先生は、消えてしまった水の事など、忘れてしまえ、と？ 遠くから見れば、人間などどれも同じなのだから、柳のことなど忘れてしまえ、と？」

「ふん、まあ、そうだな」佐久間は冷酷に言い放った。「俺の言っていることは、俗人にはそう聞こえるだろうな。だが、どう聞こえても構わん。俺は、お前に言わねばならない。仇討ちなど、何の

慰みにもならんし、したところで何の変化もない。ならば、そんなこと、するだけ無駄ではないか」

棚橋は答えた。

「ええ、わかりました」

口では、了解している。だが……。佐久間は、棚橋の目に、狂気の色を見つけた。それは棚橋という男らしく、まるで消えかけの蠟燭の火のように頼りないものだが、風向き次第によつては燃え盛りそうな、そんな色の狂気だった。

「で？」 佐久間は訊いた。「お前が俺に聞きたいこととは何だ」

「……一つだけ、お聞きしたいんです」 前置きしてから、大事な宝物を箱から取り出すかのように棚橋は答えた。「なんで、夏の星はあんなに瞬かず、輝いているのですかね？」

「は？」

思わず、佐久間は頓狂な声を発してしまった。突然、何を言うのだ、コイツは。さっきまでの柳の話はどうなったのだ、と。だが、しばし考えてから、佐久間は答えた。

「その質問に対しては、むしろ、“なぜ冬に星が瞬くか”という説明をしたほうが早いな。冬に星が瞬くのは、風によつて空気が揺れるからだ。陽炎のようにな。だが、夏には風が少ない。だから、夏の星は瞬かず、輝いているのだ。分かったか？」

この答えは、当世髄一の洋学者・佐久間象山による、最新の“科学的”結論であった。

だが、その答えに納得しなかったようで、棚橋はため息を一つつき、天井を少し眺めてから言った。

「……まあ、そうですね。佐久間先生に聞いた僕が馬鹿でした」「な、何だ、いきなり……」

「いえ、なんでもありません」 棚橋は、また立ち上がった。「では、先生。少しの間でしたが、お世話になりました」

「世話をした覚えはないが」

「こつという場では、そう言っておくのが礼儀なんですよ」 そっけ

なく、棚橋は答えた。

「ははは。なあ」佐久間は、棚橋に言葉をかけた。「お前が最初から、そういう風に俺と付き合ってくれていたら、もしかしたら同志になれたかも知れないのにな」

「そう言っていただと、嬉しいです。では」

棚橋は、傷が痛むのか、すり足で、部屋から出て行ってしまった。一人、部屋に残された佐久間。佐久間はため息を吐いた。

佐久間は、ときどき思うことがある。

いくら、弁論の力をつけたところで、無駄ではないのか、と。

自分は口舌によって生きている人間だ。それは否定できないし、否定するつもりもない。そういう生き方を選んだ以上、口舌の徒として生きていくしかないのだ。

しかし、口舌では、人間を救えないときがある。論、というものには理屈は通っているが、血は通っていない。論は、論理に忠実な人間を動かすことが出来るが、論理を蔑ろにする人間、あるいはわざと無視してしまう人間にはまるで意味のないものだ。

そういう、論では動かない人間と対峙したとき、いつも佐久間は無力感に襲われるのだ。

「俺は、果たしてアイツを止めることが出来たのか？」

その佐久間の独り言に答える者は、誰も居なかった。

色々な調度品に囲まれているにも関わらずがらんとした雰囲気のある部屋。その真ん中で一人座る佐久間は深いため息を吐いた。

河上彦齋、前田伊左衛門、そして松浦虎太郎の三人は、隠れるようにして清水寺の境内を連れ立って歩いていた。

「どうやら今日、清水寺で、佐久間象山がある公家と密会するらしい。一橋のお召しを蹴っていることから見ても、その情報は信憑性が高い」

という情報が、彩辻一派にもたらされた。そして、それが彦齋たち“実行犯”に伝わったのである。



清水寺は、どこか静かだ。昔は「清水の舞台から飛び降りると、芸事で成功できる」という俗信のおかげで、色々な意味で活気があつたらしいが、こう政情不安な日々が続くと、人々の活気は失われ、てしまつらしい。前田は、ため息を吐いた。

前田の前に、彦齋と松浦が歩いていて。松浦は、彦齋との同道が嬉しいと見え、どうにもはしゃいでいる。まったく、遊びではないんだが……。

「で？」彦齋は、不意に口を開いた。

「ん？」前田は答えた。

「いや、お前じゃない。おい、松浦」

「あ、はい！」やけに威勢のいい声で松浦は応じた。

「訊くが」彦齋は少し怒気を孕んだ声で、松浦に聞いた。「お前、本当に彩辻殿から許可は貰つたのか」

「はい！」即答だった。

彦齋が言うには、“小山の大将は、己の部下を、一時的にでも手放したからない”らしい。だが、彩辻殿はまるで犬でもくれてやるように、松浦を同行させている。彦齋の言に信を置くなら、それはつまり、彩辻殿は松浦を“部下”と見なしてはいない、つまりこの松浦は彩辻殿に疎まれている、ということなのだろう、と前田は思った。ま、彩辻一派のことを、ああ批判していた松浦の事、疎まれる要素は多分にあるだろうな。前田はため息を吐いた。

「どうやら、それは彦齋も同感のようだった。彦齋も、ため息を吐いた。」

「あと、もう一つ、いいか？」

彦齋は、呆れたように声をあげた。

「はい、なんでしょう？」

「頼むから、声を小さくしてくれ。困るんだ。こちとら隠密行動なんだからな」

「はい！」その松浦の声は、まだ大きかった。

彦齋は、まるで諦めたように、頭を振った。

なんとなく、彩辻殿に疎まれてる理由が分かるな、と前田は思った。こういう隠密行動が出来ないヤツが、隠密な行動を旨とせざるをえない組織で重用されないのは当然の事だ。

「……お前、長生きしなさそうだなあ」

つくづく、前田は言った。

「は？」

松浦は、首を傾げるばかりだった。

「だから」前田はため息を吐いてから、続けた。「お前みたいに、イヤに目立つ志士は、長生きできない、って言ってるんだ」

「なんでですか」

「そんな理由くらい、自分で考える」

面倒になった前田は、半ば匙を投げる格好で会話を打ち切った。

一方の松浦は、さらに首を傾げた。

彦斎が、そんな会話に口を挟んだ。

「…おい、松浦、なんでお前は志士になった？」

「え！？」松浦は、明らかに嬉しそうな顔を覗かせ、答えた。「

それは、俺が、幸せに生きるためです。それだけっすね」

「は？」彦斎は目を松浦に向けて訊いた。「お前、攘夷だとか、

尊皇とか、そういう思想に共鳴して家中を抜けて、浪々の志士になったんじゃないのか？」

「はは、俺は元々浪人です。実は親父の代に、人員整理に遭ってしまっ……」

この時代より少し前、大体天保期に前後して、日本中の藩（本来、日本において“藩”という行政単位は後世に作られた言葉なのだが、便宜的に使わせていただく）は藩政改革に乗り出した。江戸開府から200年、江戸幕府は確かに弱体化したが、弱体化したのは藩も同じだった。どの藩も、累積していた借金で首が回らなくなってい

た。

今も昔も、経費削減のために一番有効な手段は、人件費の削減である。そして世の常として、そういう人件費の削減は、ピラミッド構造の下部から行なわれる。

つまり、天保期の前後には、藩からクビにされて仕事にあぶれた武士達、つまりは浪人が多数出たのだ。

彦齋はため息を吐いた。だが、そのため息は松浦を非難した風ではなかった。

「つまりお前は、仕事がないから志士活動をしているわけか」

と、彦齋の代わりに前田は訊いた。すると、松浦はすこし考えてから、首を横に振った。

「いいえ、ちょっと違います。俺は、クビ切りのない、そういう世の中を造りたいんです。でも、きつとそれは徳川の世じゃ果たせないと思っただけです。だから」

「そういう世の中を作ってくれそうな、尊皇攘夷の志士たちに組み合わせたわけだな」

と、彦齋は答えを呟くように言った。

「そう！まさにそうなんです！！」

満面の笑みでうんうんと頷く松浦だったが、前田はそれを冷ややかな目で見ていた。

こういう不遜な輩が志士活動に参加しているから、上手く行かないのだ、まったく。理論的な裏づけのないこういう奴らのせいだ……。

だが、彦齋は松浦に言った。

「ああ、そうだな。頑張れよ」

「はい！！」

松浦は、これ以上ないほどに微笑んだ。

そんな二人のやりとりを見ながら、しかし、と前田は頭の中で考えた。

こういう風な理由で、志士活動に参加している人間は、初めて見

たな。

前田が今まで見てきた志士たちは、皆が皆、尊皇について、あるいは攘夷について一私見を持っていた。たとえ拙いにしても、尊皇について熱く語り、攘夷について叫んだ。

だが、松浦は違う。

“クビ切りのない社会を作る”という、尊皇とも攘夷とも異なる視点で、国を変えようとしている。

不遜？確かに不遜だ。国を作るのは打算ではなく思想だと思っている前田にとって、国作りの根幹に実利を挟み込むようなマネは、不遜でしかない。

けれど、松浦の心にあるものもまた、志なのだ。そのことに、前田は気づきつつあった。

「そういえば」不意に、松浦が声を発した。

「ん？」

松浦は彦齋たちに訊いた。「なんで先生方は、京にいらしたのですか？だって、今の京は、危険極まりないのに」

その松浦の疑問はもつともだった。

池田屋事件によって、尊皇攘夷派の志士たちは肩身が狭くなっていた。池田屋に居た志士たちは、「京を放火して帝を奪取する」という、とてつもない計画を立てていた。その計画を嗅ぎつけた新撰組によって、その志士たちは「狩られて」しまった。

しかもこの事件は、尊攘の志士側に劣勢を生んだ。

この事件が明るみになったことで、「尊皇攘夷派志士たちは危険分子である」という意識が広がった。その結果、幕府側としても、事件とは無関係な、在京の尊攘派志士たちを検挙する口実が出来上がった。

そして、連日のように「尊攘狩り」の嵐が吹き荒れていた。

そんな、危険な状態の京に、わざわざ帰ってくる馬鹿はまずいない。だが、彦齋たちは長州からツテを頼ってまで舞い戻ってきた。

その理由を、手短かに、彦齋は答えた。

「復讐、だな。あとは、長州本隊の、先発隊」

「え？」

意味がわからない、という風に首を傾げながら、松浦は前田の顔を覗きこんだ。きつと、「説明して欲しい」という腹なのだろう。

前田は、彦斎の代わりに答えた。

「お前、知ってるか？池田屋事件によって、長州が大騒ぎになつてること」

「へ？知りません」

やっぱりなあ……。予想はしていたが、本当にそうだとやはり心が沈む。でも、めげずに前田は続けた。

「池田屋事件で、吉田稔磨さん、つていう、大物が死んだんだ。

その人は、長州志士の中でも、俊英の誉れが高い人でな。……お前、吉田松陰先生、つて知ってるか」

「いいえ、知りません！」松浦は、満面の笑みだったそうな。

知らないか……。予想はしていたが……。……、というところまで考えて、ようやく前田は気づいた。

「あのなあ！彩辻さんの先生だよ！！吉田松陰先生、つていうのは！！」

「あ、そうなんですか」

「とにかく」前田は咳払いをしてから続けた。「その吉田松陰先生つて人は長州志士たちを育てた人として有名でな、稔磨さんも、その人の弟子なんだ。だが、その人は池田屋で殺された。それだけじゃない。他にも、長州派志士が池田屋事件で相当死んだ。だから、長州では今、とんでもない騒ぎになっている。敵討ちだ、つてな。それで、決定したんだ」

「なにが、です？」

「派兵だよ」前田はさらつと云つてのけた。

「え？」

「池田屋で死んだ者たちの無念を雪ぐため、軍事力をチラつかせて幕府と交渉するしかない、つて長州で決まつてな。でも、きつと

戦になるぞ」

「そ、そんな暴拳が許されるんですか!？」松浦は訊いた。

「暴拳? そうだな」彦齋は言った。「俺たちもまた、その“暴拳”の片棒を担いでいるわけなんだがな」

「え?」

「俺たちは」前田は彦齋の代わりに言い放った。「その長州隊の、先発隊なんだ。形の上はな」

「形の上は?」

「おう」前田は言った。「俺たちは、長州本隊の斥候っていう名目で京に来たんだが、実は、俺たちは余り興味がない」

「え、どういうことですか?」

彦齋は言い放った。「俺はあくまで肥後の人間。それに、前田は因州の人間。だがこれは、長州の問題だからな。俺も前田も、今回の派兵について興味が持てていない。……もちろん、長州の人間たちには個人的な友誼がある。だから、当然同情の気持ちは沸くし、どうにかしてやりたい、という気持ちもある。だが、だからと言って、それだけでは自分がどうしようかと思っではならない。そういうことだ」

「冷たいですね、先生たちは」

ちよつと幻滅した、という風に口を尖らせる松浦に、彦齋は興味無さそうに続けた。

「冷たいんだろうな。だが、そういうものだ。……確かに長州との友誼は深い。だが、その友誼に引きずられて、一緒に倒れてしまふ道は避けなくてはならない」

「つまりは」前田は、彦齋の言葉を補足した。「俺も彦齋も、長州はやばい、と見ているわけだ。少なくとも、この派兵はいい結果にはならないだろうな。そんな沈みかけの船に、俺たちみたいな余所者が乗っかったまま、っていうのは馬鹿げてる、ってことだし、やっちゃいけないことなんだ」

「やっぱりそれは、冷たいですよ」

そう呟く松浦の顔を、彦齋が覗き込んだ。その瞬間、松浦は言葉を失った。その目は、普段の死んだ魚のような目ではなく、まさに人斬りのそれだったからだ。

彦齋は、まるで標的に刀を振り下ろすときのような威圧で、言葉を発した。

「お前に、なにが分かる？」

思わず、松浦は硬い唾を飲み下した。

彦齋は続けた。

「助けてやりたいんだ、俺たちも。だが、長州の負け戦のために我が身を危険にさらすわけには行かない。なぜなら、俺もまた、尊攘のもし火なのだから。長州が倒れても、俺は生きなくてはならない。この国を変えるために……。わかるか？お前に。長州の友を見捨ててなお、生きなくてはならない俺たちの気持ち、志が」

「……」松浦は、言葉がなかった。

前田が、言葉を発した。

「俺たちだつて、長州には恩がある。それに、個人的な思いもある。だから、今の苦境をなんとかはしてやりたい。でも、長州が倒れた上、俺たちまで倒れたら、尊攘の思いが無になっちゃう。だから」

「じゃあ、じゃあどうして先生たちは京に……」

その疑問に、前田が答えた。

「ああ、敵討ちだ」

「敵討ち？」

「お前、宮部鼎蔵、つて知ってるか？」

前田の言葉を、彦齋が訂正した。「鼎蔵先生、だ」

「ああ、宮部先生。先の池田屋事件で死んだんだがな、その先生の敵討ちにやってきた」

「宮部先生は」彦齋は、遠い目をして言った。「俺に、兵法を教えてくれた先生でな。それに、俺に尊攘という志をくれた人、そして、俺の人生を広げてくれた恩人なんだ。いや、恩人、なんて軽薄な言葉で、あの人のことを語るなど出来ない」

その彦齋の言葉には、普段冷静な彦齋にはない「熱」が籠っている



た。

「その先生が、まるで茄子でも刈り取るかのように、殺された。だから、俺は、その先生の無念を晴らしてあげたいのだ」

「実は」前田は言った。「俺は、宮部先生に会ったことはない。彦斎の恩人だから、敵討ちに参加している、ってわけさ」

「でも、それは……」

「わかつてるさ」彦斎は言った。「敵討ちしたところで、先生は帰ってこない。それに、敵討ちをすることで、俺自身が危険な目にあつかもされない。“長州を見捨てても、生きねばならない”って言葉と矛盾していることくらい、俺だって理解している」

「だがな、と彦斎は前置きしてから、続けた。「理屈で動けるだけだったら、人間、こんなに楽なことはないんだ。でもどうしても、理屈でいくら割っても、割り切れないものだって残る」

「長州の派兵は馬鹿なことだって判ってる。それに、宮部先生の敵討ちだって」前田は、彦斎の顔を推し量ってから言葉を継いだ。「馬鹿げたことだってことくらい、判ってるんだ」

「……だが、割り切れるものか」

彦斎は、一言、言い放った。その言葉は、今まで重ねた言葉よりも、はるかに雄弁だった。

「……すいません。生意気言いました」

松浦は頭を下げた。

「構わんさ」

彦斎は、言った。

「それより早く佐久間を見つけなきゃな」

前田がそう言ったのを合図に、三人はそれっきり口を噤んでしまった。

かつて江戸にいた頃、宮部先生は、よくこう言った。

「志した人間ならば、人の屍を踏みつけにしても生きねばならない」と。

彦齋は、宮部先生に質問した。

「先生、なぜですか？なぜ、踏みつけにしても生きなくてはならないのですか？」

その質問に、宮部先生は外の入道雲を、まるで孫の顔でも見るように眺めてから、答えた。

「志のない人間ならば、人の死を踏みつけにしくなくても良いのだ。人の死を、悼めばいい。けれど、志があるのなら、立ち止まってはいけない。志のある人間は、人の死を悼む余裕さえないはずだからだ」

俺には出来ない生き方だ、と、彦齋は思ったが、宮部先生は彦齋の顔を覗きこんだ。

「お前には、志はあるか？」

「志、ですか？」

「ないのか？」

「……」

無言の彦齋に、宮部先生は穏やかに諭した。

「きつと、これからの時代は激動の時代になる。お前も、ペルリの黒船、見ただろう？思えば、あの癸丑きちゆうの年から、この国は大きな流れに巻き込まれているようだ。その流れに流されないために、志を持って、彦齋。そして、流れの中でも、己をもち続ける」

それはつまり、俺の人生から「人の死を悼む生き方」という道を、先生は奪いたいのだな、と彦齋は思った。

そつだな、と前置きしてから、宮部先生は続けた。

「お前は、兵法を学べ。あとは儒学、国学。とにかく、学問を学べ」

「なぜです？」

「学問は、一つの指針だからだ。人間と違って、学問というものには正解がある。そして、学問には普遍性がある。きつと、荒海のような時代であっても、天上に輝く星のようにお前の行く手を示してくれるだろう」

「はい、学問の大切さは分かったんですが」当時掃除坊主だった彦斎は、自分の坊主頭をつるつと撫でた。

「だが？」

「なんで、兵法を筆頭に挙げられたんですか？」

宮部先生は、満足そうに頷いた。

「兵法、というのは、軍の行動法をまとめた学問だというのは知っているな？兵法、とは、軍という、水のようにてんでバラバラに動く液体を、勝利のために効率的に動かす技術だ。これは学ばねば」「それが、どうして？」

「上に立つ人間ならば、兵法は役に立つ。何故なら、上に立つ人間に一番必要なのは、とにかく人を動かす技術、それだけだからだ。……実は、上に立つ人間、というのには、志は要らない。人を動かす技術だけあれば、それで事足りる」

「はあ」

「だが、それではダメだ。だから、兵法を学んだ上に、儒学や国学を学べと言ったのだ」

ふんふん、なるほど、と彦斎が頷いた、その瞬間だった。

不意に、宮部先生が、噴き出し始め、遂にはがっはっは、と豪快に笑った。

「ど、どうしたんですか」

宮部先生は笑いを抑えてから、本音を白状した。

「実はな、私は兵法家なのだ。だから、しきりに兵法を薦めてみたのだが」

「そうだったんですか」

彦斎も、フ、と微笑んだ。

むむむ。竜馬め。

佐久間象山は清水寺の境内で肩を落とした。

「え？どうしたんですか？佐久間はん」

佐久間の目の前には、明らかに「その筋」の女が立っていた。

まったく、竜馬め。「美人でなくてもいいから、女を紹介しろ。ただし、遊郭あがりの女はダメ、それに、尻の小さい女はダメだ」と頼んで置いたにも関わらず、ヤツめ、何も約束を守ってないではないか。

佐久間の目の前にいる女は、小顔で目の大きい、結構な美人であるが、言葉の端に廓言葉が出ている。それに、尻も小さい。

そういえば、義弟の勝のところに行ったあの竜馬とかいう若者、何か大事を成しそうな風のある男だったが、一方でどうにもそそっかしい感じの男だったな、と佐久間は苦笑した。

実は、佐久間の言う「竜馬」とは、坂本竜馬のことである。のちに、薩長同盟の立役者として日本史に多大な足跡を残す有名人だが、当時はまだ、知る人ぞ知る人物だった。せいぜい、「幕臣三舟」と称される幕臣の一角・勝海舟の、数多い弟子の中の一人、そんな風にしか、まだ坂本竜馬という人物は見なされていなかった。

そんな竜馬に、佐久間は依頼をした。「大人物たる俺の子供は大人物のはずだ。おい、竜馬！いい女を紹介しろ！！」と。すると、竜馬は苦笑いを浮かべながら答えた。「ああ、いいですよ……。ま、女遊びにかけてはワシ、詳しいぜよ」

額から禿げかかった竜馬の頭を見て、佐久間は頷いた。竜馬の禿げは、当時遊郭で流行していた性病・梅毒によってもたらされたものだ。だから、佐久間も竜馬に頼んだのだ。この男ならば、そういう道に詳しいだろう、蛇の道はなんとやらだな、とばかりに。

だが、どうやら、竜馬は商人としか付き合いがないらしい。佐久間は頭を掻いた。

目の前にいる女を、佐久間は一喝した。するとその女は、苛立ちと困惑が織り交じったような顔を見せ、踵を返して帰って行った。

「ふん、まったく！無駄な時間を……！」

と、言いかけて、佐久間は言葉を詰まらせた。

佐久間の目に、清水寺の、青い木の葉たちの織り成す色が飛び込んできた。それに、心を奪われたのだ。

「思えば、この数ヶ月、忙しくて木々の変化になど興味を払っていなかったな。大人物、というものは、かくも忙しいものか」

と、夏の木漏れ日を浴びつつも、国事に思いを馳せる。

「確か、京に来た頃は、まだ桜が咲いていたな」

一橋公に請われて京に来た形の佐久間象山だったが、それだけで納まる男ではなかった。

三月に京に上って知り合いのツテで屋敷を借り、そこを拠点に定めてから、佐久間象山は己のツテを総動員させて、朝廷とのパイプを作り上げた。公卿の某と知己を得、その公卿の口から帝に意見上申を出来るまでになった。もちろん、「一橋公の客人」という“伝家の”ドスを利かせた点はあるにせよ、京に上がるまで、まるで朝廷とつながりの無かったことを思えば、やはり佐久間象山という人間は“ヤリ手の男”なのだろう。

そして、佐久間は次なる一手を打とうとしていた。

それは、帝を遷す計画である。

佐久間という男は、帝、というものを、「大義名分のありか」程度に理解していた。

“帝を獲ればこちらの勝ちだ。何故なら、「帝に弓を引くものは逆賊だ」という儒教道徳に、皆毒されているからだ。つまり、帝とは、軍事的な要衝よりも、はるかに重要性の高い『要衝』なのだ”そんな割り切った考えを憚ろうともしない。

けれど、この佐久間の読みは、見事に当たっている。と、言うのも、佐久間を京に招聘した張本人である一橋公自身も、後に、帝の取り込み工作に失敗した上、軍事行動を見せたがために逆賊扱いさ

れ、失脚する羽目になることから判ろう。

そう、佐久間は、その帝という『要衝』を獲ろうとしているのだ。佐久間は、公卿某にこう論じた。

「今の京は、池田屋の件で明らか通り、非常に危険である。池田屋の件は事前に防げたから良いものの、これからこういう事態が起らないとも限らない。帝の御体は地上に唯一つ、神聖なるものにして、臣下たる我々は万難を排し、有事に備えるべきである」と。公卿某は訊きかえず。「では、どうすればいいのでおじゃるか？」と。

そうなれば、公卿は佐久間象山が張つておいた蜘蛛の糸に足を絡め獲られている。佐久間はこう上申する。

「仮に、帝に覚えめでたい会津などの兵を増員する、という手もござろう。しかし」佐久間は、その可能性をアリでも踏み潰すように握りつぶす。「帝の覚えめでたい兵たちは、もうすでに精勤を極め、これ以上の増員はならない。かといって、これから新規に信の置けない兵を恃むのは、極めて危険である」

当然、公卿某は訊き返す。「他の手はないのか！」と。

「一時的に、帝を江戸にお遷しになられてはいかがか？」佐久間はちよつと挑戦的に、あるいは皮肉っぽく提案する。「幕府は、帝にとつて一番の忠臣たち。命を懸けてでも帝の御盾となりましょう」さすがに、公卿某は首を横に振る。「箱根山の向こうには、鬼が住むというではないか。それに、かの地には異国の者も多いと聞く。そのようなところに帝をお遷しになど出来ん！」

やれやれ、と佐久間はここでため息を吐く。まるで、あなた方が文句ばかり言うから、という風に。そして、佐久間が本当に提案したいことを、この刹那タインクで口にする。

「帝を、彦根にお遷しになられては？」

「ひ、彦根、だと？」

「ええ。琵琶湖の方にある、井伊家の城下町ですよ。京からそれほど離れてはおりませんし、しかもそこには“井伊の赤備え”と名

高い、井伊の兵が沢山おります」

「だが、彦根といえば、あの不忠者・井伊直弼の彦根であろう？」  
その公卿某の意見を、佐久間は速やかに封殺する。

「その不忠者は、既に死にました。そして、今の彦根城主は、忠義者で有名でござる」

「むづ……」

実は、別に直弼の後の彦根城主・井伊直憲は忠義者として知られた人物ではないが、佐久間には読みがあった。どうせ世間知らずの公家たちのこと、「忠義者」と吹き込めば、たとえ本人が不忠者であつたとしても忠義者と映るであろう、と。

事実、その読みは当たつた。

その公卿某は、見事に佐久間の張つた綱にかかり、もはや佐久間の意見を、随意に帝に具申するだけの木偶人形と化した。その公卿は、「その意見、帝に上申しておこう」と、佐久間に約するまでになつたのだ。

「あと、一歩だな」

暑い風が吹いた。

佐久間は珍しく和装だつたが、襟を少しはだけさせて、そのまま体をあおいだ。別にそんなことをしても涼しくなることはないが、気分の上では涼しくなる。だが、やはり気分だけで遮れるほど、今年の夏の日差しは弱くなかつた。

「……帰るか」

佐久間がそう呟いた、その刹那だつた。

「……佐久間象山先生と、お見受けいたします」  
と、穏やかな低い声が佐久間の背後から響いた。その声の感じからは、知性と教養を感じさせた。まるで、どこかの大名の掃除坊主のように、控えめで細やかだつた。

佐久間が声の方に振り返ると、目の前に、短身痩躯で年のころ20歳代後半ほどの男が立っていた。全体に紺色の服を着て、刀を二本差している。緊張してはみたが、刀の柄に、汚れ防止のためにつ

ける柄袋がつけられていたので、少々緊張を解いた佐久間であった。  
「なんだ？お前は？お前は俺のことを知っているようだ、俺はお前を知らん。名乗れ」

と、佐久間は言葉に面倒くさそうな響きを持たせ、その男に訊いた。

その男は、少し悩んだようなそぶりを見せたあと答えた。

「……申し遅れました。拙者」

「拙者？」

答えを促す佐久間。その男は言い放った。

「河上彦斎と申します」

「ほう、聞かん名だな。生まれ国は？」

「肥後です」

「肥後、か」

確かかの国は、尊攘派と俗論派の二つに分かれているはず、と、肥後の情勢を思い出そうとした佐久間だったが、途中でその作業を取りやめた。なにせ、佐久間象山は「開国派」という、非常に敵の多い持論を持っている男だからである。名前と生まれ国だけで、目の前にいる男が自分にとって敵か味方かを判断できない、と匙を投げたのだ。

佐久間はため息を吐いて、言った。

「で？何の用だ。俺は忙しい。俗物に付き合う暇は無いんだが」

大抵こう言えば、「有名人だから声をかけました」という手合いはすこすこと引き下がる。だから、佐久間はいつも見知らぬ人間に呼び止められたとき、こう言う。だが、河上を名乗る男は答えた。

「当代の大学者・佐久間先生に、お聞きしたいことが……」

ほう？

「なんだ、聞きたいことは。馬鹿な質問には答えんぞ」

では、と前置きしてから、河上は口を開いた。

「この国は、癸丑みづうし以来、すっかりおかしくなっていました。

まるで、齒車のずれた時計のように。なぜです？なぜ、この国の齒



車は狂ってしまったのでしょうか？」

長年色んな人間を見てきたが、こんな根本的な質問をかましてくるヤツは初めてだ。一体コイツは……。と、佐久間は女のように真っ白な、河上の顔を覗きこんだ。

この時代、しかも京にいる二本差して心ある者ならば、大抵のものは「憂国の士」だった。皆、ペリー来航、つまり癸丑以来この国を襲う混乱の原因を、自分なりに究明し、そしてその原因を、自分の考えた方法で糺そうとしているものばかりなのだ。だから、「憂国の士」同士でぶつかり合い、血沫が飛ぶのだ。つまり、「憂国の士」は、自分なりの「日本の混乱の原因」と、「日本をどうすべきか」という二つの持論を持ってしてしかるべきだし、少なくとも「日本の混乱の原因」くらいは捉えているはずだ。

にもかかわらず、今日の前にいる河上なる男は、その根本を佐久間に問うている。今まで佐久間に意見を訊きに來た人間たちは、「如何に日本を変えるか」を訊きに來るのに、今日の前にいる河上は、「どうしてこの国は混乱しているのか」という、佐久間のような「憂国の士」からすれば前提でしかない質問をぶつけてきたのだ。今までそういう人間を見たことが無かった佐久間は、現代で言うカルチャーショックに襲われているのだった。だが、佐久間が知らないだけで、実は当時「なぜこの国は混乱しているのか」という理由を求めている人間も、実は佐久間が知らないだけで、かなり多かったはずだが。

「あの、佐久間先生？」

河上の呼びかけに、ようやく自分が押し黙ってしまっていたことに気づいた佐久間は、少し考えてから、河上の問いに答えた。

「その質問は、簡単だ」佐久間は、まるで初めて言葉を発する子供のように、たどたどしく言葉を編んだ。「それは、その前まで閉ざしていた国を、開いたからだ」

その答えに、河上は意外そうな顔を見せた。だが、河上はその表情を追いやってから、さらに訊いた。

「では、どうすれば、この国の歯車を元に戻すことができるのでしょうか」

「そうだな、と前置きしてから、佐久間は続けた。

「そもそも、“歯車を元に戻す”などという生易しい手段では、もろどうしようもない。それほど、この国の病根は深いのだ」

「と、言いますと？」

河上に促されるがまま、佐久間は続けた。

「神君家康公が幕府を開府し、家光公の頃に国を閉ざして以来、この国は一つの湖になったのだ。いや、正確には、水溜りに、な」

「水溜り？」

佐久間の言を繰り返す河上。佐久間は頷いてから続けた。

「そう。水の流れの無い、水溜りにだ。波も無いかわりに、清浄な水も流れ来ず、どんどん濁っていくばかりの水溜りに。そういう水溜りには、そういう環境を好むものしか住み着かない。汚い藻が生え、ボウフラが湧く。そして、どんどん水溜りは汚れ、またどんどん藻が生え、ボウフラが湧き……、その繰り返しだ。つまり、そういう状態が、ペリー来航前の日本だ」

「“ペルリ”ではないのですか？」  
と、河上は佐久間の言の揚げ足を取ったが、佐久間はそれを一蹴した。

「浅学者！！“ペルリ”という読みは、オランダ読みだ！ヤツの国、アメリカでは、あれは“ペリー”と読むのだ！！」

「すいません」

「まあいい」

佐久間はさらに続けた。

「だが、癸丑の年、不意に日本は外国と交渉を持つことになった。さっきのたとえをそのまま使うなら、長い間水の往来が無く濁り濁った水溜りに、川の流れが押し寄せ、清水が入ってきたようなものだ。すると、水溜りを好んでいた、藻やボウフラたちはどうなるか、

お前にもわかるう？」

「はい」河上は答えた。「その清水に流されてしまつか、あるいは清水の清さを嫌い……」

「死に絶えてしまುದらう。で、実際、現在の日本では、そういう藻やボウフラたちが断末魔をあげる暇もなく、どんどん流れに流され死んでいつている」

佐久間はきつぱりと言いつつ放った。

「では、どうしたら？」

河上の問いに、佐久間は答えた。

「考えうる道は二つ」佐久間は指を二つ立てた。

「二つ？」

「一つ目は」佐久間は指を折った。「その清水の流れをせき止める方法だ。国をもう一度閉ざし、また一つの水溜りに戻る。つまりは、攘夷だな」

河上は意外そうな顔を見せたが、その顔を能面でも外すようにすくなく表情から追いやると、話を訊く姿勢を見せた。結局促された格好になった佐久間は、そのまま続けた。

「だが、攘夷ではならんだ。それでは、結局諸外国との実力差が開いていくばかりだ」

「実力差？」

「お前は、ペリーの黒船を見たことがあるか？」

「あります」河上は頷いた。

「あれは、風力で動くようなちやちな代物ではない。実は、石炭というものを燃やし、お湯を沸かして動いているのだ」

「お湯？」河上は首を傾げた。

「仕組みについて説明するのが面倒だからしないが、そういう仕組みを蒸気機関という。……訊くが、現在の日本の船と、アメリカの船で戦争をしたら、どちらが勝つと思う？ 仮に、船の数は同数、砲門の数も同数、大砲の威力・精度共に同等と仮定した場合、だぞ」

佐久間象山は、当時洋学の第一人者であるが、彼が一番注意を払

った西洋の学問は、「軍学」だった。日本が泰平を謳歌していた頃、数々の戦争を経験して洗練された「西洋軍学」に、佐久間は魅了された。実は、幕府は後にフランス式の軍制を取り入れることになるが、最初に西洋式の軍学に目をつけていたのは佐久間象山なのだ。

そして、佐久間が軍隊のことを引き合いに出したのも、そういう佐久間の興味と無関係ではない。たとえ話をするときには、自分にとって想像しやすいものを選びがちだ。

河上は答えた。

「当然、それは、アメリカが勝つに決まっていますでしょう。機動力が雲泥の差なら、当然機動力が高いほうが勝つに決まっています」さすがに河上は兵法を学んだことがあり、軍事関係の答えを出すのは早かった。

「そう。機動力一つとってもそうなんだ。そこまで考えが至れば、攘夷なんて不可能なことくらい、わかりそうなものだがな」

「しかし、日本はいくらでも兵が出せます。一方のアメリカは遠く、あまり多数を派兵できない。ならば、日本中が一致団結すれば、追い払うくらいは可能では？」

食い下がる河上の言葉を、佐久間はすばつと切り捨てた。

「いや、負ける。」

……確かに、こちらが劣っているのが機動力だけだったとしたら、お前の考えは正しい。機動力など使わず、つまりはどっかりと構えて迎え撃てばそれでいい。だが、今の日本と外国の間には、大きな実力差がある。例えば大砲。日本の大砲の有効射程は四半里、つて所だろう？だが、外国の大砲は、一里まで有効射程に含まれるという。そんな実力差では、刀で鉄砲に挑むようなものだ」

「しかし……」

なおも食い下がる河上に、佐久間は言った。

「お前、馬関戦争、つて知ってるか」

河上が、知らないはずがない。なにせ、河上は、この前までその当事者たちと行動を共にして、よくその話を聞いていた。だが、彦

齋は、

「いいえ」

と首を振った。

「そうか。長州で行なわれた戦争だ。いや、戦争と呼べる性質のものではないか。あれは、一方的な袋叩きだな」

佐久間は、馬関戦争の説明をした。

馬関戦争とは、今でいう下関戦争のことである。

長州は当時、尊皇攘夷論の風が吹き荒れていた。吉田松陰が遣した弟子達が、尊皇攘夷論を盛りたてていたのだ。

そんな長州には、海峡があった。関門海峡である。

洋の東西を問わず、海峡というのは交通の要衝である。特に、関門海峡というのは日本という国において重要な海峡であった。この海峡を制するものは、西日本を制する、とまで言われる海峡である。ちなみに、源平の合戦の最終決戦が下関の壇ノ浦であったことも、決して偶然ではない。

そういう要衝だから、当然異国船が通る。もし太平洋側から下関を通れないとすれば、九州を大きく迂回しなければ日本海側に達せないからだ。

だが、長州の尊攘派はそれが許せなかった。

そして遂に、長州は暴発した。

ある日、長州の尊攘派は、関門海峡を封鎖し、アメリカ商船ベンクロープ号に砲撃を加えた。もちろん、あくまで商船であるベンクロープ号にはなすすべなく、逃げまどうしかなかった。

だが、アメリカはその長州の攻撃を問題視し、たまたま横浜に停泊していた軍船の舳先を下関に向けた。

「どっちが勝ったと思う？ わずか一艘の軍船と、長州の間での戦争。どっちが勝ったと？」

「……」

佐久間の問いに、河上は無言で通した。もちろん、河上はその答えを知っている。知っているが、言えないのだ。もし、それを言っ

てしまえば、「攘夷」などというものが、ただの夢物語、佐久間の言葉を借りるなら、水溜りの中で高いびきをかいて寝るボウフラの、自分勝手な夢程度のものにまで貶められてしまふ。そのことを本能的に感じている河上は、何も言えないのだ。

「勝ったのは」佐久間はきっぱりと言い放った。「アメリカだ」そう。長州はわずか一隻のアメリカ船に、負けたのだ。

しかも、その負け方も半端でなかった。当時、長州が持っていた軍艦は四隻だった。だが、その四隻中二隻は撃沈、一隻は大破。事実上、長州海軍はわずか一隻の異国船により壊滅させられたのである。

「判るか？もう、攘夷なんて不可能なんだよ」

「じゃあ、どうすれば？」

声の震える河上。その変化に、佐久間は気づいていた。

さてはコイツ、元々自分の持論を持っていたな？恐らく、攘夷論者だろう。そして、それを隠して俺に話を聞きに来た。そういうことだな？しかし、なぜ？なぜコイツはそんなことを？理解が出来ない。佐久間は心の中で首を捻りつつ、続けた。

「攘夷が無理なら、開国しかないだろう？」

「しかし、神州日本なら、神風が……！！」

そう抗弁する河上に、佐久間はまるで春の稲妻のような大声で怒鳴りつけた。

「馬鹿者！！！！」

怒鳴られて、体だけでなく息まで硬直させる河上。一息置いてから、佐久間は続けた。

「なにが神州だ！なにが神風だ！そんなもの、ありはしない！あつたとしても、外国の連中は、そんなものを跳ね除けるほどの力を持っているわ！そんなありもしないものを恃みにしている時点で、日本の負けは決まりだ！……かの、清国のようにな」

「では、どうすれば……」

河上に促され、佐久間は続けた。

「言つたらう。開国だ。開国して、諸外国の知識を吸収する。技術を盗む。そして、国を根底から造りかえる。そう、新しく手に入つた歯車をむりやり納めるんじゃない。その歯車にあつた機械を新しく作るんだ」

この頃には、もう既に佐久間は気づいていた。目の前にいる河上の意図を。

コイツ、俺の器を計っているのか。わざと、答えに窮するような質問をすることで、俺の嵩を測ろうとしてやがる。ならば、見せてやる。俺の器には底がないぞ。という、悪戯っぽい気分に近い立てられて、持論を述べた佐久間なのだった。

「……そうですか」

河上は、特に反論もしなかった。たぶん、器を計り終えたのだらう。河上は、恭しく頭を下げ、なにがしかの礼を言つと、踵を返した。

「それだけの質問のために、俺を呼び止めたのか、河上」

佐久間の言葉に、河上は振り返つた。その河上に、さらに佐久間は言葉をかける。

「俺は日本の国宝・佐久間象山であるぞ？そうそうサシで話せる機会はない。どうせこんなまたとない機会だ。まだ、訊いておきたいことはないのか？」



まだまだ、器を計り足りないのではないかと続けようとして、さすがに口をつぐんだ佐久間だった。

一方の河上は、フ、と、春の日差しを全身に浴びて笑う子供のような清々しい笑顔を見せ、佐久間に向き直った。そして、その笑顔のまま、河上は口を開いた。

「……では、お言葉に甘えまして」

「能書きはいい」

話をつっけんどんに先に促す佐久間。その言葉に怖じもせず、河上は言葉を紡いだ。

「なぜ、夏の星は瞬かないのでしょうか」

どこかで訊いた質問だな、と佐久間は首を傾げたが、思い出せなかった。思い出せないということは、別にどうでもいい場面で訊かれた、どうでもいい質問なのだろう、たぶん、酒の席か何かで答えた質問なのだろう。そう結論付けた佐久間は、返す刀でその質問の答えを話した。

「夏の星が瞬かないのは、空気を揺らす風が、夏には吹かないからだ」

いつぞや答えたときよりも、はるかにいいかげんな受け答えだったが、佐久間にはそれで十分に思えた。佐久間には、予感があった。この答えは、きっと自分の立つところを鮮明に示すだけではない、ということを。

その予感は当たった。

河上は、なぜか満足そうに頷くと、河上自身が用意していたのだろう答えを口にした。

「夏の星は、人の志で輝いているんです」

「そうか。それがお前の答え、か」

河上は、微笑んだまま、頷いた。

「ならば言うことは何も無い、な」佐久間はおどけた口調で言葉を重ねる。「真の答えを前にしても、持論を曲げない人間に、言うことなど何も無い。質問に対し懇切丁寧に答えてやっても意味がな

いんじや、こちらも気が滅入る」

「いいえ」

河上は首を振った。

「何がだ」

「佐久間先生の今言われた答えは、“真の答え”ではありません。あくまで、答えの一つです」

「……」しばらく宙を眺めてから、佐久間は微笑んだ。「そうかもしれないな」

しばし、沈黙が二人の間に滑り込んだ。そしてその後には、夏特有の湿りを帯びた風が滑り込み、そして、その後には何も残らなかった。遠くの方で、蒼い木々たちが、さらさらと揺れた。

そして、木々たちがそのさえずりをやめた頃、河上が口を開いた。「……では、失礼します」

そう言つて踵を返した河上に、佐久間は声をかけた。

「……河上彦斎。その名、覚えておこう。……次、会うときには酒でも酌み交わせるといいな」

河上は、振り返らずに答えた。

「きつと、またお会いすることもあります。それも、近いうちに」

「ふん、そうか」

河上の後ろ背は、女の人のものと見紛うほどに、小さかった。けれど、その足取りには、力があつた。たぶん、あの男には道標があるのだらう。誰にも干渉されない、それでいて天に輝く星のような道標が。

だが、と佐久間は思った。

あの男は、と佐久間は河上の、小さくなつていく背を眺め、思った。

道標、というものは、正しいことが前提となつて存在している。

道に立つ道標は、確実に目的地を指し示しているように。だが、どうやら人間の生きる道には、明確な道標がない、と。

人生は道ではない。それに、社会、これも道ではない。そして、未来。これも、“目的地が存在する”という意味においては道なのだが、厳密には道とは言いがたい。どうやら、人間の目の前には、道標は存在しない。人は、道標を自分の少し先に勝手に造り、その自分の道標を疑いもせず歩く。だから、間違う人間も多い。奥州に行きたい人間が、日本橋の西に「奥州行き」という立て札を勝手に立てて、京都に来てしまうようなものだ。それは、仕方の無いことなのかもしれない。何せ、人生には、星のような絶対的な道標が存在しないのだから。

だが、佐久間は疑問をそのまま口にした。

「なぜ、皆こんなにも間違うのだ。答えなど、容易く出るだろうに」

天才・佐久間象山は、答えが常に見える人間だった。それは、攘夷の嵐が吹き荒れる中、一人開国を叫び、異国の技術を吸収するのが先決、と唱えていた男だ、という一点からも判る。そういう人間に限って、周りへの理解は足りないものだ。自分が超えられるものを、他人が超えられないはずはない、という了見なのだ。だが、佐久間は気づいていない。自分が軽々と超えているもの、それは普通の人からすればただの壁ではなく、大山のように越えがたいものであることを。

佐久間は、もう既に誰もいない清水寺の境内で、首を捻った。

もちろん、佐久間の疑問に答えてくれる者は、陰も形もなかった。それに、この時代、佐久間と同じ疑問を持つていた日本人は、両の指で数えるほどだっただろう。結局は、自分で答えを出すしかない。

佐久間は、額の汗を拭いて、ため息を吐いた。

宮部先生は、予断を差し挟まない人だった。そして、不確定要素も差し挟まなかった。つまりは、宮部先生は、確実な論理と、確定している事実を元に論を展開する人だった。

「人事を尽くして天命を待つなんていうのは、あれは嘘だな」

なぜです、と訊くと、宮部先生は笑った。

「天命など、この世界には存在しない。存在するのは、人の意思だけだ。そして、人の意思の積み重ね、それが時代を作るんだ」  
言い方を変えれば、宮部先生は人を信じている人だった。

そして、その話の締めくくりに、宮部先生は必ずこう言った。

「まず、人の意見はよく聞け。たとえ、自分にとつて、まるで承服できないような論理であつたとしても。なぜなら、お前にとつて承服できない論理であつても、その論理は人の意思だからだ。そして、その意思が積み重なつて、時代となるのだ。人の論理を否定してもいい。だが、話も訊かないうちに封殺するのは良くない」

「おい！彦斎！どういうことだ！！」

前田は、彦斎に食いかかった。

「なにがだ」

つつけんどんに受け答え、ずんずんと道を歩く彦斎。その彦斎を追いかけて、さらに声を荒げる前田。

「お前、どうして佐久間に自分の名前を名乗つた！！自分の名前を標的に教えるやつが何処にいる！！」

「あ、あのう……」

言いくそうちに、松浦が口を開いた。

「ああ！？」

「……声、大きいです……」

そう言われて周りを見渡すと、京の街の往来を歩く人たちが、何事かと前田たちに目をやっている。どこかの丁稚と思しき少年は、前田と目が合った瞬間、バツが悪そうに目を逸らした。

「おい、彦斎」さっきより声の張りを落として前田は言った。「お前、名前つてというのは、重要な情報なんだぞ。それを、おいそれとバラすなんて」

「……大丈夫だ」彦斎は力強く言った。「というか、佐久間象山のように敵の多い人間なら、どういつ名前を名乗つても変わらない

だろう。それに、三日以内に死ぬ人間に、本当の名を名乗ったところで、大勢に影響はないだろうしな」

「だが……」

前田の言葉を、松浦が遮った。

「あのう……どうしてさっき佐久間を殺らなかったんですか？だって、絶好の機会でしたよ？佐久間一人でしたし、しかも目撃者もない。しかも寺社領内ですから、逃げ切れるはずだったのに」

松浦の言うことは、正論である。

当時、寺社領における犯罪は、寺社奉行という奉行が取り仕切っていた。仮に、佐久間象山があの場合で暗殺されたら、捜査をしたのは寺社奉行だったはずだ。しかし、寺社奉行というのは、捜査能力がその他の奉行と比べても格段に劣っていたし、そのことは皆に知れ渡っていた。だから、「罪を犯すなら寺社領で」というのは、当時の常識だったのだ。

それに、確かにさっきの状況は絶好の機会だった。何せ、佐久間は一人、それにこちらは三人。しかも目撃者はなし。暗殺におあつらえ向きな状況である。

その松浦の疑問に、彦齋は答えた。

「ああ、俺の流儀だ」

「流儀？」松浦は首を捻った。

前田はため息を吐いた。まったく彦齋め、頭が切れる論客のくせに、どうしてこう普通の会話ではつっけんどんなんだよ。

「ああ、彦齋はそういうヤツなんだ」

「どういうことですか？」

前田は答えた。

「斬る人間と、一回は会話を交わす。それが彦齋の流儀なんだそうだ。なあ、そうだろ？」

彦齋は頷いた。

本当は、と前置きしてから、前田は続けた。「そういうことをするのは非常に危険だ。もしかしたら、標的に悟られちまうかもしれないからな。だが、彦齋はその方法で何度も標的を始末しているからな、誰も文句が言えないんだよ」

「へえ」

松浦は、彦齋の顔を、珍しい生き物でも見るかのように眺めた。

松浦に顔を覗かれた彦齋は、バツが悪そうに呟いた。

「流儀、というか、むしろ、義理みたいなものだな」

「義理？」

「いよいよ、前田にも彦齋の言葉の意味がわからなくなった。だから、前田は話の方向を変えようと、声を上げた。」

「で？佐久間象山、どうだった？」

彦齋は、ふいに振り返った。そして、前田の双眸を睨みつける。

「……な、なんだよ」

「いや」

彦齋は、また前を向いた。そして、ずいずいと歩く。けれど、呟いた。

「……ああ、あれは、実だ。ただし、蔓から養分を吸うだけ吸ったにも関わらず、まるで世間に何も為すでもない、要らない実だな」

彦齋はよく人間を実だの蔓だのと評するのだが、その意図が前田にはよく分からない。だが、彦齋が標的を「要らない実」と評したときには、彦齋がその暗殺に乗り気であることを示していることは、これまでの付き合いで判っている。

「そうか」

心なしが声を弾ませる前田は、実は気づいていなかった。彦齋が、「要らない実」と佐久間を評したときの、わがたまりのような一瞬の間を。そして、そのときに垣間見えた、彦齋の迷いを。

「じゃあ、次にヤツに会った時は……」

彦齋は、前田の言葉に、力強く、けれどどこか空ろに言い放った。

「ヤツ、佐久間象山が死ぬときだ」

宮部先生は一度だけ、彦齋の前でこう呟いたことがある。

「自分の論の間違いは、認めがたいものだ」

先生ほどの方がそうなのですか、と彦齋が思わず訊くと、宮部先生は嫌な顔をせず、答えた。

「むしろ私のように、人を教える立場になった人間の方が、自分

の間違いは認めがたいものだ」

つまり、その時から宮部先生は“間違いだ”と思っていたことがあったのだろうか。

「彦斎。私には出来ないことだが、お前ならきつと出来る。いいか彦斎、自分の間違いを認めることが出来る人間になれ」

でも、それは“変節”と呼ぶべきものではないのですか、と彦斎は言い放った。

「お前がそう思うのなら、それは“変節”でしかないのだろうか」  
宮部先生は、悲しそうに笑った。

色街から少し離れた路地は、イヤに暗い。

まるで光の全てを色街に持っていかれてしまったかのように、そういう路地は闇の中に沈む。もしかするとそれは、焚き火の光が届くか届かないかの所の闇が、異様に深いのと似ている。

そんな闇の中、千鳥足で歩く影があった。

彩辻である。

「ふい〜、京はいいところ、色街いいところ、ってな」

彩辻は、深い闇の上に浮かぶ三日月を眺めた。

「ああ、まるであれは河上の目みたいだなあ」

正直な話、彩辻は彦斎のことを嫌っている。彩辻からすれば、自分よりもはるかな大物志士がいきなりやってきて、自分たちのやり方に文句を言わないまでも斜に構えられているのは、気分のいいものではない。

それに、と彩辻は三日月を眺めて思った。

あの目、あの目だ。

あの、細く、強い目。まるで「自分だけが正しい」と代弁しているようなあの目。あの目はどうしようもなく恐ろしい。まるで、自分のやることを馬鹿にされているかのように感じる。そして、嗤われているように感じる。とにかく、彦斎の目が、彩辻は嫌いなのだ。



「へへへ、まあ、いいさ」

フラフラと闇の中を歩きながら、彩辻はフラフラと独り言を呟く。その独り言は、闇の中に色もなく溶けていった。彩辻の歪んだ口からは、次なる言葉が出た。だが、その言葉は、闇の中でも消えもせず、確かに響き渡った。

「河上が、佐久間を殺つてくれさえすれば、俺も大物志士の仲間入りだからなあ。へへへ」

高杉晋作から、“河上彦斎を受け入れてほしい”旨の手紙が届いたとき、彩辻は正直悩んだ。そのような大物志士を、受け入れていいものなのかどうか。それを、果たして自分は受け入れることが出来るのか、と。

しかし、河上彦斎といえば「人斬り彦斎」と異名をとる人斬りだ。ソイツを一時的に仲間に加え、天誅をさせる。そうすれば、自ずとその彦斎の面倒を見ている自分の格も上がる。それこそ、久坂玄瑞や、山県狂介、伊藤俊介などに並ぶ大物志士になれる。

その算盤勘定が定まった瞬間、彩辻の手は、彦斎を受け入れる旨の手紙を書くために、筆を握っていた。

「へへへ、もう少しなんだ。もう少し……、それに、あの河上も、役に立つときはある。あの柳とやらを斬ってくれたときは、助かったなあ」

実は、柳の暗殺は、主義主張によるものではなかった。

遡ること一月、彩辻は、さる遊郭で、肩がぶつかったのぶつからなかったで、遊郭の客と大喧嘩になった。遊郭では刀を差さない決まりだから、当然殴りあいだったわけだが、彩辻は見事にやられてしまった。それを遺恨に思った彩辻が、自分を殴り倒した武士を調べ上げるうち、一橋家臣・柳に行き当たった。しかも、その柳なる者、おあつらえ向きに佐久間象山の護衛についている者だという。そこで、佐久間暗殺にかこつけて、柳に遺恨返しをしようと考えた彩辻は、彦斎に柳の暗殺を頼んだのである。

彩辻は、夜叉のような顔を、異様なほどに歪ませて歩く。しかし、

その顔を、彩辻は自ら律するようにつまむ。そして、顔を元の屈託の無い笑顔に変える。

「しかし」彩辻は、闇に沈む路地をきよろきよろと見渡す。そして、呟いた。「京は危ない、って聞いたが、それほどではないではないか」

今日、彩辻は一人で色街に行く、と普段にないことを言い出した。それは、彩辻なりの“祝勝会”のつもりであった。河上が自分を大物志士に引き上げてくれる、という“祝勝”。そういう性質の祝勝である以上、人を引き連れるわけにも行かない。

だが、当然部下たちがうるさい。

「彩辻さん、京の一人歩きは危ないですよ！」

「先生ほどの人物なので、狙われるかもしれませんが！」

「俺がお供します！」

そういう部下達の言葉に陶醉しながらも、彩辻はその言葉を袖にした。

「誰の心配をしているんだ？俺は、かの神道無念流で剣を学んだ男だぞ？」

神道無念流、とは、当時江戸で盛況を誇っていた剣術流派である。神道流といえ、遠く長州にまでその雷名が轟いている流派だ。そんな流派のことを引き合いに出されては、その言葉に部下達はしぶしぶ了解するしかない。

あまり表にはしていないことだが、彩辻は腕の立つ男である。同じ流派で同じ長州の桂小五郎などと比べてしまえば遜色あるものの、並みの剣豪ならば打ち据えるだけの剣腕があった。

腕の立つ人間ならば当然思うことだが、いつかはこの剣腕を何らかの形で試してみたい、という気持ちが彩辻にはあった。だから、意外なほどに静かで、誰も襲ってくる気配のない路地に、ちよつと興奮したような気分になっていた。

祝勝のついでだ、だれか、俺を襲ってきやがれ。振り返ちにしてやる。酒と、自分の策に酔っている彩辻には、普段なら絶対に抱か

ないだろう、そんな尊大な気持ちが始めていたのだった。

不意に、彩辻の足がもつれた。

「お、おわっ！！」

彩辻は、いきなり見えないつつかえ棒を取り外されたかのように、派手に転んだ。

「お、イテテテテ」

口では痛いと言ってはいるものの、深酒のせいで殆ど皮膚感覚がない。ただ、体の殆どを何か硬いもので押しつぶされたような圧迫感しか感じなかった。

「あゝあ、酔っちまったなあ」

彩辻が立ちあがり、袴を叩いていた、その時だった。

突然、塀と塀の間にある、裂け目のような隙間から、きらつと光が差した。いや、彩辻にはそれが光に見えたのだが、実際には違った。

脇差の切っ先だった。

脇差の切っ先が、まるで弾丸のように飛び出し、彩辻の腹に突き刺さった。

「ぐ！」

思わず、よろける彩辻。だが、瞬時の内に己の置かれている状況を理解した。なるほど、刺客か、と。彩辻は油断したとばかりに苦笑いを浮かべ、己の刀を抜いた。そして、己の体の調子確かめる。どうやら、腹の傷はそれほどの手では無い。それが証拠に、腰の捻りを使わねばならない抜刀を、違和感なしに出来た。それに、酒を飲んでいて皮膚感覚が鈍っていること、また気が大きくなっているのも良かったことだといえる。

だが、ここで彩辻は逃げるべきだったのだ。いつもの彩辻だったら逃げていたはずだ。なぜなら、彩辻は危ない橋は渡らない男だ。死地に自ら飛び込むような人間ではない。

だが、酒で気が大きくなっているせいで、過信が彩辻を支配していた。

「おい！出て来い！神道無念流の剣サバキ、見せてやるぞ！！」  
彩辻はそう呼ばわった。

すると、まるで幕から出てくる役者のようにして、刺客が姿を現した。

全体に身なりのいい侍。年のころ20歳代の後半だろうか。左手には、彩辻の血で汚れた脇差が握られていた。そして、まるでうなだれるようにして彩辻の前に立ち尽くしている。それはまるで悪鬼のようだった。

「出てきたか、つてあれ？お前一人か」

彩辻の問いに、その刺客は答えなかった。

普通、暗殺というのは失敗を恐れて、複数人でやるものである。事実、人斬りで名を売った彦斎だって、前田と組んで人斬りを行っている。だから、彩辻は疑問に思ったのである。一人とはどういうことだ、と。

「おい、何の用だ！」

彩辻はさらに刺客に問いかける。だが、刺客は何も言葉を発しない。だが、言葉の代わりに、脇差を投げ捨て、刀を抜き放った。

「ほう、言葉は無用、か？」

茶化すような口調で訊く彩辻。だが、刺客はその質問にも答えず、刀を正眼に構えた。

だが、構えたその瞬間に、彩辻は刺客の腕がそれほどのものではないことに気づいた。

刀を抜き放ったときのなんとないぎこちなさ。そして、構えにおける脇の甘さ。その二つが、刺客の腕がそれほどのものではないという証左だった。少なくとも、彩辻よりは稽古が進んでいないことを示している。

だとすると、さらなる謎が出てくる。

なぜ、そんな腕の立たない人間を、刺客に寄越すのだ？

普通、暗殺の刺客には腕の立つ人間をあてがうのが普通だ。なのに、なぜ自分に寄越された刺客はこんなに弱そうなのだ？

まさか、誘っているのか？とも彩辻は考えた。だが、自分の目の前に立っている刺客の隙は、そういう性質のものではなかった。出来る人間が、敵の構えを崩すために見せる隙とは根本的に違うのだ。彩辻はその可能性を頭の中から追いやった。

「おい」

彩辻は、横柄に言った。

「今ここで、お前が引くつて言うなら、この場はこれで許してやるぞ」

正直、彩辻は興ざめしてしまったのだ。

暗殺というものは、標的にされた人間からすればたまったものではないが、一方で「殺したいほどに」目立っている存在だ、という事実も否定できない。だから、刺客を寄越されて、彩辻はなんだかこそばゆい気持ちになっていたのだ。おお、ようやく俺も、そのくらしい立場の人間になったか、と。

だが、その暗殺に寄越されたのが、こんなへボな侍一人。

ああ、なるほど、どうやら、俺に刺客を寄越したやつは、俺のことをみくびっているのか。彩辻は、そう結論付けた。だから、刺客に帰るように促したのだ。

だが、刺客は正眼の切っ先を上下に揺らしながら、言った。

「そうは行かない。お前に、聞きたいことがある」

「ほう？」

「そして、お前には死んでもらう」

「わからんな」彩辻は呟いた。「俺に聞きたいこと、だと？暗殺に来たくらいなのだから、俺のことが憎くてここに来たんだろ？」

「いいや」刺客は続けた。「お前と、西神道明に、だ」

「西神道明？……ああ」

確か、河上彦斎は暗殺前にその標的と接触するという悪癖がある。そのときに名乗る名が、確か西神道明だったな。確か、暗殺の前、

俺と連れ立って行った色街でその名前を一橋家臣・柳に名乗って、話をしていたな、と彩辻は思い出した。

「で?“西神”に何か用か？」

「……答える義理はない」

「はは、そうだな」

だが、と前置きして刺客は言った。「答えてもらうぞ。西神は何処だ？何処に居る？」

その、瞬間だった。

彩辻が、まるで一陣の風がうねるように動き出した。

抜いていた刀を振りかざし、わざと刺客の鼻先を切っ先が掠めるようにして振りぬいた。刺客の顔には、ピッと切り傷が出来た。

「西神？ふん、教えてやるか」

彩辻は、気づいてしまったのだ。今、自分目の前にいる刺客は、自分の事など見ていない。むしろ、自分の背後にいる西神、つまりは河上彦斎を見ていることを。

お前も、俺に価値を認めないのか！！お前も、河上に価値をおいているのか！！

その怒りがこもった一閃だった。

刺客は、微動だにしなかった。いや、もしかすると出来なかったのかもしれない。だが、なぜか不敵に微笑んでいる。まるで、彩辻の心の底なる劣等感を見透かしたかのように。その笑顔が、彩辻の心をさらに揺さぶる。

「おい、何を笑っているんだ！！」

イラついた口調を隠さず、彩辻は刀の切っ先を刺客の鼻の先に延ばす。

その瞬間だった。

刺客は、一定の律動でもって上下させていた剣の切っ先を、不意に上に躍らせた。そしてそのまま、切っ先は刺客の頭の上に躍り上がった。そう、刀を上段に振り上げたのだ。

だが、その一瞬を、彩辻は見逃さなかった。

刺客の鼻先に伸ばしていた剣を正眼にまで引き戻すと、刀を胸で抱えるようにして振り上げ、そしてそのまま切っ先を振り下ろした。彩辻の切っ先は、丁度刀を大振りに振り上げていた途中の、刺客の右手を切り裂いた。彩辻の籠手打ちが、成功したのである。ドシャ。

刺客の右腕は、まるで空を飛んでいる最中に寿命を迎えた鳥のように、地味な音を立て、地面に転がった。

これで終わりだな。彩辻は思った。きっと、これで相手はもう反撃できない。恐らく逃げ出すか、あるいは俺に殺されるかのどちらかだろう、と高をくくっていた。

だが、ここで刺客は手を止めなかった。

左手だけで刀を振り上げきったかと思うと、そのまま彩辻の右肩から腹にかけて、振り下ろしたのだ。右手が既にないのを物ともしていないかのように。

「くお！」

今度の傷は深手だった。彩辻は、左手で傷を庇おうとしたものの、その傷が到底左手程度で庇えるほどのものではないことを知ると、血にまみれた左手をまた刀の柄に添えた。

「……お前、痛みを感じないのか！」

彩辻の問いに、刺客は答えない。その答えの代わりに、大振りの打ち下ろしをまたもや仕掛けてくる。

あんな大振り、受け流してやる、とばかりにかわそうとした。だが、そのとき、彩辻は気づいた。自分の足が、もう既に動かないことを。まるで、下半身が全て石になってしまったかのように動かない。まさか、自分が思っている以上に、今の俺は深手なのか？！

刺客の大振りは、今度は彩辻の左肩にめり込んだ。まるで、稲妻に打たれたような痺れに襲われた彩辻は、刺客の剣の勢いに圧されるようにして、地面に倒れた。

「くお……」

強い。彩辻はそう思った。





この男、剣腕は大したことない。だが、剣腕を越えた何か、その“何か”がものすごく強いのだ。その正体がなんなのかは、彩辻には判らなかつた。

「おい……」

ヒューヒューという、喉を鳴らす呼吸を響かせながら、刺客はうつ伏せに倒れる彩辻に声をかけた。

「教える。西神は、何処に居る？」

彩辻は、地面のぬるぬるした感触を気味悪く思い、そのぬるぬるしたものの正体に思いをめぐらしながらも、その刺客の顔を見上げ、言った。

「……言うか。馬鹿が」

「そうか」

刺客は、彩辻の背中に、思いつきり刀を突き刺した。そして、えぐるようにして刀を捻ったかと思うと、刺客は刀を引き抜いた。彩辻の背中から、ぬるぬるしたものがあふれ出た。

ああ、なるほど。彩辻は、ようやく得心した。今、自分を包んでいるぬるぬるしたものは……。

「これ、血なのか。俺の……」

そう思っただけで見れば、確かに彩辻の手も、体も、足も、黒い血で汚れていた。たぶん、彩辻からは見えないが、きつと顔も赤く汚れているのだろう。

「最後だ」

刺客は、とんでもなく冷たい声を響かせ、続けた。

「西神は、何処に居る？」

「……話すと思うのか」喉の奥に、つつかえるものを感じながらも、彩辻は答えた。

「まあいいが」刺客は、彩辻の目を、まるで汚物でも見るような目で見据えた。「お前にとって、西神がどうという人間なのかは知らない。だが、これから死んでしまうやつが義理立てするほど、西神はお前にとって重要な男だったか？」  
「言われてみればそうだ。」

思えば、西神、いや、彦斎をこれ以上かばい立てする必要など何もない。だって俺は、死んじまうんだから。血の海の中に沈む彩辻は、もう既に自分という人間が、もうこの世の、ありとあらゆる事象とつながりを持っていないことに気づいた。ならば、どんなことを喋ってしまったって、俺には関係ないか。そんな、なげやりな気分になっていた。

「西神に、会いたいのか」彩辻は、口を開いた。

「……ああ」刺客は頷いた。

「……何処に居るのは言えない。何故なら、そこには多少なりとも可愛がった部下達がいるからだ。……だが、西神、いや、河上など、どうなっても構わない」

「能書きはいい」

「河上は、河上彦斎は、今、佐久間象山を狙っている。俺が死ぬことで、もしかすると佐久間象山暗殺計画がオジャンになるかも知れないが、あの男なら……」

「佐久間を暗殺するだろう、と？お前が死んでも？」

彩辻は地面に額を擦り付けながら頷いた。

「つまりは、佐久間先生のあとを尾行していれば、そのうち西神、いや、河上に逢えるってことだな」

彩辻はまた頷いた。

「そうか」

刺客は、不意に優しい口調で言った。

「悪いな。あなたには志があるんだろう？だから、佐久間先生を斬ろうって考えているのだろう？という事は、尊皇攘夷の志士だな？でも、悪いが、俺には志などない。俺のような人間が、お前を

斬ってはならないはずだ」

ほう、では、どういう思いでお前は動いているのだ、と訊きたかった彩辻であったが、その言葉は口から出ることなく、喉から口にかけての腔の中で、ぐるぐると立ち往生している。

「だが」

刺客は、誰に言うでもなく言った。

「俺はもう、止まれないんだ」

そう呟くと、刺客はまた闇の中に消えた。まるで、闇こそが自分の居場所だ、と言わんばかりに。

一方の彩辻は、血の水溜りの中心にうつ伏せに倒れながら、夢を見ていた。

高杉晋作や桂小五郎、久坂玄瑞に、伊藤俊介や山県狂介、井上聞多などといった、そうそうたる大物志士たちが、自分の演説に聞き入り、そして感嘆している夢。後に、明治維新の立役者になる長州の俊英たちの真ん中で、国を憂い、攘夷を断行すべし、と口から泡を飛ばして叫ぶ。

しかし、そんな夢の中で井上聞多が突然笑い出した。そして続いて、伊藤も人を小ばかりにするように、けれど控えめに笑った。その笑いの輪は、彩辻を囲む大物志士たちにどんどん伝染していく。

彩辻はとまどった。そして、まるで許しを請うかのように、高杉の顔に目を向けた。

だが高杉も、彩辻のことを慮るように、控えめに笑顔を見せていた。その隣に座っていた桂も同様だった。

『な、なんで嗤うんですか！』

彩辻は笑いの渦の真ん中で叫んだ。

けれど、思えばそうだった、と彩辻は冷静に思った。

そもそも俺は、桂さんや高杉さんなどに比肩できるような志を持ち合わせている人間だったか？久坂のように、狂人と揶揄されるほどの行動力があつたか？山県のように、人を率いる才があつたか？井上のように、議論の流れを自在に操る才があつたか？伊藤のよう

に、遠大な計画を着々と進める忍耐力があつたか？

思い返せば、俺には、その全てがなかった。卓越したものが、何も無かった。

夢の中で、それに気づいてしまった瞬間、足元がぐらつきだした。自分を囲んでいたはずの大物志士たちも、闇の中に、まるで亡霊のようにふつつと消えていく。

『高杉さん!!』

思わず、彩辻は叫んでいた。高杉は、狐のような目を彩辻に向けている。

『俺は、どうしたらよかつたんですか!!』

高杉は、笑った。いつもと変わらない、皮肉たっぷりな笑顔だった。そして、一言、言った。

『そんなもの、自分で考える』

夢の中でも、彩辻は地面に倒れこんだ。

「彦齋、どう思う?」

ばたばたとしている中で、イヤに落ち着いた調子で前田は彦齋に訊いた。

「知るか」

「おいおい、知るか、の一言か?」

彩辻一派の一人が、部屋の真ん中に座っている二人を邪魔そうに見下ろしていたが、脇をすり抜けて忙しそうに行ってしまった。

「まるで」彦齋は口を開いた。「マグロみたいだな」

「マグロ?」

「……ああ、江戸で流行している下魚だ。脂が乗っていて、結構旨い魚なんだがな」

「それがどうした?」

「漁師から聞いたんだが、マグロって魚は、泳ぐことをやめられないらしい。泳ぐのをやめると死ぬらしいんだ」

「だからそれがどうした」ちよっとイライラしつつも、前田は聞

いた。

「あいつら、マグロのようだな」そう言って、彦齋は狭い部屋をせわしなく動く、彩辻一派の下っ端たちをアゴで指した。

マグロは、泳ぐのをやめると死ぬという。確かに、彩辻一派のものは、何かに追い立てられるように、狭い部屋を行き来している。

「……こういうときに本当に必要なのは、腹を据えることだ」  
まるで呆れるように、彦齋は呟いた。

「そうだな」前田は、彦齋の言葉に同意した。「そんで、今おかれていた状況を必死で捉えて、体勢を立て直す。それが急務だつていうのに」

「今は頭がない。きつと、皆バラバラに動いているのだろう」  
示し合わせたように、二人はため息を吐いた。

彩辻一派の頭、彩辻が昨夜、死んだ。

しかも、殺された。

彩辻の帰りが遅いことを不審に思った部下達が、彩辻を探し回ったという。そして、探し回ってから一刻ほど経ったころ、彩辻の変わり果てた姿を発見したらしい。

彩辻は、神道無念流の達人だったという。にも関わらず、彩辻は二太刀受け、血の海に突っ伏していた。だが、そこは神道無念流の意地だろうか、その彩辻の脇には、下手人のものと思しき右腕が転がっていたという。きつと、彩辻は果敢にも刺客と切り結び、刺客の右腕を取ったはいいが、そこで息絶えたのだ。

彩辻頓死の報は、彩辻一派に衝撃を与えた。

元々、彩辻一派というのは、彩辻という人間なくしてはありえない組織である。彩辻一派のものたちの殆どは、彩辻という人間に心酔しているからだ。

頭を失った蟲は、死ぬまであかくしかない。

あるものは、彩辻の仇を取るんだ！と息巻いている。そして、またあるものは、他の一派と合流しようと、接触を図ろうとしてい

る。またあるものは、彩辻一派の後継争いに現を抜かしている。またあるものは、これを期に、田舎へ引き上げようとしている。彩辻一派は、そんな、浮き足立った状態なのだ。

「なあ、彦齋」

「ん？」

「これから、どうするよ？」

「そうだな……」

彦齋が、前田の問いに答えようとした丁度その刹那、彩辻一派の一人が二人の前に立った。二人は、その男の名前を知っている。石森だ。

「ん？どうしたんだ？石森くん」

石森は、前田の問いに答えず、二人の前にどっかりと座った。その無作法に、二人はちよつとイライラしつつも、とりあえず捨て置いた。

「どうしたんだ？石森くん」

イラつきながらも、前田は重ねて訊く。

前田に促されるようにして、石森は口を開いた。

「ええ、この度はどうも……」

「ああ、この度は……」

まるで、とつてつけたような石森の言葉だったが、一応礼儀として返事を返す前田。そして、その前田の言葉を、彦齋が遮った。

「……何の用だ」

一瞬、ぎくつと体を仰け反らせる石森。きつと、話しづらいことでも話しにきたのだろう。石森は彦齋の威圧に圧され、口を嚙くんでしまった。それを、彦齋は許さない。

「何用だ、と訊いてるんだ」

まるで、首元を押さえつけられたかのようなドスの効いた声。その声に、石森は覚悟を決めたのか、硬い唾をゴクンと音が聞こえるほどに飲み込むと、意を決したように口を開いた。

「実は、ですね……。河上先生にお願いが……」



「ほう？」

いちいち、彦齋の言葉に身を仰け反らせながらもじっとその顔色を伺う石森は、へりくだりつつ続ける。

「彩辻先生が、何者かに殺されました」

「ああ、知ってるが」

「たぶん、彩辻先生は、刺客にやられたものと思われます。彩辻先生ほどのお方でしたから」

「で？」前田は話を先に促した。

「我々は、敵をとりたいんです。そこで、河上先生、彩辻先生の敵討ちに加勢してはいただけませんか」

彦齋は、ため息を吐いた。まるで、それが結論か、と言わんばかりのため息だった。

さらに、石森は言葉を重ねた。

「こう言うてはなんです、彦齋先生は、いや、前田先生もそうですけど、彩辻先生のおかげで、こうして上洛なされているわけじゃないですか。ということは、先生方は彩辻先生に恩が残る、ということですよ。それを、フイになさるおつもりですか」

用意してやがったな。前田はそう思った。まるで、以前から練っていたかのような、よどみない言葉。事実、以前から練っていたのだろう。

そして、こういう論理を振りかざす人間は、止めを刺そうと一氣にまくし立てる。事実、石森が口を開いて息を大きく吸った、その瞬間だった。

石森の、息が止まった。

正座していたはずの彦齋が佩刀を引き抜いて、石森の首筋にその切っ先を突きつけていたのだ。一番近くに居たはずの前田でさえ、剣尖どころか身のこなしさえ見えないほどの速さだった。

「……あ」

「よく聞け」

彦齋は、刀を突きつけられて完全に血の気が引いている石森に、

言った。

「確かに、彩辻殿には恩がある。だがその恩は、佐久間象山を斬ることで果たす。それ以上のことは、彩辻殿の恩では動けないな」

「し、しかし……」

「くどいやつだ」

彦斎は、さらに刀の柄を強く握りこんだ。まるで、石森を脅かすように。案の定石森は、首元に突きつけられた剣先を見つめてブルブル震えている。

「それに、お前の狙いはわかってる」彦斎は、石森の震える目を、冷たい目で見下した。

前田も、実は石森の狙いは判っていた。

彩辻一派の中で、「彩辻の仇を取ろう」という連中と、「彩辻の後釜を決めよう」という連中がいることは述べた。だが、多少なりとも目鼻の効くものは、実は、その二つが同根であることを理解していた。つまり、彩辻の仇を取った派閥の頭、それが彩辻の後釜なのだ、ということ。そう、石森は、自分の派閥に彦斎を取り込んで、彦斎に仇をとらせ、そして自分が彩辻一派の新たな頭に、という算段があるのである。

「だが……」

突然、石森が口を開いた。ようやく、頭の中で考えがまとまったのだらう。やはり、よどみない、しかも隙もない言葉を紡ぎ出した。

「まだ貴方は佐久間を殺していない！！約束を守っていないではないか……」

「これから殺す」彦斎は短く言い放った。

「しかし、佐久間を殺すより、先生の仇を取ったほうが、先生もあの世でお喜びになるうぞ」

「彩辻殿が、なにを以って喜ぶか、など興味がない。だが、これだけは言える。俺たちは志のために戦っている。なのに、敵討ちなどに現を抜かしてはられない」

前田は心の中で笑った。おいおい彦斎、お前だって、宮部鼎蔵先

生の敵討ちにここまで来たんだろうが。

「じゃあやはり、貴方方は恩知らずだ」

この石森の言葉は、武士にとっては死刑宣告に等しい。武士とは、「恩」の体現者だからだ。

だが、彦斎は言った。

「ならば、彩辻殿が、どんな人だったか思い出してみる」

「え？」

戸惑う石森に、彦斎は言葉を重ねた。

「俺はあまりよく知らないが、彩辻殿がもし志のある人間だったなら、死してもなお、国事を憂いているはずだな？」

もちろん、彦斎が彩辻の人となりを知らないわけではない。むしろ、実は彩辻という人間が、国事を憂いているだけの人間ではないことも、薄々ながら理解している。ここで彦斎は、石森から逃げ場を奪ったのだ。

「……ええ」しぶしぶながら、石森は頷いた。

ここから、彦斎は畳み掛けた。

「ならば、彩辻殿は、自分の仇を討つよりは、攘夷の邪魔になる佐久間を斬ったほうがお喜びになるのではないか？ だってそうだろう？ 彩辻殿は、志がある人間なのだから」

「ぐ……」

石森は、グウの音も出なかった。

「とにかく」彦斎は、刀を引き、鞘の内に収める。そして、言葉を継いだ。「俺は、佐久間を斬る。彩辻殿の恩を、果たすためにな」首元に突きつけられた刀が外されたことで、ようやく顔色が元に戻ってきた石森は、一礼すると立ち上がり、すくすくその場を去っていった。

「ふん」

鼻を鳴らして石森の後ろ姿を睨む彦斎に、前田は訊いた。

「おい、彦斎。今の話、本当か」

「ん？ 何の話だ？」

「決まってるだろ。“佐久間を斬る”って話だ。いいのか？俺たちには時間がないんだぞ？たぶん、あと数日すれば長州の本隊がやってくる。そうなれば……」

「宮部先生の敵討ちが、出来なくなるな」彦斎は、どこか他人事のように呟いた。

「なら、佐久間のことなんて放っておけばいいじゃねえか。佐久間に、私怨はないんだ。別に放っておいたっていいじゃねえかよ？」彦斎は、ふ、と息を短く吐いた。まるで、腹の内にある色々な思いを吹き払うかのように。そして、目を閉じた。

「おい、彦斎？」

前田の声にも、彦斎は答えなかった。

「私は、異国の人間が許せないのだ」

かつて宮部先生は、一度だけ彦斎に言った。

なぜですか。なぜ、そんなに異国の人間を嫌うのです？そう訊くと、宮部先生は答えた。

「奴らは、この国を植民地にしようとしている」

確かに、そうかもしれないね。彦斎が相槌を打つと、宮部先生はさらに言った。

「そして、それ以上に許せない人間がいる」

だれですか？そう訊くと、宮部先生は答えた。

だれですか？そう訊くと、宮部先生は答えた。

「一つは、日本人にも関わらず、異国と結ぼうとしている輩。例えば、井伊大老。あれは嫌いだ。二つに、改革が必要だというのに、手をこまねいてばかりの俗塵。殆どの日本人がそうだろう。そして、三つ目は……」

三つ目は？彦齋が促すと、宮部先生は、呟いた。

「異国の人間や、異国と結ぼうとする輩、改革をしたがらない者たちを許せない、自分自身だ」

分かりません。彦齋はそう言った。一つ目と二つ目は分かります。でも、三つ目の“自分自身”とはどういうことなんですか。そう訊くと、宮部先生は困った顔を見せて、言った。

「彦齋。竹林を知っているか」  
もちろんです。

「竹林は、人間の手を加えなければどんどん他の森を駆逐していく。そして、やがてはそのあたり一帯が、竹林で包まれてしまうだろう。だが、そうやって森を駆逐したのは、竹の一本一本なのか？それとも、“竹林”という一まとまりによってなされたものなのか？」

意味が、わかりませんが。彦齋が言うと、宮部先生は微笑みながら続けた。

「竹の一本一本は、皆、上に上にしか伸びない。横には伸びていけないものだ。なのに、なぜ、竹林は広がっていくのだ？」

それは、地下に茎があつて、それが伸びているからでは？と彦齋が答えると、宮部先生は困ったような顔を見せた。

「まあ、そうだがな。だが、地下茎が伸びるのは、竹一本の意思で伸びている、というよりも、“竹林”の意思で広がっている、とは思えないか？」

竹林の意思？

「そう。竹の一本一本は、決して悪ではない。決して、他に対して攻撃的ではない。だが、その竹が寄り集まったはずの竹林には、なぜか攻撃性がある。…私は、時々思うのだ。個の意思と、集団の意思は、常に別物なのではないか、と」

それは……。彦斎は言いよどんだ。

最後に宮部先生は、呟いた。

「竹林は、森を食い荒らす“悪”だ。だが、竹の一本一本は美しい。それを、私は理解できないのだ。竹林が悪であったとしても、それを構成する竹は、必ずしも悪ではないのに」

「おい！彦斎！！」

前田の何度目かの呼びかけに、彦斎は目を開いた。

「……あ、ああ……」

彦斎は、心ここに在らずな生返事で返した。

前田は、まったく、とため息を吐いてから、彦斎に訊いた。

「おい、どうするんだ？佐久間の件は？」

「なあ、前田」不意に、彦斎は前田を見据えた。

「なんだ？」

「佐久間は、“異国と結ぼうとしている輩”だな？」

「ああ。あいつは開国派の異国かぶれだからな」手短かに、前田は答えた。

「じゃあ、そういうヤツを、許していいのか？」

「？なに言ってるんだよ、お前？攘夷を看板にする俺たちからしたら、佐久間は許すわけにはいかない人間だろうがよ」

「そうだな……」

「？」

首を傾げる前田の目を見据え、彦斎は言い放った。

「佐久間を、斬るぞ」

「……いいのか？」前田は、彦斎に訊いた。

「構わない」彦斎は言い放った。「宮部先生を斬ったのは、武州の浪人、近藤某とその一味だという。そんな、名のない者を斬るよりは、佐久間を斬ったほうが、先生もお喜びになるだろう」

「お前がそれでいいなら、構わないさ、俺はよ」

「よし」

二人は、立ち上がった。

「ふうん、なるほどな……」

佐久間象山は自宅の客間で、腕を組んで唸った。

「いかがいたしましたしょう？」

一橋公の命を受けた家臣が、佐久間の顔色を覗き込む。

その佐久間も、さすがに策が浮かばない。半ば諦め気味にため息を吐いた。

「まさか、長州が、京に派兵してこようとはな」

情勢は、急雲風を告げていた。

池田屋事件によって長州の志士たちが多数死んだ。このことが、長州の志士たちを暴走させた。高杉晋作ら慎重派の制止も聞かず、久坂玄瑞などの過激派が暴走してしまったのである。久坂率いる長州藩兵が、京に今にも到達せんとしている。

その報が、一橋家に伝えられたのである。

そして、一橋の客人であり、シンクタンクご意見番でもある佐久間に、この報がもたらされたのである。

「で？敵の数はいかほどだ」

「いえ、それは……」一橋家臣は言いよどんだ。

ふん、一橋め、普段威張り散らしておるくせに、敵の実数も把握できていないのか。…まあいい。多分長州のことだ、きつと数千しか兵を出せまい。仮に、戦になったとしても、幕府兵で駆逐できる数だ。それに、今は薩摩もいる。……いや、むしろ、薩摩が曲者だな。佐久間は考えをめぐらせる。

当時、京には薩摩と会津、桑名の兵がいた。会津も桑名も、どち

らかと言えば保守的なものたちで、あまり心配がない。むしろ心配なのは薩摩だ。薩摩は、英明なる君主のもと数々の俊英が揃っていた。一番予断を許さないのは、薩摩の動きであった。

「薩摩の動きを、掣肘せねばならんな……」

「は？」

「いや、なんでもない」

佐久間は、首を振ってから、一橋家臣に意見を述べた。

「そうだな。とにかく一橋公にあられては、長州に撤兵を求め続けられよ。とにかく今回の件、出来るだけ穏便にことを計られよ。ただし、もしものときのために、禁裏周辺には、守備兵を配されるが良からう」

「しかし、それで禁裏を守れるでしょうか」

「心配なからう。長州は、京までの強行軍で疲弊している。それに、数もせいぜい数千といったところだろう。片や、禁裏守護兵は精兵が1万くらい居るのだろう？ならば、問題ない。だが、戦というのは、常に蓋を開けてみないと分からないものだ。守らなくてはならないものがある戦においては特に、だ。とにかく、玉を守るのが最優先。そのためならば、売られた喧嘩も買ってはならぬ。とにかく、ことの沈静化に計られたし。……そう、一橋公に伝えよ」

「は、はい！！」

一橋家臣は、押っ取り刀で部屋から出て行ってしまった。

一人、客間に残された佐久間は、未だ腕を組んでいた。

「長州め……馬鹿なことを……」

佐久間は、思わず苦々しげに吐き捨てた。だが、間髪を置いてから、言葉を継いだ。

「だが、なかなか乙なことをしてくれるものだ。まったく、長州には馬鹿者しかいないと見える」

佐久間からすれば、長州のこの度の行動は愚拳に見えた。なにせ、禁裏を背にした幕兵と対峙しようとしているのだ。それは即ち、禁裏に弓を引く行為に他ならない。いくら長州が、「帝の周りの歪臣



たちに弓を引いている」と弁明したところで、その「歪臣」たちの後ろに帝が控えている以上、帝に弓を引いていることになってしまふ。

つまり、この戦、最初から長州に勝ち目がないのだ。

だが、長州がそんな愚拳をしてくれてくれたおかげで、佐久間の策の歯車が大きく動こうとしている。思わず、佐久間の顔から黒い笑顔がこぼれた。

「これで、遷帝計画が上手く行くではないか」

そう。佐久間には、「帝を彦根にお遷しする」、つまり遷帝計画を持っていた。この計画を持つ佐久間にとって、長州の行動はこれ以上ない機会に見えた。

未だ帝をお遷しするのに難色を示す公家どもにチラつかせるドスには最適だ。「長州が攻めてきている。幕兵が如何に精強と言えど、確実に帝の安全を保障できない。もし、この件で帝がお隠れあそばされたりしたら、如何なさるおつもりか？」とでも脅せば、公家どもは血相変えて、彦根への遷都を認めることだろう。

佐久間の腹には、そういう黒い計算があった。

「歯車が、大きく動こうとしているぞ」

佐久間は一人、腹の底を唸らせるような笑い声を上げた。まるで、悪鬼のような、恐ろしい声だった。

「さあ、日本の国宝・佐久間象山による、畢生の策、今、ここに成そうぞ！」

もしかすると、今この瞬間こそが、佐久間象山という人間の、頂だったのかも知れない。けれど、頂というものの先には、当然下り坂しかない。その下り坂が、ゆるい坂道なのか、それとも断崖絶壁のように切り立っているのかは頂に上ってみないと分からない。

だが佐久間という男は、頂に上りきつてもなお、その先が見えていなかった。まるで、頂一帯に濃い霧が立ち込めているかのように、先が見えていなかったのだ。

だから、佐久間はまだ自分が頂に達していないものと思ひ込んで、足を上にかけた。でも、もうそこには大地はない。ただ、濃い霧があるばかりだ。足を踏み違えた結果、佐久間は転んで、下り坂、しかも断崖絶壁に転がり落ちてしまった。

佐久間象山、という人間の人生を見渡したとき、どうにもそういう感想しか持てない。志半ばのはずなのに、なぜか今の瞬間まで、彼の人生は完結しているように見えてしょうがないのだ。

佐久間象山はこの一日後、坂道を転げ落ちた。

次の日、佐久間象山邸の近く。

その日は、まるで“夏”という季節を凝縮したかのように、夏っぽい天気だった。けれど、都は少し騒然としていた。かつて都を追われたはずの長州兵が近づいてきている、という情報が、まるでかの伝染病コレラのように、ついに市井にまで広がりを見せていたのだ。

そんな、どこか浮き足立った京の往来。前田と彦斎が、まるで日に当たるとその力を失ってしまう妖怪であるかのように、往来の陰にたむろしていた。

「いいか、手筈はこうだ」

彦斎は、白昼の往来の端で、前田に説明した。

「佐久間は今日、馬に乗って出かけたという。と、いうことは、馬に乗って帰ってくるだろう。ならば、馬を想定した作戦でなければ意味はない。そこで、考えた。お前がまず、刀を抜いた上で、佐久間の行く手を遮る。きつとヤツは馬に乗っているだろうから、落

馬するかあるいは馬を反転させるだろう……」

彦斎の、冷静な言葉に、慌てて前田が口を挟む。

「ちよ、ちよっと待った」

「なんだ」

「もし、もしもだけでも……」前田が、声を少し震わせながら聞いた。「馬が止まらなかつたら、どうするんだ？」

彦斎は頭を振った。

「そんなことはない。馬というのは、臆病な生き物だ。それに、人間というのも臆病なものだからな」

「いや、でも、もしも、ってことはあるだろ？それに、どうやら異国には、銃の音にも驚かないほど肝が座った軍馬がいるらしいじやねえか。もしかしたら、佐久間がそういう軍馬に乗っているかも知れないだろ？」

「……」

「……」

キョトン顔で前田の顔を覗きこむ彦斎に、必死の形相で彦斎を睨む前田のにらめっこは、しばし続いた。

「……あ」

彦斎が、今気づいた、とでも言わんばかりの声を上げた。けれど、彦斎は矢継ぎ早に言葉を、真面目な声で継いだ。

「……それで、佐久間は落馬したか、あるいは反転したところに俺が躍り出る。それで包囲は完成だ。あとは、討ち取れるほうが、佐久間を討ち取ればいい」

「おいしい！！話を流すな！！」

前田も必死だ。

「まあまあ」彦斎は両手を前に出して、馬にでもするかのように、前田を宥めた。「それに、条件は一緒だ」

急に真面目な口調になった彦斎。その口調に引きずられて、今の今まで前田にあった余裕の色が、一気に消えた。

「どういうことだ」

「馬に乗っている人間を斬る、というのは、それだけ危険が多い、  
ってことだ」

宮部鼎蔵直伝の軍学が血肉になっている彦斎からすれば、馬とい  
うものがどれだけ利を持った存在か、というのは海よりも深く承知  
している。

「危険なのは分かる」前田は言った。「でも、走ってくる馬の前  
に立ちはだかるほうが、後ろから躍り出るより危険だろうが！」

「いいや、それは違う」彦斎は首を振ってから、前田に言葉をか  
けた。「じゃあお前、仮にお前が佐久間だと思って想像してみる」

「あ、ああ」

「お前が馬に乗って家に帰る途中、自分の行く手の少し先に、自  
分の名前を呼びわりながら白刃を振りかざす浪人の姿が見えたら、  
一体どうする？」

「きつと、馬を止めるだろうな」

「ああ、そうだろう？そして、どうする？」

「とりあえず、反対方向に逃げる、よな」

「じゃあ、仮に、その反対方向に、また白刃を振りかざす浪人が  
現れたら、どうする？」

「え？どうする、って言われても……」

矢継ぎ早な彦斎の質問の、答えに窮する前田。

「そう、まさにそれなんだ」彦斎は、指を前田に向けた。

「ど、どういことだよ？」

首をひねる前田に、彦斎は説明を重ねた。

「確かに馬の前に立ちはだかるのは危険だ。だが、馬には手綱が  
ある。正しい判断が出来る人間が乗っていれば、お前が想像したよ  
うに馬を止めて、反転させるだろう。何故なら、それが定石だから  
だ」

「ああ」

「だが、後ろに刺客が現れて、事実上挟み撃ちになったときに、  
逃げるといっ定石は消える。つまり、挟み撃ちにされた瞬間に、佐

久間は一瞬、最善の手に迷うことになる。果たして、駆け抜けてしまふのがいいのか、それとも刀を抜くがいいか。あるいはもつと別の手を打つか。……つまりは、佐久間がどう動くかは、その瞬間にならないと判らないのだ。しかも、その時に、佐久間の前に立ちただかっているのは、後ろから躍り出る、俺だ。何故なら、佐久間は十中八九、お前の想像通りに馬を反転させているだろうからだ。そういう意味では、後ろから躍り出るほうが危険なんだ。後ろから躍り出た者には、偶然と運が入り込む余地があるからな」

「へえ」前田は、感心したという風に声を上げた。

「……宮部先生の、受け売りだがな」彦斎は白状した。

「宮部先生の？」

「ああ。宮部先生はよく言っていた。『兵法においては、挟撃は至上の手。だが、個人的闘争においては、下策』とな」

「どういうことだ？」

「先生は言っていたよ」彦斎はまだ見ぬ春を語る少女のように、宮部の言葉を諳そらんじた。「『個人的な闘争、例えば喧嘩のときに相手を困でしまうと、こちらが思いのよらない反撃を仕掛けてくることがある。こちらは拳骨くらいで済まそうと思っていたはずが、気づけば刃傷沙汰、なんてことになりかねない。だが、戦における挟撃は、これ以上ない上策だ。指揮系統が混乱するし、末端も過度の緊張と重圧の中戦わなくてはならないからな。もつとも孫子は、相手の逃げ場を全て潰す挟撃を否定しているがな』ってな」

「へえ、不思議だな」いつからか、腕を組んでいた前田は、そう呟いた。

「何がだ？」

「戦も喧嘩も、どっちも人間のやっていることなのに、どうしてこんなにも結果が違うんだろうな？」

「そういうものなんだろう」彦斎は不意に、前田から視線を外した。「で」

「そうそう」前田も、彦斎の視線に寄り添うように、視線を動か

した。

そして、二人は同時に言った。

「いつの間に沸いて出た？松浦」

二人の後ろには、いつの間にかうんうんと二人の言葉に頷く松浦の姿があった。しかし、二人の言葉が心外だったらしく、口を尖らせた。

「ひどいですよ、先生！僕がお使いに行っている間に、発ってしまっただもの」

彦齋は、そんな松浦の言い分のため息を吐いた。

「……ああ、彩辻一派の一人と派手に喧嘩をやらかしてしまって。あの宿舎にいられなくなってしまうんだ。で、お前は？今、彩辻一派は大変な時だろう？なのに、こんな所に居ていいの？」

「ああ、平気ですよ」平然として松浦は答えた。「だって僕、彩辻一派を抜けましたから」

「は？」彦齋と前田は揃って頓狂な声をあげた。そして、その声に促されるようにして、松浦は続けた。

「いや、今の彩辻一派に居ても、何も得るものがないですから」

「だからと言って」前田は口を挟んだ。「俺たちと一緒に居ても、得るものはないぞ」

「同感だ」彦齋は頷いた。「人斬りと行動を共にしたところで、得るものは傷と悪名と、あとは恨みくらいのもんだろうからな」

一瞬、彦齋の目が深く光った。

けれど、松浦は言った。

「約束したじゃないですか！一度だけ仲間に加えてください！」

「分かっているのか？俺たちのやっていることは」彦齋はトクトクと言葉を述べた。「必要悪だ。人を斬ることは、絶対的に考えれば悪だ。しかし、この時代を変えるためには、もはや悠長なことは言っていられない。……今、日本という樹から、新しい時代の実が成ろうとしている。だが、その実を大きく育てるためには、他の実を間引かなくてはならない。俺たちがやっているのは、まさにその

間引きなんだ。損な役回りなことは分かっているし、人の命を奪ったという悪名も付きまとう。きっと、俺にも前田にも、一生人斬りの烙印がついて回るだろう。しかし、俺たちは、それを甘んじて受け入れている」

前田も、頷いた。まるで、彦斎の言葉に加勢するかのよう。

彦斎はさらに続けた。

「俺たちは、時代を変えたいんだ。天皇を敬い、攘夷を実行できる、そんな国を造りたいんだ、何に替えても。損な生き方だが、俺は受け入れている。志と引き換えに何かを失ってしまうということ  
を」

前田も、まるで彦斎の言葉に同意するように頷いた。

彦斎は、松浦を見据え、そして訊いた。

「お前に、受け入れることが出来るか？」

「……」

無言になった松浦。その松浦の答えを待つ彦斎。

彦斎は、こういう男だった。右に行くか左に行くかを相手に問う。そして、その答えが相手の口から出るまで、直立不動のまま、ただ待つ。

そして、彦斎自身もまた、そういう生き方をしてきたのかもしれない。常に周りを問い、そしてその何倍も自分自身を問うてきたのだろう。彦斎の立ち姿には、数々の問いに答えという形を与え、そしてその答えを己の寄る辺としている男の影が確かにあった。

不意に、松浦は口を開いた。

「やらせてください」

彦斎は、松浦の目を見据えた。まるで、夏の星のように瞬かない目を。そして、志で輝く夏の星のように、確かな目を。

彦斎は、匙を投げたようにため息を吐いた。

「……初めてだからって、特別扱いはしないぞ」

「もちろんです」

「そして、もう一つ条件がある」彦斎は言った。

「なんです？」怪訝な顔をして、松浦が訊いた。

「ふん、前と条件は同じだ」彦斎は言った。「俺たちに同道す



るのは、一回だけ”という約束はしたな？その約束は守れ。それだけだ”

「そういえば……、なんでそんな約束を？」

彦斎はふいに嗤った。

「いや、ただ単に、俺自身がネクラなものでな。あまり、仲間を増やしたくないんだよ。俺には、前田一人で充分、ってことだ”

「そうですか……」肩を落とす松浦。

だが、前田は笑った。

「いや、でも、彦斎が俺以外と仕事するのは、けっこう珍しいんだ。そんなに気をおとすもんでもないさ”

こうして、佐久間象山を暗殺した三人として知られることになる、前田伊左衛門、松浦虎太郎、そして、河上彦斎の三人が、暗殺の舞台にそろい踏みしたのだった。

佐久間象山は、京の往来、佐久間邸近くで馬の背中に揺られていた。

鷹司め、保守の公家どもに取り込まれやがったな。佐久間の苛立ちまでは手綱に伝わらず、牧歌的な速さでしか馬は歩かない。馬丁が綱を引いているのも、馬がパカポコ歩く一因なのだが。

公家・鷹司卿の邸宅を訪れた佐久間だったが、鷹司は翻意していった。

『やはり、帝を京からお遷し遊ばされるわけには行かない』

もう既に鷹司は懐柔できていたとすっかり安心していて、しかも鷹司を突破口に策を実現しようと考えていた佐久間は、さすがに面食らった。鷹司に食って掛かった。すると、困った顔を浮かべた鷹司卿は、口を開いた。

『なにぶん、前例のないことにより……』

何が前例だ！佐久間は怒鳴った。癸丑の年以來、この国は前例のない世界に飛び出しているというのに、どうして朝廷だけは涼風の中にいようというのか！！

温厚な鷹司卿と言えど、さすがに反論をしてきた。

「佐久間殿は、帝を愚弄しておいでか!!」

鷹司卿は、この一言だけ言い切ると、佐久間に一瞥もせず話し合  
いの席から消えた。けれど、その一言は、まさに霹靂のような言葉  
だった。その一言は、国家100年の計すらも引つ繰り返す力があ  
ることを、浴びせられた佐久間自身が誰よりも深く承知している。

「しくつたな……。まさか、鷹司まで保守派に取り込まれたのか  
？」

馬の鬣たてがみの中で、そう見当をつける佐久間だったが、佐久間は気づ  
いていなかった。実は、鷹司が佐久間と喧嘩別れしたのは、“保守  
派に取り込まれたから” というような、政治的な理由ではないこと  
を。

鷹司が怒り出した理由が分からない、それが佐久間象山という人  
間の、“欠点”なのだろう。

「まあ、いいさ」

佐久間は、次なる策に向かい思いを馳せていた。

「公家がダメなら、今度は豚一公を使えばいい」

まるで、自分に言い聞かせるようにして、佐久間は呟いた。

佐久間の腹の中には、今度は一橋を使って工作すればいい、とい  
う黒い計算があった。だから、鷹司と喧嘩別れしたところで、あま  
り悲観的な気分になれないのだ。

そんな、頃だった。

突然、佐久間の行く手に、浪人風の男が二人、小路から躍り出た。  
一人は30歳くらい、もう一人は若侍、二人とも見ない顔だ。なん  
だ？佐久間が訝しく思ったのに呼応するように、その二人はまるで  
周りに見せ付けるように腰の刀を抜き払った。いきなりすることに、  
往来では娘や子供の悲鳴が響いた。そして、佐久間の馬を引いてい  
た、馬丁も逃げ出してしまった。

ほう、俺を暗殺する気か。

佐久間は、手綱を思いつきり引いた。馬は、佐久間の言うことを

よく聞き、刺客たちの1間目で身を翻した。

そして、そのまま手綱をかけた。当然、馬は走り出す。

だが、その瞬間、刺客の一人、30歳代の方が刀を振りかぶり、佐久間に浴びせかけた。その剣尖は、佐久間の股に浅手を作ったものの、大したことはない。傷を問題にせず、佐久間は馬を走らせた。三十六計逃げるに如かず、だな。抜き身のまま追ってくる刺客を、振り返って眺める馬上の佐久間。この瞬間、確かに佐久間は安心しきっていた。

だが。

佐久間の行く手に、突然陰が躍り出た。

その陰は、さっきの二人組よりもはるかに小さな陰だったが、はるかな威圧感があった。そして、その小さな体全体から殺気がにじみ出ている。

なるほど、挟撃か。思いのほか落ち着き払っている佐久間だった。そして、佐久間は気づいた。今目の前に出てきた男が、顔見知りであることを。

思わず、佐久間は呟いた。

「河上彦斎、か」

短身瘦躯、そして紺色の服。以前会話したときとは違い、刀の柄に柄袋をはめていない。それはつまり……。

「なるほど、お前、刺客だったのか」

佐久間は刹那の瞬間、全てを理解した。なぜ、河上彦斎が自分の前に現れたのか。そして、なぜ自分の器を凶るようなマネをしたのか。全ての糸が、一つにつながったような気分だった。けれど、爽快感はまるでなかった。むしろ、淡い後悔だけがまるでうらぶれた寺の鐘のように、佐久間の心に響いていた。

そんな、やけに落ち着き払う佐久間だったが、馬まではそうは行かなかった。まるで、空腹の獅子のような、圧倒的な殺気を放つ人間に物怖じした馬は、手綱の言うことを聞かず、暴れだした。

それをなんとか押さえ込もうとした佐久間だったが、うまく行か

なかった。体が、鞍から弾かれ、宙に浮いた格好になった。そしてそのまま体勢を崩した佐久間は、地面に落ちようとしていた。

その瞬間を、彦斎は見逃さなかった。

彦斎は、重力のくびきに支配されている佐久間に向かい、刀を抜き放った。柄を取り、右の足を大きく踏み出し、そして刀を鞘から抜き払い、斜め下から上に切り払う一連の動きを、刹那の瞬間に行なった。

その彦斎の剣尖は、佐久間の腰を捉えた。

「ぐお！」

彦斎は、さらに刀を持つ右手に力を込めた。まるで、天まで届くが如くに、刀を天まで払った。

腰から胸にかけて、致命傷を負わされた佐久間は、うつ伏せで地面に落ちた。

「……………」

初めて感じる、痛みを超えた感覚。痛みをはるかに超え、もはや何も感じない。まるで春の日のような心地よい倦怠。それだけが、佐久間を包んでいた。

「また、お会いしましたね」

彦斎は、佐久間に頭を下げた。

佐久間は体を何とか起こし、彦斎の顔を見る。

「……………なぜ、お前はそんなに悲しそうなの目をする？」佐久間はヒューヒューという、妙な音が混じる声で訊いた。佐久間には、それが自分の命が抜けていく音に聞こえた。「まさか、俺のことを哀れんでくれるのか？俺を殺そうとしている、お前が」

「いいえ」彦斎は、首を横に振った。

「じゃあ、お前は迷っているんだな」

その問いには、彦斎は答えなかった。

「ならば」

佐久間はフラフラとしながらも何とか立ち上がると、己の刀を抜いた。けれど、いつもと勝手が違う。きつと、腰に傷を負っている

せいで、体に力が入らないのだ、と佐久間は勝手に考えた。そして、  
体全体を包む、心地いい倦怠感を振り払うように、佐久間は叫んだ。

「そういう手合いに、俺の命、やるわけに行かない！」

どうやら既に内臓も損傷しているらしく、口にどろどろとした生臭いものがあふれ出ていたせいで、佐久間の叫びは多分にかき消され、ゴフゴフという奇妙な音に変わってしまった。

だが、そんな叫びもむなしく、佐久間は次の瞬間、地面に崩れた。佐久間の背後から、後ろから追ってきた刺客の刀が襲い掛かったのだ。

「……貴様!!」

佐久間は倒れながらも、抜き放っていた刀を振り回し、後ろの刺客を仰け反らせた。だが、反撃はここまでで、まるで、正座でもするのように、佐久間は地面に崩れた。

後ろの刺客が、またもや剣尖を佐久間に下した。その剣尖は佐久間の頭を割った。けれど、彦斎や、さつき股を斬った刺客とはまるでその剣腕が違う。まるで刃筋が立っていない。きつと、若い侍の剣尖だったのだろう。

「……おい」

佐久間は、前に立つ彦斎の目を睨んだ。そして、言葉を継ぐ。

「彦斎。お前はなぜ……」

この言葉は、突然潰えた。

佐久間は自分の腹を見た。腹からは、刀の切っ先が、まるで何かの角のように飛び出していた。その刀は、赤黒い血で汚れていた。

息が出来ない。言葉が出ない。

だが、その角のような刀は、するつと腹に消えた。次の瞬間、刀の代わりに血が滝のように流れ落ちた。

佐久間は思わずその傷を塞いだ。けれど、もう止まりそうもなかった。痛くはない。怖くもない。ただ、だるかった。そして、末期の瞬間の感覚がこれ程度のものなのか、と思いついたとき、初めて

恐怖が襲い掛かってきた。

「死にたくない……死にたくない……」

最早うわごとのような佐久間の必死な言葉も、周りにはただのうめきにしか聞こえないのだろう。

畜生、畜生。

薄れゆく意識の中、佐久間象山は、河上彦斎を睨むでもなく、観察するでもなく、ただ見た。佐久間の双眸に映る彦斎は、まるで行き先を見失った難破船のように、うつろだった。

佐久間は、口を開いた。

「おい、彦斎……」

「……なんですか？」

どこかうつろな顔をした彦斎。

佐久間は、ニイ、と嗤った。まるで、彦斎を嗤うように。

「後悔して、吼え面かくなよ」

それだけ吐き捨てると、佐久間はうつ伏せに倒れた。

こうして、佐久間象山は、死んだ。

「やりましたね！！」

佐久間暗殺現場近く、薄暗く人の往来もない裏道を駆けながら、松浦は言った。

「馬鹿言え！お前の攻撃は、全然致命傷じゃなかったぞ！そもそも、暗殺で頭を狙うな！刀が滑って致命傷が狙えない！まったく、ヒヤヒヤしたぞ」

前田もまた、佐久間を殺した血刀を引っさげたまま、裏道を必死で駆け、松浦を叱った。

「へへ、すみません……」

怒られたのにも関わらず、やけに顔が上気している松浦。きつと、“暗殺”というものの持つ、魔のようなものに少し当てられているのだろう。そういえば、暗殺稼業の駆け出しの頃は、俺もそうだったな、と前田はなんとなく昔を思い出しているのだった。

「本来は、首が欲しかったところだけだな」

「そうなんですか？」

「ああ。それが、天誅の流儀なんだ」

当時、天誅を行なっていたものたちは、やけに首にこだわった。

大体、首を竹に刺して、河原などに晒すのが“流儀”だった。

「でも、なんで今回は……？」

松浦の疑問に、前田はつつけんどんに答えた。

「あ？彦斎のせいだ!!」

いつも、彦斎は一撃の下に相手を斬り殺す。右足を大きく踏み出す、片手の胸抜き。あれにかかった者は、絶対に獄門送りだった。

だが、今日に限って、彦斎の必殺剣は必殺なりえなかった。いつもだったら、彦斎が斬り殺した死体の首を前田が切り落とせばそれではよかったのだ。にも関わらず、今日、彦斎はしくじった。それで暗殺に手間取り、首を落とすところまで行かなかったのだ。

「おい、彦斎！何とか言えよ！」

前田は一緒に駆けているはずの彦斎にそう叫んだ。けれど、返事がない。

「彦斎！訊いてるのか！」

だが、返事はない。

「あ、あのう……」弱々しく、松浦が口を挟んだ。

「なんだ!!」

「彦斎先生、いませんけど……」

「え！？なんだと!？」

二人は立ち止まった。そして、辺りを見渡す。だが、一人がようやく通れるくらいの裏道は薄暗いばかりで、二人以外の人影は認められなかった。思わず、自分たちが逃げてきた方向に目をやる前田だったが、その視線の先には、まるでトンネルのように光が溢れた出口が見えるばかりだった。

ち、と舌を鳴らした前田は、血刀をそのまま鞘に納めると、松浦に言った。



「彦斎を探すぞ!!」

「は、はい!!」

一方の彦斎は、妙な空き地に一人佇んでいた。

途中までは前田たちの後ろを走っていた彦斎だったが、暗い裏道を右に左に進むうち、はぐれたらしい。暗殺に何度も手を染めたが、こんなことは初めてだった。

けれど、彦斎は慌てなかった。方角さえ間違えなければ、目的地に出ることが出来る。そのことを理解していた彦斎は、とにかく庇と庇の間から見える太陽を頼りに、迷路のような裏道を走った。

そして、ついたのが、空き地だった。

なぜか、太陽光が、雨上がりの切れ間のように優しく降りてきている空間。殆ど干からびた白っぽい砂が広がる中、その真ん中には、負けじと葉を広げるオオバコの姿があった。

「なんだ、ここは……」

彦斎は、辺りを見渡した。

分かつてはいる。ここは、京の碁盤目状の都市計画のせいであら上がった、空き地なのだ。そんなことは、京で長らく血刀を振るってきた彦斎には分かっている。だが、分からない。なぜ、この空間は、こんなにも俺の心を捉えて離さないのだ？

「ここか？」

突然、声が響いた。まるで、この世の黒を混ぜるだけ混ぜたような声色だった。前田のものでも、松浦のものでもない。彦斎は、思わず声の方に振り返った。けれど、声のした方には、闇に沈む裏道しか見えなかった。

「ここは」

その声は、今度は彦斎の背後の方から聞こえた。彦斎は振り返るが、その先には、どこかには繋がっているのだらう裏道が、ぼつかりと口をあけていた。

「お前の墓所だ」

不意に、彦齋が睨んでいた裏道の奥から男が現れた。

足を引きずるようにして出てきた男は、抜き身の刀を左手で引っさげていた。見れば、結構上等な着物を着ているが、どこで寝食を重ねていたのか、ひどく汚れている。目は血走り、頭の鬘は乱れていた。けれど、その鬘は、明らかに武家鬘だった。

「おまえは……」

彦齋には、この男の顔に見覚えがあった。

身なりや格好は随分違う。だが、間違いない。

その男は、言った。

「ああ、まさか、忘れたとは言わせないぞ。西神道明。いや、河上彦齋、と言ったほうが正しいか？」

その男は、この前斬った柳と同道していた侍・棚橋だった。

「……なぜ、俺の名前を知っている？」

彦齋の言葉に、棚橋は答えた。

「ああ、彩辻に聞いた」

「彩辻、だと？まさか！」

「ああ」棚橋は、破顔一笑、呟いた。「彩辻に聞いたんだ」

「なるほど、ということは、彩辻殿を斬ったのは、お前か」

「ああ」

棚橋は、右手を、まるで何かの勲章のように上に掲げた。その拍子に、袖がはだけ落ちる。そうして露わになった棚橋の腕の先には、手が無かった。生気を失った腕の先。そして、止血のためなのか、二の腕の端っこで、紐がぎゅっと結ばれている。

「まったく、馬鹿馬鹿しいよな」棚橋は何かを嘲笑うように呟いた。「本当の標的はお前なのに、その前段階で、まさか右腕をなくすことになるとはなあ。まあ、彩辻という奴も、どうやら柳の殺害に一枚噛んでるようだからな。どうでもいいが」

彦斎は、訊いた。

「お前、体は平気なのか？」

棚橋は、鼻につく声で、笑った。まるで、世の中全ての矛盾を笑い飛ばすかのようにだった。そして、その笑いが収まったところ、答えた。

「ははは、平気なわけ無いだろう。お前に斬られ、それで彩辻にも斬られ。でもな」棚橋はまたもや破顔一笑して、続けた。「どうしたわけか、死ぬ気がしない。どれだけ斬られても、もはや痛くはない。どうやら、お前を斬り殺すまでは死ねないようだ」

「そうか」

彦斎は、つかつかと棚橋の前に進み出た。

「ああ、そうだ」

棚橋も、彦斎の前に進み出る。

そして、互いが互いの間合いギリギリに立った瞬間、二人は己の刀を振り出した。

彦斎は、右足を大きく踏み出した必殺の胴抜き。そして、棚橋はどういう剣尖か判別できないほどに乱雑な、まるで棍棒でも振り回すかのような一撃。

その二人の剣尖は、虚空で交差し、ぶつかり合った。そして一瞬遅れ、金属同士がぶつかり合う独特の音が響いた。

どちらかと言えば。彦斎は思った。俺の方が優勢か。

今の撃ち合いは、どちらかと言えば彦斎に分があった。それが証拠に、彦斎の体勢は微動だにしていないのに、棚橋は足一歩分体勢

を崩した。つまりそれは、彦斎の剣と棚橋の剣には、確かな実力差があることを意味している。

「ははは」

不意に、棚橋が笑った。

「なにがおかしい？」

彦斎の問いに、棚橋は答えた。

「俺の方が、優勢だな」

もう一度、打ち合った。彦斎は、片手の袈裟切り。もはや、棚橋のそれは剣を扱う振りではなかった。今度の打ち合いは、棚橋の剣尖を彦斎の剣尖が確実に撃ち払った。

「判らないのか？」彦斎は言った。「お前と俺の剣尖には、これだけの雲泥の差がある。どう見ても、お前の方が劣勢だろうが」

棚橋は体勢を崩しながらも、次なる剣尖を繰り出してきた。だが、彦斎はそれを難なく己の剣尖で打ち落とす。その拍子に、棚橋は地面に倒れこんでしまった。

「……帰れ。お前を斬る気はない」

彦斎は、そう言い放った。

彦斎は、今日の前にいる男を斬る気は全く無かった。佐久間象山を斬ってしまった以上、その護衛を務めていた男など、もはや興味もない。

だが、棚橋は地面から立ち上がり、彦斎を睨みながら、叫んだ。

「じゃあなんで、お前は柳を斬った！」

あまりの棚橋の剣幕に、彦斎には答えられなかった。

棚橋は続けた。

「佐久間先生を斬るのは判らないでもない。だって、あの人は要人だ。あの人を殺せば、確かに時代の流れを変えることは出来るかもしれない。でも、柳一人斬ったって、時代は変わらない！！柳一人斬ったって、日本は何も変わらない。琵琶湖から水を一滴抜いたって、琵琶湖なんだろう！？」

彦斎には、棚橋の言っている喩えの意味は判ったが、同意を求め

るようなその口調に、ちよつと首を傾げた。誰かから、そんな喩え話でもされたのだろうか、そして、錯乱してその人に言っているつもりなのだろうか、と彦齋は思った。

棚橋は叫んだ。

「そうなんだ！お前は、お前たちは、いつもそうなんだ！人間の一人ひとりを水滴くらいにしか考えてないんだろう！？そして、人を斬ってしまったも、「それが日本の為なのだ」と理由をつけてお前たちは得々としている！！」水滴の一滴なのだから、悲しむこととはない」と！！「水滴もまた、次の時代の糧になる」と！でも、だとしても、柳の人生はどうなる！！時代のために死んでも、柳という人間の人生には何の意味もない！！」

彦齋は、心なしか俯いた。

棚橋は、彦齋に歩み寄りながら、続けた。

「なあ、柳の人生を、返してくれよ！！返せよ！！あいつは時代のために死ぬなんて、望んじやいなかった！！普通に生きて、普通に働いて、普通に老いて、畳の上で死にたがっていたんだよ！なあ、返してくれ！返してくれ！返せ！返せよ！」

棚橋は、彦齋の前に立つと、刀を振りかぶった。それこそ、地軸の底まで斬るつもりなのかと疑うほどに大きく。そして、そのまま彦齋に向かって振り下ろしたが、もちろん、それが避けられない彦齋ではない。横に飛んで、その剣尖をかわした。

「返せないんだろ？」

横に飛んだ彦齋の顔を睨みつける棚橋。

彦齋は、棚橋の言葉に答えることが出来なかった。

「返せないなら」

棚橋は、またもや刀を振りかぶって、彦齋に迫り、またもや振り下ろした。彦齋は、それを避ける。

「……あの世で、柳に謝って来い！！」

その棚橋の叫びが辺りに響いた。その瞬間、太陽が雲に遮られたのか、空き地に降り注いでいた光が、不意に消えた。

ここにきて、彦齋はようやく言葉を発した。

「悪いが、まだ俺は死ぬわけには行かない」

「なんだと？」

「俺は」彦齋は言った。「この国を変えたい。そして、この国を救いたい。だから、俺は人を斬ってきた。だから、俺はまだ死ぬない。俺が間引いたがためにたわわに実った、大きな実を見るまでは」

「そしてお前たちは」棚橋は穏やかに言った。だが、その声は、今までの絶叫よりもはるかに深く彦齋の心に突き刺さる。「居直るわけか。“この国を変えるために、犠牲は止むを得ない”と」

「居直れるわけ、ないだろう」彦齋は呟いた。

「なに？」

「きつと俺は」彦齋は言った。「死ねないのだ。あの世の淵から、俺の斬った人間達が覗き込んでいるからな。“俺を斬っておいて、結局何も為せず終わるのか？”と俺に罵声を浴びせかけながら。」

そう、俺は」彦齋は空を仰いだ。その瞬間、雲間に隠れていた太陽が顔を覗かせ、陽光が空き地に降り注いだ。

「夏の星のように、瞬きもせず、燃え続けなくてはならない。たとえこの身を焼き尽くそうとも、俺はこの世で生きなくてはならない」

彦齋は、全身の毛が逆立つような気分に襲われた。それは、自分の言葉の意味の重大さを、重々理解しているからだ。あの自分の口を衝いて出た言葉は、自分の来た道がたとえ間違이었다としても、それを認めるわけにはいかない、という意思表示でもあることを、彦齋自身が一番理解しているのだ。

「そうか」

棚橋は、彦齋に迫った。左手の刀を、既に振り上げている。

彦齋は、覚悟を決めた。

抜き放っている刀を一旦鞘に納め、構えた。そして、棚橋が振り下ろすよりもはるかに速く抜刀し、右足を大きく踏み出し、思い切

りよく斬り上げた。

彦斎の剣は、棚橋の体を二つに分かった。

「おい！彦斎！！」

前田たちが空き地に着いたのは、もう既に全て事が済んだあとだった。前田の目には、まるで円舞曲フルツの舞台のような空き地に、血刀を右手に握ったまま佇む彦斎、そしてその足元に転がる男の死体に、まるで墓標のように突き刺さる刀が映りこんだ。それはまるで、何かの劇の一幕ワンシーンのようだった。

「どうした、彦斎？」

前田の問いに、ようやく顔を向ける彦斎。だが、彦斎は顔を向けるだけで、問いに答えない。

「彦斎先生！」

続いて、松浦が彦斎に声をかけた。だが、目の前の惨状に、松浦は声を失った。

「……おい、彦斎」前田は訊いた。「コイツは誰だ」

アゴで、男の死体を指す前田。その言葉に、ようやく彦斎は答えた。

「……佐久間の護衛で、柳という男が居ただろう？その同僚だった男だ」

「敵討ち、か」

「ああ」

## 【25】 完結

彦齋は、さっきまで動いていたはずの男の抜け殻を眺めた。彦齋の位置からは、その抜け殻が動いていたところには“目”と呼ばれていた球体が見えた。けれど、その球体は、その本来の目的も忘れ、ただの肉塊になってしまった。ものを映すはずの器官には、もうもはや何も映す力は無いのだろう。そして、この男を肉塊に帰したのは、間違いなく彦齋だった。

「彦齋先生！凄いです！」松浦は飛び上がった。「一刀の元に切り捨てるなんて、さすがです！」

「何が凄いものか！」

彦齋は、思わず怒鳴った。

「何が、凄いものか……」彦齋は、もう一度、けれどさっきよりも弱々しく、自分に言い聞かせるように呟いた。

こうして俺は、どんどん後戻りが出来なくなっていくのだな。彦齋は、思った。そして、宮部先生の言っていた、「自分の間違いは認めがたい」という言葉の意味の端を、つかみ取ったような感触を得た。でも、それは知らなくても良かった事なのではないか、と思えてならなかった。

彦齋はため息を吐いた。

「ん？どうしたんだ、彦齋」

ため息の真意を測りかねているのか、あるいは松浦を叱り飛ばした真意を測りかねているのか、ちよつと遠慮気味に聞く前田。

彦齋は、答えた。

「ああ、俺は、初めて大人物を斬ってしまった。いや、真に“人間”と呼びうるものを、斬ってしまった。いや、俺に“人間”のなるとるかを教えてくれた人間を、斬ってしまった」

意味を判りかねた風の前田だったが、とりあえず、といった趣で頷いた。



彦齋は続けた。

「俺は、もう、人斬りを辞める」

「ひ、人斬りを!？」前田は思わず声が上がった。

「ああ、もう俺に、人は斬れんさ」

どこか、憑き物でも取れたようにすっきりと答える彦齋に、前田は訊く。

「じゃあ、志士活動も……?」

彦齋は、首を横に振った。

「いや。俺は」彦齋は、力を込めて言った。「俺は、一生志士だ」

「先生方はこれから、どうなさるんですか」

松浦は、夕闇迫る道すがら、二人に訊いた。すると、二人とも、顔を見合わせて笑った。

「そうだなあ」口を開いたのは、前田だった。「俺は、田舎にでも帰ろうかねえ」

「ならば俺も」彦齋も口を開いた。「熊本に帰ろうか」

「そうですね……」これ以上なくらいに肩を落とす松浦。そのあまりに情けない顔に、彦齋たちは揃って噴き出した。

「なんですか!」ちよつとムキになる松浦。

「ははは、お前、からかい甲斐があるやつだな!」

「同感だ」彦齋は、前田の言葉に同意した。

「ど、どういふことですか?」

前田が、松浦の疑問に答えた。

「俺たちの腹は、もう既に決まってる。……俺たちは、長州兵に合流するんだ」

「え?」松浦は首を傾げた。「長州を見捨てても俺たちは生きなきゃいけない」んじやなかつたんですか?なんで……」

彦齋は、嗤った。

「ああは言ったがな。やはり、長州には見捨てたくない仲間がいる。そして、世話になった者達がいる。そして、そういう奴らが俺

たちを待っている。ならば、それに馳せ参ずるのが人間としての振る舞いだらう？」

「そういうことだ」前田もまた、嗤った。「理屈では、長州に合流するなんてのは、愚行でしかない。でも、あいつらを見捨てるわけにはいかないんだよ」

「で？」

彦斎は、松浦の顔を覗きこんだ。

「で、って……」

困惑顔の松浦に、彦斎は訊いた。

「お前はどうするんだ？」

すると、松浦は困ったような、あるいは諦めてしまったような顔を浮かべた。

「実は、決まっていらないですよ。今更彩辻一派に戻るわけにもいかないです。かといって、志士の方たちにツテがあるわけでもないです……。あゝあ、僕こそ、田舎に帰ろうかな」

「なんだ、決まってるのか」前田は、呆れたような声を出した。「だったら」

彦斎の声が、不意に響いた。前田と松浦は、彦斎の顔を見遣った。彦斎は、言った。「俺たちと一緒に来ないか？」

松浦はじめ、前田までも、え？！と言わんばかりの驚愕顔を彦斎に向けた。

「え？それって……」

松浦の言葉を遮って、前田が訊いた。

「……な、なあ、彦斎。今の言葉、もう一度言ってくれないかい、いや、もう一回でいいからさ」

彦斎は悪びれもせず、かといって気負いもせず、前田の注文に答えた。

「ああ、“俺たちと一緒に来ないか”と訊いたんだ」

その彦斎の言葉を聞いた瞬間、二人は「え！？」を連呼した。

「何を驚く」彦斎は不満げな顔を隠さなかった。「道に迷う志士

がいる。そして、俺は道を指し示すことが出来る。ならば、俺には義務が負わされる。“道に迷う志士に、道を教える”という義務が

「じゃあ…」松浦は、目を輝かせた。  
彦斎は、その目の奥に、夏の星のように弛まぬ志の炎を見つけた。

「ああ、ついてこい」

「やった！やった！」

松浦は、辺りを駆け回った。

「あらら、まるで子供だな」前田はため息を吐いた。

「だが、俺たちにもああいう子供の頃はあった」彦斎は言った。

前田は、彦斎の顔を、まるで初対面の人の顔を覗きこむかのよう  
に、遠慮がちに覗き込んだ。その視線にすぐ気づいた彦斎は、首を  
傾げつつ、顔を覗きこんでいた理由を問いただした。

すると、前田は答えた。

「お前って、そんな奴だったか、って思ってたさ」

「ふん、知らん」

「だが彦斎、お前、人斬りを辞めるのはいいが、これからどうす  
るつもりだ？」

「そうだな」彦斎は、さっきからずっと走り回る松浦を目で追  
いながら、答えた。「俺は今まで、小さな実を間引く仕事をしてきた  
だが、これからは」

「これからは？」

「これからは、大きな実を育て上げるような仕事がしたいな。そ  
して、その大きな実を、世に問えるような、そういう人間になりた  
いな。長州の、吉田松陰先生だって、志士だろう？ならば、実を育  
てるのだから、立派な志士だ」

「そうか」

「かく言ってお前はどうかんだ、前田」

「俺か？」前田は困惑した表情のまま、頭を掻いた。「そうだな、  
あんまり何をしようって決めていないんだよなあ。困ったもんだ」

「人斬りはもうやらないのか？」

「はは、馬鹿言え。俺は、お前あつての人斬りだ。お前が人斬りを廃業するなら、俺も廃業だ。まったく、お前のせいで失業だよ」

「悪いな」

「は、冗談だよ」

「……なんだ、冗談か。じゃあ、どうするんだ？人斬りを続けるのか？」

「いや、そこは本気で言ったんだ。……人斬りは廃業、結果失業でも、今更家中に帰るわけにもいかないし」

「そもそもお前、帰る家中があるのか？」

彦斎の問いに、前田は答えた。

「あ？俺、因幡松平の家中だぜ？一応籍は残ってるはずだ。…家中の連中とはそりが合わなくて、半ば放置されてるけどさ。今、どこの家中も人が足りないからな、きつと俺みたいな奴が今更戻っても、喜んでくれるんだろうな」

「そうか」

「でもまあ、決めた。これを期に、俺、家中から抜ける」前田はまるで踏ん切りをつけるように「脱藩」を口にしつつ続けた。「んで、今まで通りお前についていくとするか。お前の周りに居れば、楽しいことも多いからな」

「楽しいことか。これからは、地味な活動になるから、楽しくはないだろうが」

「は、何言ってるんだ。俺はお前さえ居れば、どんなつまらない日々でも楽しいだろうよ。お前には悪いが、俺が死ぬかお前が死ぬまで、お前について行くぞ」

前田は、これ以上ないほどに真っ直ぐな笑顔を見せた。

「あ、前田先生のお言葉、僕も同感です！！」

走り回っている松浦も、真っ直ぐな笑顔彦斎に向けた。

彦斎は、宵闇迫り墨のような色が塗りつけられていく京の街の色を、ただただ目に焼き付けていた。

彦齋たちは、この後歴史の大きなうねりに飲み込まれることになった。

彦齋たちが合流した長州兵は、結局その数日後、幕兵と衝突することになってしまった。その結果、長州は、幕兵の背後に控える禁裏に弓を向けた「逆賊」と扱われることになった。

そして、長州は二度も日本中を敵に回して戦争をせざるを得なかった。

その激動の流れの中で、いつも気さくに笑っていた前田が、彦齋の前から姿を消した。彦齋に、形見の品を慎ましやかに残して。そしていつからか、少年のように八二かんでいた松浦もまた、彦齋の前から消えていった。形見すら残さずに。彦齋は、仲間が去っていくたび、慟哭はおるか、涙一つ見せなかった。彦齋は、ただ可能性を信じた。新しい時代の可能性を。そして、それまでは涙は見せまいと、歯を食いしばり続けた。

そして、新時代がやってきた。

けれど、その新時代は、彦齋の意に沿う時代ではなかった。だから、彦齋は新政府の首脳になれるだけの人脈がありながら、栄達の道を蹴り、熊本で塾を開いた。

よくそこで彦齋は塾生たちに言った。

「俺は昔、実を間引いてきた。それが正しかったとは思わない。

正しかったことが判らないからこそ、俺は今、実を育てるべく生きている」

だが、そんな彦齋を、時代は許さなかった。

中央政府に危険視された彦齋は、無実の罪を着せられた上、一切の取調べもなしに、斬首と相なった。

「今日は、晴れているな」

「私語を慎め！」斬首の執行人が、彦齋に言った。

彦齋の膝の前には、首を落とされたあとに、残った体を突き落と

されるべく掘られた、深い穴があった。それはまるで、地獄に続く洞窟にも見えたし、極楽に続く階にも見えた。

「いいではないか」彦斎は言った。「どうせ、その私語とやらは、あと一刻もしないうちに訊けなくなるのだから」

ふん、と執行人は鼻を鳴らした。「佐久間象山を白昼堂々切捨てた、あの河上彦斎が私語とはな」

「なあ、君」

「私語を慎め!!」

「まあ、いいではないか」彦斎は続けた。「訊くが」

「なんだ」

「お前に、志はあるか」

「さあな」執行人は、刀の目釘の様子を確認しながら答えた。

「志がないなら、夏の星を眺める。そうすれば、志が何たるか、わかるだろう」

「ああ、そうかい」執行人は、少し緩んでいた目釘を、コンコンと指で叩いて奥にやりこめながら答えた。

彦斎は、ふう、とため息を吐いた。

そして、どこまでも続きそうな空を仰ぐと、誰に言うでもなく、呟いた。

「俺は、夏の星のように、弛まぬ志を誇れたか？」

私語を慎め!という、役人の声が、彦斎の耳に入った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9689d/>

---

夏の星～河上彦斎異聞～

2010年10月13日04時17分発行